

清水長一郎遺文集3  
( )

清水長一郎遺文集3

# 目

一、 印南めぐり私記	1
一、 南海バス争議に時の氏神を待つ	11
一、 寺地武雄氏を惜しむ	12
一、 亀山遊園についてお願い	13
一、 和歌山染色工業界の恩人	
土橋房之助氏略傳	14
一、 井上豊太郎先生の	
徳本上人傳を薦む	16
一、 亀山城趾から法林寺まで	18
一、 雨の鹿ヶ瀬越え	25
一、 川辺町の歴史	32
一、 船津・高津尾巡り	33
一、 仙境龍神温泉	44
一、 「随想みなべ」に寄せて	52
一、 「七・一八水害誌」を読んで	53
一、 野口あちこち	55
一、 しつぺがえし	62
一、 南部川村の秋	63

# 次

一、 小山権現趾を訪ねて	70
一、 あまのじゃく	76
一、 コーヒー讃	77
一、 春の重山	78
一、 川中の史蹟を探る	84
一、 雑説牧野兵庫伝	90
一、 城戸医伯家蔵の	
善妙寺焼に就て	96
一、 由良文化会の発足にあたって	99
一、 寒川ドライブの記	103
一、 笑い祭三題	109
一、 はまゆう雑記	111
一、 高尾英吉氏を憶う	114
一、 有馬皇子の	
「結松」の歌について	116
一、 由良町畑の六斎念仏について	122
一、 おらが国の夏蜜柑	126

# 印南めぐり私記

「紀州新聞」昭和三十二年十二月三・四・五・七・八・九日掲載

十一月二十三日午前九時三十九分印南駅で降りる。初冬とは云え風のないおだやかな日射しは、この古い港町の史跡を訪ねるにふさわしい。二日続きの休みが却って悪かったのか、神田耕一郎・丸山音松・井原武の三氏に私を加えて四人。駅頭には小谷緑草氏が迎えて呉れた。私達は駅前の通りから左に折れて、印南川沿いに宇杉八幡社の方へ歩いた。何時も元気に私達を指導してくれた高尾英吉氏が、秋から少し健康を害われて、見えないのが淋しい。

## 大日本除虫菊株式会社日高工場

駅前の広い通りの左右には、大日本除虫菊株式会社の大きな倉庫が幾棟も並んでいる。折柄その倉庫の一つから、大勢の女の人や子供達がリヤカーでボール紙を運び出し、めい／＼の家庭へ持ち販る姿が見られた。これは香取線香を入れる函を内職につくるためで、町全体で月額五十万円、家族も応援するが、手早い人で月一萬円位の収入になるという。とかくするうちに除虫菊工場の表まで来た。

この会社は大正六年(一九一七年)八月日高除虫菊会社として設立された。その後昭和三年(一九二八年)事業不振で大日本除虫菊株式会社の傘下に入ったが、戦後大阪工場や尼ヶ崎工場の焼失や接収のため急速に拡張され、現代では建坪七百坪、敷地千三百坪、従業員も百名に近く、年産三億円、この三億円という金額は印南町の他の全産業の収益に殆んど匹敵し、今では町収入の大宗であるという。

史蹟顕彰会の記事の中に除虫菊会社の事を持ち出すのは如何にも不釣合いであるが、私達と雖も霞を吸うては生きられない。否私達が探訪する史跡は取りも直さず私達の先祖が、如何に食い・如何に着・如何に住み、そのあげくがどんな文化を遺したか、信仰や藝術がどう父祖の生活につながっていたかを知るためであるとも云える。従って私達は近代産業にも深い関心を持っている。

私は小谷氏の説明を聞きながら、日本という国が農業だけでは立ち行かないのだから、工業をおこすことがどんなに大事かと考えた。この意味で私達が期待した石油工場の誘致が、怪しくなつたと聞いて実に残念な気がする。話が柄にもない方向に外れた。もとに戻そう。

## 宇杉八幡宮

八幡社は印南町字北谷にある。鉄道線路の直ぐ傍で、車窓からはいつもそのこんもり繁った森を仰ぐのだが、参詣するのは始めてである。「紀伊続風土記」には「正八幡宮村の北にあり宇杉、光川、東山口三カ村の氏神なり（中略）神宮寺、宮の側にあり。真言宗古義印南原村龍法寺末」とある。「日高郡誌」によると、もと社殿の前に根廻り四丈五尺、目通り二丈余という樟の大樹があった。樟脳をとるためこの樟を伐り、根を掘ったところ、一丈ばかり掘ったが猶人工で埋立てた形跡があり、土器も出て来た。今も附近に古墳らしいものがある。また湯川政春の寄附した刀もあり、餘程古い宮であろうと書いてある。

本殿八幡社の外に神社合祀の際各地の小社を合祀したもので、境内の榎の大樹の下に一基の記念碑があり、それには

大將軍社 光川

富神社

春宮神社 本郷

大歳神社 山口

弁天社 宇杉

戎社 本坂

裏面に明治四十一<sup>（一九〇八年）</sup>年移転及び合祀と刻まれている。榎の側にかなり太い木鹿の木がある。その名の通りちようど鹿の背のように斑になっている。去年中田宇南氏等と藤白越をした時も、峠で見かけた木で、同行の田端憲之助氏から木鹿の木と教えられたことが、懐かしく思出される。

境内大將軍社は私の居村川辺町矢田地区辺りでは、印南の東軍さんと称し、今でもかなり信者がある。小谷氏の説明ではこの社に握り飯を供え、そのお下りを食べると歯ぎしりが治るとの信仰があるという。面白い土俗信仰である。境内三百八十一坪、折柄散りしきる木の葉を女の人が掃いていた。

## 東光寺

宇杉八幡宮を辞した私達は東光寺へ向う。町中の細い小路の間をぐるぐる廻ったので、今では何処をどう通ったのか思い出せない。寺の表まで来ると自転車飛ばした高野光男氏が追いついて一行は六名になった。

東光寺は寛正年間（一四六〇年）に明秀光運という僧侶が開基したと云うが、寛文頃（一六六〇年）までの沿革ははっきりしない。古い云い傳えでは、日高町萩原に東光寺という七堂伽藍があり、これをこの地に移したもので、今も萩原に東光寺と呼ぶ地があるが、そこがその跡だという。中興の祖を理想理念と云い、この人が晩年境内の薬師堂に隠居して宝寺庵と云った。その次の江嶽良南の代に、紀州第一代の藩主徳川頼宣公が薬師堂に参拝あり、実想・江嶽の二人を引見され、色々の御下賜があつた。それから最早三百年余りになるが、恐らくその日の華やかな光景を知っているだろうと思われる竹柏の大木が境内入口に聳えている。内部がすっかり空洞となつて、今は樹皮のみで生きているが、幹周約九尺八寸・樹勢猶旺盛、昭和四年（一九二九年）天然記念物の指定の名木である。

住職島田一義師が見えて、薬師堂を開扉してくれた。本尊薬師如来の前に、印南が生んだ有名な湯川松堂画伯が、十三才の時描いたと云う、小栗判官照子姫の額が奉納されている。傳説によれば賊の毒酒のために身体の自由を失つた小栗判官が、照子姫の挽く箱車に乗つて、関東からはるばる紀州路に入った。そしてこの薬師堂に参籠すること二十一日、その最終の二十一日目の夜、うとくとまどろむ判官の枕頭に、この薬師如来が立たれて熊野参詣のことを告げられたという。

小栗判官が熊野参詣をしたかどうかは估くおくとしても、彼は決して架空の人物でないことは諸書の説くところ、それがどうしてこの寺に結びついたか、蓋し興味のあるところである。私達はここで薬師如来を拝している、小谷緑草氏が堂の片隅から古い俳句の奉献額を持ち出して来た。

薄く消えた文字を辿ると

〇〇三千吟集勝集

浪速免哉楼婆東撰

とわずかに読まれ、寛延三年（一七五〇年）の年号があつた。これは二、三年前小谷緑草氏や中田宇南氏と来た時も一寸見たもので、日高俳諧史の資料として面白いものだが、何分にも風雨にさらされて、とても一時間や二時間では読めそうもない。然し根気強く工夫すれば、今のうちなら読めぬ事もなからう。小谷氏に読んでみてほしいと頼んでいるが、彼は中々御輿をあげない。

私達は薬師堂の椽に腰を下ろして四方山話をした。島田一義師の話に、寺にはもと梵鐘もあり戦争で供出ししたが、それはたしか享保十二年（一七二七年）とあつたという。そこで享保十二年のものなら若野でつくつたのではなからう

かと聞くと、如何にも若野の銘があつたと答えた。  
当時川辺町若野には津村正重という鋳物師がいて、日高地方の梵鐘を多くつくっている。私の知っている限りでもその数は十数個に上るが、戦争で供出しなかつたらもつとあつた筈だと想像していた。果たせるかな此処にも一個でて来た。幸い鐘銘の写しがあるので、それを知らしていただくようお願いして山を下る。  
折柄境内の枝垂椿の花が、風もないのに、輪散つた。

## 安政津浪の記録

東光寺を出た私達は直ぐ側の小谷緑草氏の新邸に招じられて、温かい紅茶と生菓子をお馳走になった。朝から歩き続けた咽喉に、心蓋しの紅茶がとても美味しい。小憩の後今度は光川に向う。道がまた家と家の間の小路に入つてとてもややこしい。やがて春宮跡に出た。

ここは旧印南町役場のやや東南の地であつて、明治四十年（一九〇八年）の合祀まで春宮社の鎮座の地であつた。かなり大きな記念碑が立てられ、表に

東宮神社遺跡

とあり、裏には

元弘ノ昔大塔宮御足ヲ休メ給ヒシ地

紀元二千六百年記念

本郷区建立

と刻んである。もとの拝殿の建物がそのまま残つて、今住宅になっている。

そこから私達は一旦印南の表通りへ出る。印南川の東に沿う商店街であるが、この通りの中程通りの西側に「橋本」という薬局がある。小谷氏は私達をこの商店の倉庫に案内した。倉庫内の壁板に、安政の大津浪の記録があると云うのである。成程倉庫に入ると直ぐ目につく左側の壁板に、墨痕淋漓と云う形容はこの場合おかしいが、太い達者な文字で次のように書きつけてある。

小谷氏の話ではもともとここに「かめ屋」と云う店があつたが、その後初代印南郵便局長の家となつた。これを書きつけたのは恐らく「かめ屋」の主人で、そのころは土蔵であつたが、今の橋本氏が買いつつて、昭和二十六年（一九五一年）土蔵を壊し倉庫に建てかえた。「津浪心得」はその土蔵の壁板に書きつけていたのだが、土蔵を取

り扱ったときも、先人の志を尊重してのこしておいたのであるという。少し意味のわかり難い処もあるが、小谷氏の写しを借用する。

嘉永七  
（一八五四年）  
安政元寅歳

彌兵衛

右は書置之事、扱寅六月八日大志しん並すゞ波打入十一月四日には俄に大つなみ〇〇川口よりはしつめ迄皆ながれ家は八幡様へ坂本、本郷皆ながれ候、その時東宮の上へにげ寔になんぎ致候、扱浜方も皆ながれ光川宇杉上ヶ三ヶ村は波はいり候共残り候、その時此蔵は残りそのあと皆ながれ候、この蔵はむねつかり候〇末石家石かけ皆ながれ候、扱手前しらせは大じしんすゞ波御座候、その時ゆだん致皆なにもかもながし扱百八十年載めてくるとの事午前二ハしらせ御座候そのときなにもかも此上へあがる可候、其時諸村に人志に御座候  
先々何分波置之事  
以上

慶応〇載八月八日

扱大波大書大水つなみより十三年め此町へ波あがり印南裏半分ながれて

右之通此板古也候て書なおし可置候 以上

この記録のうち、〇〇川口とあるのは印南川口の事であろうし、はしつめは橋詰で印南橋の詰の事、此蔵むね切つかり候は胸切りか、棟切か私にはわからない。〇末石家石かけは礎石と家の石垣という事、すゞ波と云うのはどういう浪か、農村に育った私にはわかりかねる。

また始めに十一月四日に津浪が来たとあるが、これは五日の誤りと思われるが、同地印定寺の高浪溺死靈魂之碑にも、四日午之刻に大地震があり、同末の上刻津浪が来たとあるのはどうした訳であろうか。このとき老若男女の流死する者、凡そ百七十有余人と碑にあり、以てその激しさが思いやられる。何れにしてもその文章は素朴だが、後世のために遺された志を感謝しなければならぬ。

光川王子趾

光川王子趾については「和歌山県聖蹟」と云う書物に次のようにある。

江戸時代の熊野参詣道は印南町に入つて、縣道と岐れて県道よりも南の方、旧印南町役場の裏手を通り越えて、大字光川部落の中央を貫いて富川に達し、県道と合する。御幸当時鎌倉時代の街道は、この旧街道よりももう一つ山手の方の、字御所平と大將軍の辺りを通つて、大体今の紀勢西線に沿ひ、線路と旧街道の中間を通り、切目村領近くで旧県道である江戸時代の街道と合した。

御幸道に沿うて印南町の北側に大將軍という字名があり、此の東に接して森平と云う所がある。そしてその森平に御幸通より約一町程北に、大將軍社が建設されていたのであり、この社こそ御幸時代のイカルガ王子社の趾と推測される。御幸通に沿うた印南町の神社と云えば、山口八幡社があるが、これは菅田王子を祭神とする所謂八幡社であり、またイカルガ王子のイカルガは光川から来たものであるから、イカルガ王子は光川に所在したと見ねばならぬ。こう考えると王子神社と推定される神社は大將軍社の外にない。この森平に鎮座した神社は今も字名に残っているように「大將軍」さんとよび、また「森の宮」とも「大明神さん」ともよんでいる。今も土地の人が「大明神さん」とよんでいる点は注意しなければならぬ。又「森の宮」と云うのは附近が開拓された後も社地に森があつたためであらうし、「大將軍さん」とよぶのは、所謂後世の民間信仰である大將軍信仰から来て、通称となつたのである。大將軍社は役場の土地台帳を見ると、森平三五九番地にあるが、明治四十一年（一九〇八年）に山口八幡に合祀された。云々。

今の私には此の「和歌山県聖蹟」の記事の中の、山口八幡云々とあるのは、多分宇杉八幡社の誤りであろうと云う外、付け加える知識はない。結局イカルガ王子はもとは森平にあつたが、後印南町字内垣内三四五〇番地に遷され、そこは富の川の近くであつたので富の川王子とも云われた。そして明治四十一年に宇杉八幡に合祀されたのである。然し森平にも、内垣内の旧趾も今は畑となつて、当時を偲ぶものは何一つ残っていないが、内垣内の方には数年前、宇杉八幡社から別れた光川神社が祀られていると云うが、私達はお参りしなかつた。

光川の部落から海岸沿いの国道を、町の方へ引きかえす途中、国道から丘陵へかかった坂道の中腹に、多分江戸時代の熊野街道と思われる処に、極めて新しく祀られたと覺しい小祠が目についたので、坂を上つて見ると、数個の五輪塔や名号石のようなものであつた。その一つに一空上人とあり、側面と裏面にも何かあるようだが、小さな小堂のことで読めない。これについて里傳を聞くと、

何時のころか、里人は川善の七代前と云うから江戸時代の末と思われるが、一人の比丘尼があつた。こ

の比丘尼はどうした事情があったのか、江戸へ出たまま、久しく生家への音信がなかった。その比丘尼から或時便りが届いた。家人が待ちかねて開いて見ると、それは比丘尼の訃報であった。そこで川口家ではその訃の手紙を、多分戒名でも認めてあったのであろう、それを埋めてその上に一基の碑を建てた。これが、今の一空上人云々とある碑の由来である。一空とはどんな人か、比丘尼とはどんな関係のあった人か、また此の里傳が正しいものかも私は知らない。ただ聞いただけを書きつけて見た。

## 叶王子趾

次いで私達は津井王子趾を訪ねた。ここは印南町大字印南字法華堂七四五番地にあたり、昭和十年(一九三五年)県史跡に指定されているが、実は後世になって他より遷されたもので、御幸時代の王子社は、ここから七、八町津井の方へ戻った津井領の王子田とよぶ処だと和歌山県聖蹟にある。此処へ遷ったのは何時ごろの事かはっきりしないが、寛文年間(一六六〇〜一七三〇年)の「熊野詣記」を見ると、ここに祀られていたようだから、江戸時代の初頭には既にここに遷っていたと思われることもある。

そしてその王子もまた明治四十一年に山口八幡社に合祀されて、今は社地の森と苔むした石垣と、大正三年(一九一四年)一月に建てられた記念碑があるばかりである。まことに今昔の感が深い。

## 翁の面

私達は叶王子趾を辞して要害城趾に向かった。途中で小谷氏は、「あれがおさよと与一」が(一七六四〜一七二二年)明和の昔「心中した所」と印南湾頭を指さした。二人が身を投じたという磯辺では、何ごともなく初冬のおだやかな陽を受けて、浪が戯れていた。

要害城趾は印南町西部の小丘陵で、城主湯川右衛門太夫の碑を伝える、高さ三尺ばかりの五輪塔がある外、当時を偲ぶものは一つもない。のみならず、右衛門太夫についても、湯川の支族という外、何も知られていない。山を下ってその後裔と伝える、「おきな屋」こと湯川氏の家を訪ねる。

この家は曾て浪華画壇の重鎮であった湯川松堂画伯の出た家である。松堂は明治元年(一八六八年)六月十日この家に生まれ、幼少にして画才を顕し、昭和三十一年(一九五六年)秋八十八才で歿するまで、多くの傑作を遺した。私の友人柳道成も

曾てこの人に師事したという因縁もあり、忘れ難い人である。

この家には「おきな屋」の屋号でも知られるように、古い「翁」の面が秘蔵されている。また天保(一八三〇～四四年)ごろに書二写された湯川氏系図もある。翁の面は黒漆で塗られ、裏面に「天正五七八年六歳寅六月、三番双」と墨書されている。天正五七八年六年と云えば、湯川氏は直春の時代で最も勢力のあつた時代である。

この面の由来は詳かでないが、今も山口八幡神社の祭祀に用いられ、また湯川家が渡御に参加しなければ、式が出来ないという処から考えると、恐らく丸山湯川家に傳わたたものを、支族のこの湯川氏に贈られたものと思う。従つてこの面はかなり古作であろうと思われる。

山口八幡宮の祭祀の渡御がくり出されると、湯川家の夫妻は男はかみしも袴、女は「かづき」姿の正装で、印南川にかかる橋のたもとまでこれを迎え、神輿に献盃する儀式が今も行われ、この時次の神歌を歌う。

男山く榮る御代は久方のく

月は雲らじ秋は宛(さながら)申成らん

神祭るく北はいつかなるらんく

いつかそろくいつも面影

かげ見れば三五夜中の月は

今宵なるらん

また湯川家の記録の中にはこのことを

右御祭礼之節途中迄御向い御盃に罷有に付三方しとぎ餅七籠

男は麻上下着用女被口

右之通御御座候

とある。これについて当家は古く酒屋であつたため、八幡社の神酒を献じたに由来するらしいという話であつたが、里傳に山口八幡社はもと津井にあり、何時の頃か山口に遷るとあり、この遷座は恐らく要害城主湯川右衛門太夫の関与であるべく、そんな関係が今に傳っているのではないかと考えているが、どうであろうか。

## 与「おさよ」の比翼塚

愈々今日最後の訪問地印定寺に行く。印定寺は印南の中央にあつて、同地では一番大きな寺である。昔のこ

の地に真言宗の弘誓寺という寺があった。慶長年間（一五九六—一六一四）のこと知恩院の第二十九世満誉が熊野参詣の途中、弘誓寺へ立ち寄って浄土宗の法議を説いた。浦里の群集はこの説教をきいて深く浄土門に皈依し、ここに弘誓寺は浄土宗に改宗し印定寺となった。今の本堂と楼門は寛政年間（一七八九—一八〇〇）當寺第十一世の至誉候弁の時代に改築したものである。これが印定寺のざっとした沿革である。

さてこの印定寺の山門をくぐると直ぐ右手に、有名な与一・おさよの比翼塚がある。塚は昭和三十年九月（一九五五年）に建てられたものだが、比翼塚に並んで古く苔むした与一の碑がある。

有田みかんと

おさよの心中

聞こえわたらぬ島はない

今もこの町でうたわれる、与一、おさよの情死事件というのはこうだ。

明和年中（一七六四—一七七二）と云うから今から二百三十年ばかり昔、印南浦に角屋とよぶ分限者があつた。多くの田畑を耕し、また漁業方面でも二十五人乗りの漁船七十餘隻をもち、堅魚節を製造しては京、大坂はもとより、遠く江戸表まで売り出していた。浜辺には角屋の土蔵が幾棟も並び、家には幾十人かの下男下女がいた。

おさよはこうした女中の一人であつた。同じ印南浦の桶の娘であつたが、年は十八気だて素直な美人であつた。このおさよは何時か角屋の一人息子与一と恋に落ちた。しかし身分や財産のやかましい封建制度の世の中である。如何に二人が愛しあえばとて、一方は印南浦切つての角屋の一人息子、片方は貧しい桶屋の娘ではとうてい添い遂げられる筈がない。

与一は幾度となく両親におさよとの結婚を願つたが許されない。二人のひそかな語らいが重なれば重なるほど、思慕の思いはつのるばかりである。今時の若い人ならそれ程愛しあつた中であるなら、家も財産もふりすつて飛び出すという方法もあるが、万事堅苦しい世の中では望むべくもない。まして与一は大家のお坊ちゃん、家をすつて荒い世の中を渡る自信もなかつたろう。

思いあまつた二人は、この世でかなわぬ恋を、来世で遂げようと相談した。ちょうど八月十二日の夜、印定寺では宵から佛事がつとめられた。角屋の主人甚三郎夫婦は、印定寺の大旦那として早くから出かけた。この機会に、二人はしめし合てこっそり裏木戸から逃れ出た。風のない静かな夜で空には十二日の月が明るくかかっていた。

二人は浜へ出た。おだやかな女波男波が月の下で戯れていた。一步步二人の歩みはおそかつたが、何時か

浜もつきて磯辺へ出た。二人は今さらながら過ぎて来た幾年月をふりかえった。然しいくらふり返したとて、結ばれる術のない二人であった。思えば悲しい運命であった。

ちようどこの頃、印定寺の佛事を終えた津井の和尚がこの涙を通りかかった。何時もは何気なく通るのだが、何か胸さわぎを覚えた。ふと立ちどまると磯の方で若い女のすすり泣きがしたように思った。然し気のせいだろうか。そのままだ道をいそいだ。

二人がしっかりと抱き合ったまま身を投じたのはそれから間もなくであった。時に明和七年八月十二日の深更、おさよは十八、与一は二十七才であった。

その翌年、十月十二日夜、息子を失った甚三郎は、おさよと与一の追善のため、印南浦の人々一人残らず印定寺に招いて盛大な施食会を催し、お寺へは永代供養料として金子二百両と田地二反余を寄進した。またその施食会に使った朱塗りの膳・椀・食器類も寺へ納めた。

私達は本堂にまつられている二人の位牌と、角屋が残した膳・椀を見た。位牌は高さ二尺余りの立派なもので、表に

天誉了念信士

清顔明好信女 施食

と二人の法名があり、裏には

詞堂施主

角屋甚三郎

十一代 至誉上人代

と書いてある。私はこの位牌に書かれた、おさよの法名「清顔明好信女」から、まだ少女の気の抜け切らぬ、やさしく清らかな一人の娘を思いうかべる。また印定寺に今も傳わる角屋寄進の食器類の鮮やかに沈んだ朱塗りの色を見て、何時の世にも変わらぬ人の心の美しさを感じた。

それから後二百三十年、毎年十月十二日の夜は、与一とおさよの悲恋の昔を偲び、二人の冥福を祈る人々が集まって、供養の施食が続けられて、今日に至っている。

まだこの話には後日譚がある。明和八年十月十二日、この世で結ばれなかった二人の恋を許し、二人の追善供養の施食会を営んだ甚三郎は、浦筋切つてと云われた財産をすっかり甥にゆずり、自身は幾人かの奉公人を連れて土佐に渡り、堅魚節の製法を彼の地に伝え、ついに土佐の地に終わつたと云う。今も高知縣清水市松尾の港には、旦那の墓と呼ばれる墓碑が二十七基あり、紀州人の墓と伝えられ、里人の尊崇を受けていると云う

が、これは恐らく明和の昔、印南浦から渡った角屋甚三郎と、その従者の墓碑だろうとのことである。何にしても与一・おさよの恋物語は小説よりも悲しい史実である。 — 完 —

## 南海バス争議に時の氏神を待つ

「紀州新聞」昭和三十三年一月二十四日掲載

十三日附貴紙掲載の南海バス争議に対する会社側と労組側の声明書を読んで、両者の主張が大体わかりました。これで見ると矢張り会社側の云い分が理屈としては筋が通っているようです。然しそこには一片の温かさもないように感じられる。好機逸すべからず、この機会に首にしてしまえという冷酷さが感じられます。大勢の人を使用するにはもう少しの温情と寛容さがほしいと思います。また労組の云い分も、少し会社に甘えていませんか。慣例とは云え平素会社と斗争々々とやっている者が、会社のバスを私用するのもおかしい。また無断欠勤ではないが、欠勤の際の連絡も不充分であったようです。然し第三者がこんな批評をした処で餘り役に立ちますまい。それよりも私はせっかくここまで成長した労組がストの泥沼で精力を消耗してしまふのを気の毒に思いますし、またしつかりした基礎をもった事業場の少ない御坊市の事業界の大きな存在である南海バスが、こんなことに目くじら立てて会社の土台をぐらつかせるようなことがあつては、御坊市にとつても大きな損失でしょう。それにまして大切な人命を預かる運転手諸君が、神経を使いすぎて万一事故でもおこすようなことがあれば、それこそ取返しがつかぬと思います。従つて物には潮時と云うものがありますから、もう少し時期を見て、誰か有力な第三者が、例えば御坊の新聞記者団とか、市議会か・市長か・地方事務所長か・県議団か、誰か調停をしてくれる人はないのでしようか。どちらも余り傷のつかぬうちに、そうした気運をつくつてほしいと切望します。全く社会のためです是非一考下さい、お願いします。私は元来こんなことに口出する程の見識もないし、時間もないが一方ならず気になりますので一寸申上げました。

また数日前の余滴に、高垣社長がワンマンで気に入らねば、さっさと辞めたらいいではないかという意味のことを書いていましたが、あれは苦労人の貴男としては少し腑に落ちない言葉ではないでしょうか。成程理屈はその通りです。然し理屈通り行かぬ処に、世の中の難しさがあるのではないのでしょうか。

余滴子 Ⅱ さっさと辞めたらよい——とは巷間一部の人が言っていると書いた物であつて、余滴子の主観では

ありません。

## 寺地武雄氏を惜しむ

「紀州新聞」昭和三十三年二月十三日掲載

寺地武雄氏が農林省統計事務所御坊出張所長を辞められて近畿大学農学部教務課長に就任された。二月八日偶然汽車でお目にかかりそのことを聞いた。

私は寺地氏とは親交という程ではないが親しくして頂いた。何かの用件で公社へ来られた時はじめてお目にかかったと記憶するが、その後「紀州新聞」へ時々寄稿されたのも拝見したし、私が目下編纂中の「矢田村誌」のことでも色々御世話になった。

○  
従来世に行われている村誌や町誌の中には、産業篇等米産額頗る多しとか、柑橘産額多く産すと書いたのを時々見る。村誌もこんな風によくと世話はないが、それでは三文の値打ちもない。どうしても数字をつかまぬと役にたゝぬ。然し正確な数字を知ることが容易ではない。殊に戦後は税金や供出の關係で農産物の実態は局外者には中々わからぬ。そこで私は村誌を書くに当って農林省統計事務所に依頼した。統計事務所の数字と雖も決して間違いないとは私も思わない。然し今の処最も真実に近いものだと思っている。

○  
寺地氏は面倒な私の申出を快く引受けて呉れた上、部下も督励して色んな細かい統計を送って呉れた。私はそれ以来寺地氏を深く徳としている。

○  
寺地氏は元來教育畑出で、戦前朝鮮で教育界におられ、農林省へは戦後は入られたと聞いた。長く外地に居った人によく見る植民地ずれのしたような処は何処にもなかった。何方とか云えば、役人タイプと云うよりは学究的な人柄であった。それで普通の役人とは違った統計というような、じみな細かい仕事にも適した人のように私は思えた。然し今度は寺地氏本来の教育畑に返り咲かれ、存分の手腕を発揮する機会を得られて、御満足と思うし寺地氏も私達も嬉しい。心から御祝い申し上げたい。と同時に私は寺地氏のように誠実な統計所長を失ったことを残念に思う。

○ 毎日の新聞紙を見るまでもなく、戦争後は世もあくどくなつたが、役人にも悪どい人物が多い。統計事務という極めて地味な仕事の世界へさえも、そうした誘惑や圧力が絶対ないとは云えないらしい。こんな時寺地氏の如くこの世に最も缺けている清廉の士を失うのは惜しみて余りある。が人各々には其道がある。本来の道を歩まれてこそ真價が輝くであろう。寺地氏よお元気に。勿忙の間無雑な文字を連ねて恐縮であるが、一言饌けの辞をお贈りする。

(昭和三十三年二月十日夜稿)

## 亀山遊園についてお願い

「紀州新聞」昭和三十三年二月十五日掲載

新聞紙の奉ずる処によると、御坊市当局が今度亀山につつじや、桜を植え込んで、遊園地にする計画だと云う。高さ百米余、女や子供でも楽に登れるし、頂上に立てば日高平野を一眸におさめ、煙樹浜の松原越しに紀伊水道を望み風景絶佳の地、これと云う遊園地らしいものをもため御坊市民にとつては、確かに有難いことだと思ふ。私もこれに文句をつける気は毛頭ない。然し遊園地化するに当って、一つお願いしておきたいことがある。

○ それは出来るだけ現状を破潰しないで貰いたいと云うことである。こと新しく持出すまでもなく、彼処はその昔、日高地方を中心に南紀の覇者であった湯川氏累代居城の跡である。湯川一族が嘗ての日高地方の産業や文化の上に、どれだけの影響をもたらしたかは、姑く問わない。とに角その遺跡である畳趾や石垣は今の処、わずかながら残っている。潰すのは何時でも潰せるのだから、植樹や整地に当っては充分注意して出来るだけ現状を損じないようにして貰いたい。嘗ては本県の指定を受けていた大事な史蹟でもある。

○ 幸にして植樹作業には地元湯川中学校の生徒が申し出ていると聞く。中学校には歴史に明るい寒川万七氏が居られる。また委員の中には郷土に深い関心を持たれる玉置精三氏もおられる。滅多なことはあるまいが気になるので、よけいなおせっかいを申し出てみた。宜敷くお願いしたい。(昭和三十三年二月十一日宿直の夜)

# 和歌山染色工業界の恩人

## 土橋房之助略傳

「紀州新聞」昭和三十三年一月二十三日掲載

### ①

話は少し古いが昨年十一月三日、池田良輔、土橋房之助の兩故人が、文化功勞者として和歌山市から表彰をうけ、このうちの土橋氏は日高郡名田町の出身であると、各新聞は報じた。

ところがこの記事を見た大勢の人は、極く一部の人を除いて土橋氏の名を聞くのははじめてであったばかりでなく、日高郡からそんな傑れた人か出ているとは考えたこともなかった。実はこういう私も、人一倍郷土のことに関心を払っている心算ながら、あの日の新聞記事で初めて土橋氏の、先覚者としての存在を知ったような訳であつた。

然しその後表彰を受けた土橋氏は、外ならぬ私の知り合いの土橋俊一氏の祖父に当たる人と分かつてからは、私は房之助氏の事業や人為を一通り知りたいたいと思つた。以下は當時の新聞記事や、生前同氏と親しかった人々の思出を中心にした、土橋房之助略傳である。

### ②

土橋房之助氏は慶応三年<sup>(1867年)</sup>、今の御坊市名田町楠井の農業植野利右衛門の二男に生れた。利右衛門の弟、つまり房之助の叔父に平助とよぶ人があつたが、この人は早くから和歌山市新通り六丁目の商家土橋氏の店員となり、後人物を見込まれて、主人の姪にあたる土橋ウタノを迎えて一家を創て、土橋氏を名乗つた。つまり土橋氏の分家のような形であつた。房之助氏は若い頃この叔父平助(当時足袋屋をしていたという)を頼つて和歌山に出た。たまたま明治十六年<sup>(1883年)</sup>和歌山に染色講習所が開設されたので講習生となり、卒業後さらに八王子に出て染色技術を研究し、渋を引いた厚紙で図柄を切り抜いて、染めつける方法を發明した。

その後どんな事情があつたのか一時郷里へ帰り、塩屋町北塩屋で染物屋を開業したこともあり、親類筋の羽山大学家へもよく出入りしたという。「房はん」私が話をきいたその人は、房之助氏をこうよんでいた。「房はんはその時分いつも何か考え事をしていた。房はんあんたは何をそんなに考えていますか?と聞くと、何か新しい發明をしたいと、その事ばかり考えていますと答えた。たぶん染色の新工法をこらしていたのに違いない」

その後房之助氏は再び和歌山へ出て、叔父の娘キノの婿となり平助の家を継ぎ土橋氏を名乗った。

明治二十五年（一八九二年）和歌山市八番丁に型染工場を開設して、年来の抱負である染色工業の改良に乗り出した。次いで明治二十九年工場を他に移し、木彫凸型のローラー機で布面に捺染することを考案した。これは従来の染色が一つ一つ職人が型をもつて捺染していたのを、機械捺染に切りかえた最初で、この功績は大きい。

明治三十一年秋、湊紺屋町二丁目に精工会社（後の第一綿ネル会社）を創立し、米・英・独領アルサス、ローレンニ洲に渡り、つぶさに彼地の染色技術を視察し、英国マンチェスターのマサブレット会社から六色捺染機と起毛機を購入し、紀州綿ネル工業上大きな貢献をした。また一時京都に染色工場をつくり、都染という布地を売り出したこともあった。

考えて見ると房之助氏は名田の百姓の家に生まれ、染色講習所を卒業したとは云うものの、もともとそういう教育を受けた人とは思えないが、専門の道とは云いながら、単身欧米を視察するなど、矢張り尋常の技術家ではなかったようである。

### ③

それからこれは余談になるが、房之助氏には虎吉とよぶ弟があった。虎吉も房之助氏と同じく早くから染色事業に携わったが、房之助氏はどちらかといえば、話し振りも下手な朴訥ぼくとつな人柄であったのにくらべて、虎吉は才気の裕かな人物であつて、こんなことがあつた。

蔵前高等工業学校（今の工科大学）に、精工会社がマサプラット会社から購入したと同じ捺染機械があつた。ところがせっかく購入したものの機械の操縦方法が分からず、機械は徒に物置に埃にまみれたまま転がされていた。たまたま和歌山の精工会社ではこれを使用して、立派に加工生産していると聞いた学校では、会社にその使用方法の教示方を請うて来た。

そこで会社では協議の上、虎吉を学校へ派遣した。虎吉は上京の上蔵前高等学校にいたり、機械を組立て、並居る教授、学生を前に試運転を行ったところ、成績頗る良好で、大いに面目を施した。

### ④

その後房之助氏は事情があつて精工会社を退いたが、多くの染工事業に関係し、第一次世界戦争では染料の騰貴で、大儲けをした。

一体房之助氏は体格も余り大きくなく、人柄も全く朴訥そのものであつたが、一面極めて楽天的なところがあり、晩年産をなして後も金銭に執着せず、「金は人生を裕にするためにある。金儲けが人生の目的ではない」

との信念で、儲けることも儲けたが散じるのもよく散じた。

一時競馬に凝ってその愛馬龍星号は、名馬の名をうたわれた。大正初年（1912年）のことと思うが、大阪朝日新聞社であつたか、毎日新聞社であつたか、とにかく新聞社の主催で、神戸・京都間の競馬をしたことがあつた。

この時龍星号は他の多くの馬を遥かに引きはなし悠々先頭を駆けつゞけたが、京都も間近にした桂附近まで進んだとき、余りの強行軍に疲れたか、流石の名馬龍星号も一步も動かなくなつた。せつかく此処まで一着で通したものをと、騎手が気が気でない。いろく手当をしたがいつかな動かない。仕方ないので騎手は馬をひいてゴールに進んだが、それでもなお二着をしめた。

また大阪市で大正天皇の天覧に供したこともあり、屢々森祭りや塩屋祭りにも出場して、競馬好きの日高の人達をよろこばした。今でも馬好きのこの附近の老人の間には、土橋氏の馬は一つの語り草になっている。

### ⑤

もう一つ房之助氏について特記しておかねばならぬのは、晩年産をなして後、当時まだ誰も観るものなかつた和歌浦鶴立島（島というが島でなく小山である）を買いとつて、山上に素晴らしい別荘を建てたことである。建物は和洋二棟からなり、用材は房之助自ら神戸の鈴木商店に向いて、台湾阿里山の檜を買い求めるといふ凝り方で、ことに二階からの眺望は絶佳であつた。その後この房之助の別荘を中心に、和歌山の富商が我も我もと邸宅を営み、結局今日の和歌浦繁盛の基を開いた。

ところが好事魔多し（一九一九年）の例に洩れず、一日、工事中の別荘を見廻りに来て病を發し、ついにその完成をまたずして歿した。大正八年九月十四日、五十三才であつた。

### ⑥

私はこの稿を草しながら、今東京都世田谷に住む房之助氏の令孫、土橋俊一氏の面影を思い浮かべてみた。そうすると先日新聞に出ていた房之助氏の肖像画と、口もとや目のあたりがどこかよく似ているのを感じた。矢張り血は争われぬものである。

（昭和三三・一・一稿）

## 井上豊太郎先生の

## 徳本上人傳を薦む

「紀州新聞」昭和三十三年三月二十・二十一日掲載

井上豊太郎先生の高著「念佛大行者徳本上人傳」が公刊された。時あたかも上人百五十回忌の法要が厳修されようとしている折柄、洵に意義深いものがある。回想するところ二十年の昔になる。確か昭和十二、三年の頃と記憶するが、大阪朝日新聞で「紀国問答」と題して、紀州に関する質疑応答を紙上で試みたことがあった。その時私は近世紀州が生んだ高僧徳本上人の事跡に就て質疑したのに対し、懇切明快な回答を下されたのが、外ならぬ井上先生であった。その後私が郷土の歴史や文学に心を寄せるに至って、常に先生の御指導を仰いでいるが、その機縁のきっかけとなったのは、徳本上人の事であった。少し大袈裟に表現すると、私をして井上先生の門を叩かしめたのは、実に徳本上人その人であったと云える。

恥をさらけ出すがもう一つ今は懐かしい思い出がある。昭和二十八年の大洪水の直後、私はひどい腹痛に襲われて十日余り床にいた。病がやや癒えて静養していた時、私はこの静養期間を利用して、予て井上先生の許で拝見し、今回出版された「念佛大行者徳本上人傳」の原稿を写本したいと思ひ、先生の許へ原稿の借用を申出た。折返して先生からお返事があったが、曰く「お前は何と云う情知らずか、私共は今古今未曾有の水害に遭うて泥んこの生活を余儀なくしている。自分が水害を免れたとて、ぬけくと呑気な事を云うな。そんな思いやりのないことで立派な研究など出来ると思ふか」大体こういう意味のものであった。云われて見ると正にその通り、病氣上りで頭が少し弱っていたとは云え、これ程のことが当時の私には分からなかった。大いに恐縮してお詫びしたことであったが、その後やや町が落ちついた或る日「君此の間の徳本上人傳を写すか」と無雑作に取出されたのが、出版記念会の日披露しておられた、あの分厚い一綴りの原稿であった。

「念佛大行者徳本上人傳」は紙表紙の質素な装幀で、見たところ余り見ばえのする書物ではない。どの新聞であったか、その紹介に小冊子としてあったが、一見するとそんな感じを受ける。然しそれは本の外見上の体裁で、一度頁を開くと、本文八十七頁の前頁が八ポの細かい活字でぎっしり埋まっている。

世上行わる体裁にして、活字をもう少し大きいのを使えば、恐らく今の二倍の頁数にしても収まるまい。私のはあの時これを幾日かかって写し終えたか忘れたが、一ヶ月位を要したように思う。写すだけでもかなり骨の折れる大仕事であった。

云うまでもなく本書は小説でも随筆でもない。お負けに活字も細かい。初めは一寸取りつき難いかも知れぬ。然し一度心を入れてひもとけば、滋味はこんくとして盡きる事を知らぬ。殊に私にとつて何よりも有り難かつたのは、単なる傳記に終っていないことだ。忠実正確に上人の御生涯を叙述しながら、随所に滲みでている井上先生の仏教、殊に浄土教に対する考え方に接し得る点だ。そこには従来の既成宗教家の説教では味えぬ新時代の洗礼を受けた、思想家たる井上先生の人生観乃至宗教観がある。

○

徳本上人は無間修の念佛の行者と自称された。無間修とは何のことか。何故そんなに南無阿彌陀佛を称えねばならなかったのか。徳本上人には様々の奇蹟が伝えられている。現代人としてこれをどう解決すべきか、これは私の年来の疑問であったが、恐らく私一人に限るまい。本書は実に明快懇切にこうした疑問に答えてくれる。日高が生んだ高僧徳本上人に就ての正しい知識を得るために、また私のような疑問を持つておられる人々に、人生行路の風雪に方向を失いそうになった人々に、本書はきつと正しい智識と無限の勇気を与えるであろう。敢えて一本をすすめたい。

(昭和三三・三・九夜)

## 亀山城趾から法林寺まで

「紀州新聞」昭和三十三年三月二十八・二十九・三十日掲載

昨年十一月二十三日「印南巡り」をして三カ月が過ぎた。昔から「暑さ寒さも彼岸まで」と云う諺があるが、気候も暖かくなったので、春分の日(二十一日)、今年度第一回の史跡探訪を湯川町方面で行った。思えば昨年(三月二十一日)、三十二年(度)初めての史跡巡りを原谷方面に試みたが、好天気であった。今年も幸いにしてうらかな春日和に恵まれた。

集合時刻の午前九時、国鉄御坊駅に集まったのは、芝口常楠・亀石豊太郎・井原武・玉置清三・小山民三・中田宇南・小谷緑草・高野光男・清水長一郎、それに今度新たに入会された荊木の塩崎克美氏を加えた十名で仲々賑やかであった。塩崎氏は元来警察畑の人だが、最近家庭の都合で退職され、郷里で農業に従事されているお若い方である。少しずつではあるがこうして新しい会員が増えるのは心強い。

## 亀山城趾

亀山城趾は御坊市御坊の北約十五町、日高平野に臨む、高さ百米余の山上にある。と、わざ／＼断るまでもなく、日高平野の人々には朝夕見なれた懐かしい山である。何であったか忘れたが、森彦太郎先生は「亀山の山麓一带には古墳群があり、古くから瓶(かめ)を多く出土しているので亀山の称がある。亀は瓶である」と云う意味のことを述べておられた。然し私はそれよりも亀は亀で、山の姿が亀の甲羅に似ているから名づけられた名であろうと考えている。また龍神村大字東に山地氏(玉置氏)の本城の鶴城があった。鶴や亀は縁起のよい動物である。縁起の云う城の名に亀をとったのか、或は山地の鶴城に対して亀山城としたのかも知れぬ。

城趾へ登る道は数条あると云うが、私達は御坊駅の東で線路を渡り、山の南側から登った。かなり峻しい。汗がじつとり滲んで来る。道の左右は雑木林だが、やがて開墾した夏柑畑へ出る。此処らは私有地である。畑が尽きると笹原と櫟林の跡へ出た。刈り取られた笹原の処々に太い櫟の切株が遺っている。頂上が近づくとも平たい段々が幾つもある。城(城塞)さいがあつた頃何か小さな建物でもあつたのであろうか。井戸の跡らしい処もあつた。直径一間半ばかりの穴だが、ほとんど埋まって浅くなっている。覗きこむと荒々しい岩肌がむき出ししている。ズック靴がすべりそうな細い峻しい路を爪先登りに頂上近くまで来た時、傍に直径三、四尺の横穴がポツカリ口をあけているのを見つけた。「抜け穴だ！」新版湯川戦記を構想中の小谷緑草が躍り上がって喜んだ。穴の長さは八・九間もあるうか、中央でくの字にやや曲がっている。少し腰をかがめると楽に通れる。初めは防空壕の跡かも知れぬと疑つたが、戦争前からあつたと云う。穴を抜けると思わぬ方向へ出た。抜け穴にしては少し短い、一度此処で地上へ出てまた何処かへ抜けたのかも知れぬ。

頂上へ着いた、かなり広い。二の丸の跡らしい、瓦葺の小さな堂がある。前田法蓮尼の建てた小庵である。法蓮尼とは井上豊太郎先生のお宅で二、三度顔を合わせた事があるが、何故か私は余り好感を持たなかった。然しとも角もこの山上にこれだけの堂舎を建てた信仰の力は偉い。私達は堅く閉ざされた小堂の椽に持物を置いて城趾を踏査した。

「日高郡誌」によると亀山城は、足利時代の初め(一三九三—一四〇〇年代)湯川彌太郎光春が北朝方に加担して功績があり紀伊の旗頭になった時、ここに城塞を築いた。湯川氏の城と云うのは外にも多いが此処が本城であつた。城趾は東西二十八間、南北二十二間程ある。旧和歌山藩の調査では、城の大手口は南向きで、裏口は西向きであつた。また本丸の跡は東西四十五間、南北二十一間で四方に高さ一間半の土居がある云々。

——彌太郎光春以来湯川氏がずっとこの城に居ったが、直光の時代に小松原に土居を築いて平時は其処にいた。直光の子直春の時秀吉の南征に逢うて、直春は龜山城を焼いて熊野に奔った。時に天正十三年（一五八五）であつたとある。

法蓮尼が建てた小庵が一段と高くなつて数十坪に平地がある。城塞について知識を持たぬ私には分からぬが、ここが本丸の跡ではないかとぼんやり考える。処々に礎石らしき巨石が転がっている。井戸らしい穴もある。東西と北に土塁が遺っている。高さ一間ばかり幅が三、四尺ある。私達はこの土塁の一角に腰を降ろし、一眸に見はるかす日高平野を望みながら史談に耽つた。

どの本で見たか今遽に思い出せぬが、湯川直光が上方に上つた時、その举措が粗暴であつたため「彼様な田舎武士に守護代の職を勤めさせられぬ」と云う意味の記録を引用したものがあつたし、私達地方史研究家の間にも、日高地方では湯川氏を一簾の武門の様に云うが、それは過大評価でたかが田舎侍に過ぎぬ。その証拠に日高地方には何一つ文化らしいものが遺つていぬではないかと、酷評する人もあるが、矢張り一勢力、それもありかなり大きな存在と認めてよいのではないかと思う。その所領は盛事日高平野一帯から、西は有田郡広方面にまで及んだと言えれば相当なものである。龜山城から望む日高平野の田地はどれ程あるか知らぬが、少なくとも一千町歩は下るまい。それに由良から広方面を加えると莫大な高になる。秀吉が紀州征伐を計畫した時、手取城主玉置氏が逸早く和を請うたのに対し、湯川氏が飽くまで飯順を潔しとしなかつたのは、ひそかに徳川家康と氣脈を通じていたためでもあるが、その裏付けとして、これだけの富力の控えがあつたからに外ならぬと私は思う。

然し所詮は蟻螂の斧に向かうに等しかつた。潮のように紀南に殺到する豊臣勢を支うべくもなく、直春は龜山城に火を放つて牟婁へ奄つた。天正十三年の晩春の夜空を焦がして、彌太郎光春以来数代に亘る掘城が燃え上がった。

#### 夏草やつわ者どもが夢の跡

まことに国破れて山河あり、城春にして草深し。若草はまだ萌え出ないが、おだやかな春風に枯草が徒らに靡く。城趾の一週に立てられた法蓮尼の、慈照院法蓮尼菩提塔と筆の跡もまだ真新しい供養塔も、何かなしに物悲しい。

ふと見ると僅かに遺っている土塁の処々に桜の苗木が植えている。目下計画中の龜山公園化の第一歩である。遊園地らしい設備の何一つない市民にとつて確かに大きな福音である。明治時代は龜山はツツジの名所として名高かつた。旧暦の三月三日頃は全山が花盛りで、節句には町の人が海苔巻きなどをつくつて、龜山に遊

ぶのが何よりの楽しみであったという。然し今はツツジは一株も見当たらず。笹が生い茂り櫟が伸びたため、その下草になって枯れたのである。桜もよいがツツジも捨て難い。唯願わくば公園設備のために、僅かに遺った土塁や段を潰し、抜け穴や井戸跡を埋めない心遣いがほしい。色々問題があるにしても、数百年の昔紀南の覇者であった湯川氏の城趾を、できるだけ破潰しないでほしい。余計なおせっかいであるがこの機会に特に当局にお願いする。

## 鳳生寺

一行は城趾から山の尾根傳いに朝日谷に下った。途中の夏柑畑に彌生式土器が散乱していた。鳳生寺へは数年前に一度来たことがある。その時は堂宇の屋根は破れ、屋内から青空が望まれると言う凄惨な光景を呈していたが、立派に修繕されていた。然し境内の土塀は崩れ、鐘楼は礎石のみが遺り、寺全体としては荒廃の色がおおうべきもない。私が訪問の通知を一日書き誤ったので、昨日は終日まって呉れたと言う、和尚は不在であった。

鳳生寺は湯川氏の菩提寺として、宝徳元年（一四四九）龜山城第七代湯川光英が創建し、機外和尚を開山とした。湯川氏が盛大であった頃野口町熊野に寺領があり、これは今も鳳生寺山という由。天正十三年（一五六五）龜山城が落城の時この寺も兵火に焼かれ、わずかに一字が遺っただけとなった。その後熊野神社の境内にあった小堂を移して命脈を保ち今日に至った。

「紀伊続風土記」には本堂・愛染堂・観音堂・僧房・鐘楼堂・愛宕社を挙げているが、本堂と庫裡・愛宕社の外はすべて廃絶してしまった。然し慶長十七年（一六一二）浅野侯が寄せた竹木の寄附状や、元和元年（一六一五）田中淡路守から寺の周囲の田畑二石余を寄進した記録が伝えられると言う程で、割合寺財は裕かであったが、戦後の農地解放ですっかり失われ、その上禅寺だけに檀家が少なく、寺の経済は苦しい。

私達は寺の本堂に上がりこんで昼食を摂り、佛壇と直光の像を拝観した。直光の像は高さ一尺五寸ばかりの座像で寄木造り、頭を丸め法衣をまとい、実におだやかな顔をしている。石山本願寺派の撓将として、屢々撰・河・泉の山野を馳駆した荒武者にしては優しすぎる。

本尊の傍に十一面観音の立像がある。高野光男氏の話では室町初期を降るまいと言うが、金箔はとれ損傷がひどい。その筈である大島吉松氏に聞いた処では、明治初年頃まで観音堂にまつられていたが、観音堂が破損

して雨露にさらされていた時代があったと言う。

私達はまた別室にまつられている当山の開山機外和尚の像を拝んだ。直光像より一際大きく、二尺四・五寸の椅像である。機外和尚については、光英が当寺を創建した時、請じて開山としたという外明らかでないが、禅門の名僧であったに違いない。像の額あたりに三筋程深い横皺が刻まれ、半眼の眼は悠遠の思索に沈まれているが、不敵の気魄が薄暗い一室を圧する。

寺の境内枝張りのよい老松の根元に、嘗て甲斐の人三井某が建立した宝篋印塔が立ち、その周囲に多くの五輪塔が散乱しているが、もとより誰のものともわからぬ。その中に珍しく一基の板碑が混っていた。小型の形のよい板碑だが根元で折れていた。

## 湯川神社

鳳生寺を辞した私達はおだやかな春の日を浴びながら法林寺に向った。途中湯川神社に立ち寄る。湯川神社はこの頃では子安さんと呼ぶ方が一般に知られている安産の神である。藩政時代にはキリシタン取締りの為か屢々社寺の取調が行われ、その度に神主や住職は社寺の建物や財産、はては本尊・御神体まで詳しく書上げて報告した。そうした報告書のうち寛政四年（一七九二）天田組の写しが私の手もとにあるが、それによると、

一、子安大明神但二社三尺四方ツツ

内

壹社子安大明神

御神体木像の由申傳候得共神主も恐多く終二拝み不申候

と書いてある。そこで想像を逞しくすると子安神の名の通り、或は性神ではないかと考える。そんなことは露わに言うことはできぬから、「神主も終に拝み不申候」とうまく逃げたのかも知れぬ。

社前の濠に架かった形のよい石橋を渡ると直ぐ社前に出る。祠前には夥しく手拭いを奉納してある。安産を祈願した人達が奉納したものである。

境内は余り広くないが、こんもりした樹立におおわれ物静かである。松・椿、その他数多い木々の中で、社殿の西南に聳える老樟が一際群を抜く。昭和六年七月本県天然記念物に指定されたが、この時の計測では幹周二丈四尺・根廻り三丈三尺・樹高凡そ三十尺あった。樹齢約五百年と推定されているから、湯川一門が子安神

社の近くに館を構えたことや、第十代政春が歌仙堂を営み、宗祇法師と連歌の風流に遊んだこと、さては天正十三年紀南一帯が秀吉軍の侵攻を受けたことも、すべて見聞しているのである。然も幹の内部がすっかり空洞になつてゐるが、樹勢いさゝかも衰えを見せぬ。

賭博が盛んであつた明治半ばごろ、博徒は屢々取締の目を掠めるため、この空洞の中で賭博に耽つたと言う。成程その言えば根元から潜りこむと、内部は大人が三・四人は楽にかくれることができる。この樟の木はそれ程太い。

## 法林寺

やがて私達は今日最後の訪問先の法林寺へ詣でた。折から寺では彼岸会が営まれ、多くの善男善女が法話を聞いていた。さきに私達が鳳生寺を訪れた時も、香華を持った墓参の人が絶えなかつたが、私のように信仰心のうすい者も、春秋の彼岸会に先祖の墓を訪う人々を見ると、何か心の温るのを覚える。床しい風習である。

さてこの寺も鳳生寺と同様湯川氏の菩提寺の一つである。創建時代は明らかでないが、恐らく永禄年中(一五五八—一五六九)と思われる頃、湯川直光が草創してその三男民之進を出家の上開基とした。民之進は鎌倉光明寺の然連社貞誉について得度の上、法名を佳連社存誉と称し、慶長四年(一五九九)知恩院で入寂した。

今の本堂は天保二年五月(一八三一)に起工し、同六年十月に落成したもので、再建前の堂は寛政四年(一七九二)の天田組寺社調帳に

一、本堂建前四間半に五間

一、鐘楼堂一棟、二間半四方

とある。またこの境内の観音堂は本堂の工をおこしたとき、守護として厄除水間観音を安置の建立したもので、庫裡は明治十二年(一八七九年)に再建してゐる。

私達が當寺を訪ねたのは、當寺にまつられてゐる湯川直光の墓碑を拝むためである。墓碑は山門の直ぐ傍の松の樹陰にある。一体湯川直光というのは湯川氏の第十一代城主で、豊太閤の南征で滅亡した直春の父に当り、一介の部将ではなく相当の政治的手腕の持主で、勢力拡張のために屢々本願寺や諸大寺の勢力を利用したり、されたりした湯川一門中(一五六二年)でも傑物であつた。

その直光は永禄五年(一五六二年)三月中旬大阪平野で、畠山氏の一部将として三好勢と戦い、五月二十日根来勢等三千人

と共に河内教興寺(中河内郡高安村)に陣していた処を、三好勢の猛攻撃をうけ奮戦力闘の末、直光以下同弟湯川帯刀・湯川右衛門太夫兄弟・同甚太夫・湊上野・同紀介主従七十三人相共に枕を並べて討死にした。

この戦闘は極めて激戦に終始し、湯川勢のほか紀州勢では、貴志・富田・飯沼九郎左衛門・龍神刑部、其の外、彼これ五十餘人が相次いで戦死している。

まことに乱世の部将の運命ほどはかないものはない。朝に千兵を号令している身が、夕べには荒野に屍をさらすかも知れないのであった。さればこそ湯川家でも菩提寺の禅刹鳳生寺の外、吉原坊舎(今の日高別院)を営み、直光の如きは更に法林寺を創建して三男を開基としたのだ。処が久しい間この墓碑が直光のそれであると気づいた者はなかった。たまたま昭和(一九三九年)・十四(一九四〇年)・五年の頃、和田喜久男氏が郡内の古美術を訪ねているうち、法林寺の境内で一基の宝篋印塔を発見した。どうも江戸時代以前の手法を具えている。試みに拓本をとってみると驚いたことは、基礎の中央に「源祥岩宗吉大禅定門神儀」左右に「永祿五年壬戌五月二十日」とあり、初めて直光の碑とわかった。

私達は今を距る四百年の昔、河内の国は教興寺の野に散った直光の最期を思い、うたた今昔の感に耽っていると、折から同寺に参詣中の大島吉松氏に巡り逢うた。

大島吉松氏は農民運動華かしなり頃、日高農民組合長として果敢な活躍をした往年の闘士である。数年前私に「日高農民運動物語」を書いた時、数回お伺いして色々資料を貰ったのが機縁で、以来懇意に願っている。この日も大島氏は私達のために境内の薬師堂を開扉してくれた。

薄暗い電燈の光に浮かんだ本尊薬師如来もさることながら、私達の眼を引いたのは十二神将の群像であった。像はすべて三十センチから三十五センチで余り大きくはないが、彫が深く力強い手法で、神将らしい精悍の気が躍動している。先年調査した巽三郎氏の談では、各神将にそれぞれ「天文二年癸巳六月〇日、願主湯川利阿彌」の記銘があるという。天文二年は今から約四百三十年の昔に当り、日高地方では湯川直光の時に当る。願主湯川利阿彌は何れ湯川の一族であろう。また別に「丙午作……」、「願主……」とあるほか、記銘の読み難いものもあるという。丙午は天文十五年であるが、これだけでは神像の由緒は分かりかねる。大島吉松氏の説によると、この小堂は明治初年頃大字天神にあり、後小松原に移り久保田育平氏が管理していたが、久保田氏の歿後現位置に移転したらしい。押し終つて大島氏は薬師堂の扉を静かに閉じた。時に午後三時を少し過ぎた頃であった。

## 雨の鹿ヶ瀬越え

「紀州新聞」昭和三十三年五月九・十・十一日掲載

四月廿七日今年になって二回目の史跡探訪を鹿ヶ瀬峠に試みた。昭和三十一年秋、史跡顕彰会が発足して第十回目にあたる。この日は昨日と変わり朝からどんよりと雨雲が垂れこめていたが、所定の時刻に内原駅でバスを待つ。天候が災いして集まったのは、塩崎克美・山中三郎・高野光男・清水長一郎のわずかに四名であった。然し参加人員の多寡は余り問題でない。多ければ賑やかに話がはずむし、少なければ落ちついて風光を愉しみ、古跡を探ることができる。

○ 原谷奥でバスを降りた頃からボツ／＼雨が降って来た。私達は傘を用意して峠路に向った。麓の金魚茶屋の表に中年の男女数名が雨宿りしていた。川辺町和佐の人達で、山上の地藏尊に痔の平癒を祈願のため登るのだと云う。鹿ヶ瀬峠の地藏尊が痔疾を治すとは初めて聞いた。面白い日高地方の民間信仰である。

○ わしらは若い時<sup>今</sup>有田へ越えた、知らぬ鹿ヶ瀬夜で越えた。

今も日高地方に遺る俚謡のように、汽車も汽船もなかった時代は、日高<sup>今</sup>以東の人が上方へ旅をするには、どうしてもこの峠を越さねばならなかった。上方から牟婁の湯や熊野へ行く人も必ず此処を越えた。後鳥羽上皇も南龍公も、徳本上人も、さては私達の祖父も父も通った懐かしい古道である。従ってこの峠にまつわる物語は多い。現に私の村のお菊とよぶ妻女も此処で賊のために殺されたという伝説があるし、一行中の高野光男氏の縁辺の人も、此の峠で非業の死を遂げているという。

古い公道であり乍ら昔はそれ程淋しくなかったのである。建仁元年(一一〇一)藤原定家が後鳥羽院の熊野参詣に供奉した時の紀行には、「シシノセ山崔キ嶮岨」と記し、また「椎原樹蔭滋路甚」と嶮岨鬱蒼たる情景をじょうししている。

さてそれならこの峠路は何時から開けたのであるうか。今、私の手許にはそれを明らかにする資料はない。然し奈良時代の「万葉集」には、紀州路を詠んだ歌は多いが、鹿ヶ瀬峠の歌は見えぬから、恐らく平安時代の中頃までのことかと想像する。

○ 雨は幸いにやんだ。道は一步一步高くなる。高野氏が先頭になって、文字通りの露払いの役を勤めてくれる。

何処かで鶯が鳴く。ふりかえると今過ぎて来た原の田畑が眼下に展げ、雨に洗われた桧林が黒ずみ、雑木林の新緑が溶きたての絵具のように鮮やかに目にしみる。私はふと此の間山田栄太郎氏邸で拝見した、日高が生んだ偉大な日本画家日高昌克の作品を思い出した。

路は割合に広い。近年路普請でもしたのか、通行人は殆んどならしいのに割合荒廃していない。行く手の山頂に鹿ヶ瀬城の趾が聳える。

鹿ヶ瀬城趾は茶屋趾の西北標高四二〇米の小城山の頂にある。「太平記」に曰う熊野八莊司の一人鹿瀬莊司の築く処と伝えるが確かでない。治承五年（一一八一）九月、熊野別当、湛増が謀反して鹿ヶ瀬を切り塞いだと云うから、山砦としての歴史はかなり古い。永享年間（一四二九—一四四〇）南朝の余党がこの天険によつて畠山氏と戦い、城兵悉く戦死したとも云う。私達は城趾に登ろうと中腹の脇道を進む。小笹や雑木が背丈を没する程深い。

所々に山の芋を掘った跡がある。炭竈の跡もある。長身の山中三郎氏が笹や雑木を分けて先頭に立つ。何処かでまた鶯が鳴いている。五、六町進むとなだらかな尾根に出た。立ち木がすっかり伐られて眺望頗るよい。残った立木の肌が黒く焦げているのは山火事の跡であろう。

ここまで来ると小城山を半周した形になって城趾が東に聳りたつ。ほんの数丁の距離だが雑木が生い茂って近づき難い。私達は東西三百米、南北一二〇米、三段からなると云う城趾を望み乍ら引きかえす。眼下に細長い谷が見える。所々に農家が点在している。

あれは津木であろうか、それとも由良町畑だろうかと一頻りもめたが、五万分一図を取出して見て畑と分かった。糸谷港の鍋山が遙か南に姿をあらわし、途方もなく高く見える。雲がまた濃くなってきた、一雨来そうである。いそいそでもとの路を引き返す。途中で遠くの杉林を白く染めたと思うと、ザーと横なぐりの雨が降つて来た。あわてゝ傘をひろげる。雨に降られるのは辛い。山の色が美しい。私は昔読んだ川端康成の名作「伊豆の踊子」の中の情景を思い浮かべた。

○

峠路まで戻ると雨がやんだ。腰から下が露でびっしょりになったので絞る。ここに小さな道標を兼ねた地藏尊がある。何れは峠の華やかだった頃の建立であろう。余り古いものとは思えぬが、浮彫りの御貌が優しく美しい。高野氏が早速花筒の水で紙を濡らして拓本をとり出した「右かみくさの滝へ十五丁。」「たから村金屋某」と出た。

「かみくさの滝」と云うのは、「紀伊国名所図会」に「上草滝中村にあり、巖ありつたひ落る泉なり、瘡をなおすといふ」とあるそれで、上津木の猪谷にある。小さな拝殿奥に細々と落ちる滝の水は、皮膚病に効験があるという。私達がこんな道草をしているうちに、金魚茶屋で雨宿りをしていた四人が登ってきて私達を追い越した。

○ どうやら時刻は十一時近い。私達も少し道をいそがねばならぬ。此処から峠茶屋跡へは三、四丁ある。気まゝな放談をしながら歩む。

山中不艸氏は今は日高俳壇の雄として句作にのみ精進しているが、元来芸術味の豊かな質で、一昔前はアラギ派に属し盛んに歌を詠んだ。

○ いにしえの鹿ヶ瀬山の尾越路に 吾をおそれてにぐる鳥あり

○ ここにしてかえり見すれば雲影の い行き訊しも麓山田に

○ ゆく秋のいちよう落ち葉を踏みしめて 鹿ヶ瀬山の秋は来にけり

これは昭和二年<sup>(一九二七年)</sup>、彼が中学卒業の秋、鹿ヶ瀬峠を越えた時の連作の一つで、斎藤茂吉の選でアララギに入選した歌である。も早卅年余の昔語りだが、彼がこの時詠んだいちようの木はもう見当らなかつた。

やっと峠茶屋の跡についた。家の跡は草茫茫と生い茂り足の踏み入れ場もない。きちんと石垣を積んだ平地が四、五段あつてかなり広い。峠の栄えた頃は三、四軒あつたのかと思う。数株の椎の老樹が人の世の盛衰を他所に遅しく枝を拡げている。その一本の根もとに拾数基の墓碑が訪れる人もなく雨に濡れている。峠に生れ、峠に生涯を終えた人達の永眠の地であろう。文字の読み得るものでは、正徳(一七一―一七一五)が最も古く、明治十年代<sup>(一八七―一八六)</sup>のものが最も新しい。峠茶屋は大正十二、三年頃<sup>(一九二三、四年)</sup>まで細々と続けていたらしい。

峠茶屋の人達は此処を引払って何処へ移つたのだろうか。そのうち一軒梅本林平氏は、今この山裾の井関に住んでいると云い、法華経塚縁起画帖や、法華経塚畧縁起、或は代々の紀州藩主が峠茶屋で休息した時賜つた、特性の大形永楽銀錢の何枚かが蔵せられ、一枚一枚紙に包み下賜した藩主の名と年月日を記しているという。活動家の高野光男氏は深い草の中から、茶屋時代に使つた古い備前徳利と茶臼を拾い出して来て、今日の記念にと徳利を新聞つつみにしたが、茶臼は流石に持て余している。

ところが若い塩崎克美氏がそれなら俺が貰つて行くと軽々と肩にした。重量は少なくとも三、四貫は下るまい。然も彼は下駄履きである。やはり若さには勝てぬ。もともと茶臼はそれ程珍しい物ではない。然し鹿ヶ瀬

の茶屋で使った茶臼となると好古の記念品であり、往時をしのぶ資料ともなる。

峠茶屋の跡に回顧の情は尽きぬが、予定があるので法華壇に向かう。茶屋の庭に植えていたのだらう山吹が、主達が去った後も時を忘れず咲いているのが可憐である。

法華壇は茶屋の跡からやゝ東に入った、老樹のもとにある。長い歳月にすっかり風化した五輪塔が二基ばかり遺り、板碑の頭部の破片だけがあり、わずかに「南無」の「南」の一字が残っている。法華壇の由来については「元亨釋書」（元亨釋書とは僧侶の伝記で三十巻からなり、擬念が原纂して固山一鞏に提示し、一鞏が更に和文を漢訳して師鍊に贈り、師鍊はこれに資治表、諸志並に贊を加えて上梓したもので、元亨二年八月十六日（一三二二）の成立と云われる）に次ぎのような奇怪な物語が載っている。

昔、円善という僧侶が鹿ヶ瀬山で死んだ。その後、老容と云う僧侶が此処を過ぎ峠で野宿をしていると、夜になって法華經を読み一卷を読み終わるごとに礼拝懺悔し、また次を読み進む者があり、それが夜明けまで続いた。処が朝になるとその人の姿は消え、その後には苔むした骸骨のみが横たわっていた。よく見ると骸骨の舌は紅の蓮のように紅い。奇怪な事なのでその正体を知りたいともう一晚そこに止った。すると相変わらず夜になると昨夜のように法華經を読み始めた。そこで老容は貴男は一体どうしてそのようなことをくり返すのか、何か願いがあるなら聞かしてもらいたい、出来る事ならわたしがかなえようと問いかけた。するとその骨人が云うには、私はもとは台嶺東塔院の某である。生前法華經六万部を誦すること誓ったが、わずかに半分ばかり進んだとき此処で斃れた。そこでその残りをこのようにして今も続けている。然しそれももう殆んど終りに近いから程なく此処を去る心算だと答えた。そこで老容は骨人に礼をして去り、翌日再び此処を訪れたときは既にその骸骨は見えなかった。

即ちこの塚は円善を供養のためつくられたもので、その後ここに建てられた法華寺が広に移されて、養源寺になったのだと養源寺縁起に書かれている。しかしその形から見て、ひよつとすると経塚かも知れぬという気が一寸した。また今も毎年三月十六日ここで円善の供養会が営まれると云う。



この法華壇の下手にも小さな壇があつて、こゝに地藏尊がおまつりしてある。享保何年（一七一六—一七三四）かの銘が見られた。さきの川辺町和佐の人達が痔疾平癒をお祈りした地藏尊はこの地藏尊らしい。新しい花が供えられている。ここから峠は愈々下りである。林の半分だけ伐採された杉の樹立が実に美しい。有田郡広川町井関の人家や田畑が指呼の間に見える。途中道一杯に杉や桧を伐り出した所へ出た。皮をはいで間もないの

で生木特有の刺激的な香が辺りに漂うている。長い峠路が尽きた。鹿ヶ瀬六郎太夫家の大きな藁屋根と、長屋門が見えてきた。路傍に幅一尺二寸、長さ三尺七寸の大きな徳本上人の名号石が建っている。ふと見ると側面に何か歌のようなものが彫られている。山中不艸氏と塩崎克美氏に先行してもらって、高野氏と二人で読んで見ると

きのふ過今日ぞ此世のおほりかや あすをも知れぬ命なりけり

弘化二年<sup>（一八四五年）</sup>巳七月 感空勧誉敬白

とある。感空勧誉については今の処私は何の知識もない。

この頃からまた降り出した雨の中を鹿ヶ瀬家についた。午後一時であった。今朝から歩き通した私達は、取り敢えず鹿ヶ瀬家の縁に上がって弁当を開く。雨にぬれた冷たい体に熱いお茶がとても美味しい。弁当を食べている間も時々黒ずんだ鹿ヶ瀬山を染めて白い雨脚がザーと過ぎる。食事がすんで座敷に上がりこむ。

鹿ヶ瀬家は有田でも屈指の旧家である。家伝によると脇田蔵人俊継の後裔隼人助俊次というのが出家して、根来寺に住み杉本坊と号した。小牧長手久保の戦に出陣して功を樹てたが、後秀吉の根来征伐の時、還俗して六郎太夫と号し、広莊殿村に住んだ。慶長年中（一五九六—一六一四）浅野公が紀伊の国主になった時、鹿ヶ瀬庄司の家の断絶するのを惜しんで、六郎太夫に命じて鹿ヶ瀬に住まし、姓を鹿ヶ瀬と改めた。元和<sup>（一六二五—一六三三年）</sup>の頃地士となり、寛文元年十一月（一六六一）南龍公が日高で鷹狩りをしたとき、四町四方の竹木の諸役を御免となり、代々鹿ヶ瀬峠の管理を命じた。これがざっとした鹿ヶ瀬家の由緒である。従ってその邸宅は鹿ヶ瀬山の山麓の要害の地にあり、高く石垣をめぐらし、見るからに旧家の感じである。

見あげると長押には今時一寸珍らしい提灯箱がずらりと懸けられ、箱の表には「御用」と筆太に書いてある。鹿ヶ瀬家の祖先は峠に事のある時、この御用提灯を掲げて出張したのである。黒い天井から下った武具棚には二間位もある長柄の槍や、刺股のような物、二張りの弓、竜吐水が架かっている。試みに槍の穂先を払うと、薄暗い室内にピカリと鋭い光を放つ。

鹿ヶ瀬家では既に先代の六郎太夫氏が亡くなり、今は若い主人夫妻とその母堂が居られるが、母堂は極めて気さくな方で、私達に色々面白い話を聞かしてくれた。

奥の間の仏壇の上に般若心経の断簡が横額にして架かっている。弘仁何年（八一〇—八二三）かの文字がみら

れたが、私には真物が写しか判断がつかぬ。仏壇の香炉と香合の藍が美しいので手にすると、「南紀男山」銘があった。男山焼は周知の通り文政頃（一八一八—一八二九）から明治初年（<sup>一八六八年</sup>）にかけて、藩侯の保護のもとに有田郡広川町男山で焼かれた陶器で、紀州陶器の代表と云ってもよい。

私がかねがねこの陶器を見たいと願っていたが、先日美浜町和田の和田喜久男氏所蔵の菓子鉢を拝見したが、はからずも今日また鹿ヶ瀬家でこれを見ることができた。この香合はやゝ長手で、掌に入るほど小さく、優美であるが惜しいことには蓋の一部がほんの少し欠けている。子供達が土遊びに使って欠いたのです、皆さんが勿体ないと云われるが、今はもつと手軽な当世向きなものが幾らもありますからと、一向気にとめていない。台所の神棚の前に立てゝいる花瓶もどうやら男山らしいので持つて来てもらうと、鶴亀の絵が染附ていて、はたして「光川亭仙馬」の名があった。仙馬は本名を政吉と称し、男山の政吉か、政吉の男山かと云われた程で、紀州の陶器史上重要な位置をしめており、明治二十五・六年頃（<sup>一八九二・三</sup>）で没したと云うが、不思議なことに、その生地がはつきりしない。昭和十年五月発行の佐竹茂七郎著「紀伊陶磁器史」には「仙馬政吉は姓を塩谷と云い一説に日高の産とも云い云々」とあり、西尼秀著「有田郷土研究のしおり」には土屋政吉とある。昨年南紀郷土学会で広方面に遊び、法蔵寺を訪れたが、此処には男山焼の創始者崎山利兵衛翁の碑があり、法蔵寺の住職は仙馬は日高郡稻原村あたりの産らしいと語っていたのを思い出す。仙馬稻原説にはどれだけの根拠があるかは知らぬが、日高の出生であることは間違いないらしい。今後研究すべき面白い問題であろう。

○

然し残念なことにはこの花瓶も底が抜けている上、縁が大きく欠けている。鶏が落として欠いてしまったのだという。全く勿体ない話である。

私達はさらに鹿ヶ瀬六郎太夫日記の一部を見せて貰う。六郎太夫日記は正しくは「古歴枢要」と云い、鹿ヶ瀬家歴代主人の手記である。普通の日本紙に年月順に細字でギッシリ書きつけていて、三日や四日では通読は困難である。鹿ヶ瀬家はさきにも書いたように普通の地主とは異い、紀州路の要害鹿ヶ瀬峠を預っていた。従つて藩侯はもとより藩の役人が通過の際は必ず奉仕を命ぜられたから、この手記を通じて紀藩の動静の一斑が手に取るように知られる。例えば第六代宗直、第八代重倫が日高熊野方面を巡覧したことや、「紀伊続風土記」、「紀伊国名所図会」の編纂官の一行が来村したことも所々に散見するという。洵に貴重な紀藩資料である。私にもし藤村程の文才があるなら、これを材料に素晴らしい「紀州の夜明け前」が出来るかも知れぬ。

この好個の資料も例の無雑作な未亡人は、段々虫は食って来るし、戦時中紙は不足するしで、大分破って使

つてしまったと語るのである。然し有難いことには今から十年位前、広の碩学浜口恵章師が写本している。私は村誌が一片付したら、是非これを写したいと愉しみにしている。

○

私達は家伝の靈巖寺縁起を拝見した。西尾秀氏著「有田郷土研究しおり」によると、湯浅町山田と広川町下津木との間にわだかまる靈巖寺山頂附近に、往古能仁寺の奥の院靈巖寺があり、(一五八五年)天正の兵火で焼失したらしいと云うのである。そしてこの縁起一卷は昨年(一五八五年)の夏やはり史跡顕彰会で見せて貰った、衣奈の衣奈八幡宮の縁起と同じく、花山院藤原長親の筆と伝えられているが、「有田郷土研究のしおり」の著者西尾秀氏は、「しかしこの縁起は耕雲(長親の号)書いたものの写だとも見える」と述べている。恐らく西尾氏の所見に誤りはなからう。雨は一層はげしくなってきた。私達は傘をさして邸内の観音堂へお参りする。靈巖寺退転後、鹿ヶ瀬氏の建立にかゝり、本尊は十一面千手観音で、六十谷直川仏師の作だと云う。

話は中々尽きぬし、鹿ヶ瀬家の向いにある「汗かき地蔵」や、数町下手の河ノ瀬王子趾と見たいところは沢山あるが、この天候ではまたの日を期するより他はない。私達は鹿ヶ瀬家を辞し、熊野街道が栄えた頃、旅館や茶屋が立並んでいたという峠下の聚落を過ぎ、井関の停留所で折よく来合わせたバスに乗った。

終わりに今日の史跡巡りは不幸にも天候に恵まれなかったが、実に収穫が多かったことを吹聴したい。久し振りで史跡を訪ねたという感じがする。このコースは私達のように歴史趣味の者ばかりでなく、単なるハイキングコースとしても推奨に値する。また吟行やカメラ旅行にもふさわしい。忘れられた峠路の風光は、四季を問わずきつと万人の詩魂を慰めずにはおかぬであろう。  
(昭和三十三年四月二十七日夜稿了)

×

×

×

## 私信(山中氏から)

五月九日付紀州新聞より御作「雨の鹿ヶ瀬越え」が連載され出し、同行の私にも大変面白く、また筆無精の私にはいゝ記念にもなりますのでうれしい限りです、深謝します。小生の古い歌についてまで紹介して下さって恐縮しています。三つ目の歌は雨中放談中にお話ししましたのでお聞きちがいあったことと存じますか、あれは

行く秋の鹿ヶ瀬山にのぼり来て 公孫樹落葉を踏みしだきたり

と云うのです。三十年も前の旧作ですので、どうでもいゝのですが、茂吉先生の名も出ていることで、御訂正いただければ幸甚に存じます。尤も「御訂正いただける様なれば」でございまして、あえてと

は申し上げる程のことではございません。右とりあえず(五月九日)

## 川辺町の歴史

「川辺商工タイムス」昭和三十三年五月一日掲載

### 一

川辺町は日高郡でも古い歴史をもった地である。昭和廿八年(一九五三年)の水害後、国鉄和佐鉄橋附近の地下約一坪の処から、縄文早期から晩期へかけてと云うから、凡そ三千年乃至七千年前の遺跡が発見された。私もその頃あの辺りの田圃中から石鏃(石やじり)や丸玉を少し拾い出したが、その外に何千年も昔の人が使った土器や、石の匙や石の矢尻が出ている。これらの石器を見るとどれもこれもサヌカイトと云うこの附近にない石でつくられているから、そんな大昔に既に遠い処から原石を運んで来たことがわかる。

またもう少し上流の松瀬にも、略々同じ時代か、或はもう少し古い時代の遺跡があるし、川を越えて下入野にはやゝ時代は下がるが、縄文後期(約三千年から四千年以前)の遺跡がある。こうして見ると、川辺町の歴史の曙は、遠く六、七千年の昔、日高川の清流に沿う和佐や松瀬や入野から始まったと云える。

恐らく川辺町の古代人は、こゝで日高川の魚をとり、和佐山や大山の兔や猪や鹿を捉え、椎や栗の実を拾い集めて拾い集めて原始生活をしたのであろう。一口に六、七千年前と云うが、わずか百年前の明治維新ごろのこと、今ではわからぬことが多い。考えて見ると夢のような気がする。

### 二

ところがこんな難しい言葉で云うと、狩猟と採取の原始生活が、何千年と云う長い間続いた後、稲を作る技術が伝わって来て、今までの生活に大きな革命が起こった。これまでの生活は木の実を拾ったり、獣をとったりする生活だから暮らしに安定性がなかった。然し稲を作るようになると、生活に計画性ができて安定してきた。兔や猪は今日とはとることが出来ても明日はとれるか如何はわからない。然し米は春の頃種を蒔いておけば、秋には収穫を約束することができ。

そこで米を作り出してからは、人はどんどん増えるし、聚落はだんだん大きくなった。簡単に云い切るのは難しいが、凡そ三千年位昔と見てよい。川辺町ではこの時代つまり考古学上で云う彌生式時代の遺跡は、やは

り下入野の日高川の畔りや、道成寺駅と土生川の間を挙げることができる。そのほかにもアルに違いないが、現代までの処発見されていない。大字土生という地名などは恐らくこの時代にできたものであるうと思う。この彌生式時代というのは、さきの縄文時代にくらべると割合に短く、間もなく古墳時代へと大きく発展し、川辺町内にも金巻や小熊、入野、若野と幾つかの遺跡を今日に伝えているのだが、それはまた機会があったら述べることにしたい。

昭和三三・四・八夜誌

## 船津 高津尾巡り

「紀州新聞」昭和三十三年七月四・五・六・七・八日掲載

五月二十五日史跡顕彰会五月例会を中津村船津・高津尾方面に試みた。今日の顔触れは何時もと少し変わって、平野一良・田端憲之助・津本鉄城の長老に、常連の亀石豊太郎・井原武・高野光男・清水長一郎を加えた七名であった。私達一行を乗せた川上行きバスは、五月の薫風を切って走る。バスが道成寺駅を過ぎると間もなく平野が尽きて山峡に入る。右も左も後も新緑の山また山が続き、その間を美しく澄んだ日高川が流れている。川岸の田畑では今麦の取入れの最中である。幾許もなくバスは高津尾の停留所に停まった。予て打合せをしていた谷本重清氏が迎えてくれる。

谷本氏とお逢いするのは久しい。確か昭和二十五・六年頃中村富士郎御夫妻が道成寺に見えたとき、南紀郷土学会の一員として御伺いして以来である。谷本氏の御案内で役場の会議室に着くと、岡田村長はじめ井原教育長、井原正夫農協組合長、高尾船津郵便局長の諸氏が迎えて下さったのには、全く恐縮外はなかった。予定があるので早速谷本氏から芳沢あやめのお話を伺う。

### 芳沢あやめ

芳沢あやめについては、「紀伊国名所図会」後編五の巻に

あやめは当郡小原長滝村の農夫吉助といふ者の子にて幼年より大阪に在しが後俳優を以て名を三都にしたらる。其の技ことに且（一七六〇、三六年）おんながたに長じ惣芸頭となる。父吉助その賤業なるをはぢ怒りて勘当するといへり。享保年中病にて死、或書に大阪の人とあるは誤なり。今其図をあらはして婦女子の消閑に備ふ。

とあり、女装したあやめの姿を載せている。風雅の心得にうとい私は、あやめについてはこの外に全く知識がない。また専門の演芸研究家の間にもあやめの生地は、従来河内と紀州の二説があつてはつきりしていなかった。ところがこの地方には古くから「あやめさん」と云う言葉が遺つており、古老の間には「昔この村にあやめさんとよぶ、芸の上手な人がいた。あやめさんと云うのだから多分美しい芸妓であつたに違いない」と云う口碑が伝えられていた。

今から二十年ばかりも前になるうか、こうした伝説や名所図会の記事に目をとめた当時の塩崎船津村長や井原義男氏は、船津こそあやめの生地でなからうかとその究明に乗り出した。然しあやめが歿した享保からは既に二百五、六十年もたつている上、専門家さえ遂にたずねあぐんだ事柄だけに、研究は遅々として進まなかつた。そこへ戦争が始まつた。研究は一先ず中断した。

やがて戦争が終わると、あやめの生地究明のバトンは岡田義一村長や井原義男氏、淘汰寺住職谷本重清氏らによつて承継された。そのうち道成寺の古文書、江川村の狩谷楠太夫の船津紀行文「芳沢あやめ記」の中に、名所図会とほぼ同様の一節のあることがわかつた。また「あやめ草」——女形秘訣とも云う——の十八条に——小原長滝説を裏づける一節のあることも明らかになつた。ついで同村駒場季衡氏宅の仏壇から、あやめ追善の位牌が発見されるに及んで、遂にあやめの小原長滝出生が決定的になつた。この間関係者の努力と村民の協力、学界との交渉の苦労は一通りではなかつたが、目出度く実を結んだ。現代演劇研究の第一人者秋沢芳葉先生の演劇家系図の中にも「芳沢あやめ、紀伊国日高郡小原長滝出生」とはつきり記されていると云う。

さて、「紀伊国名所図会」の一頁をわざ／＼割かせ、二百数十年を経た今日、船津村の人々をして二十年近く躍起とならした芳沢あやめとはどんな人物であろうか。谷本重清氏の説によると、

或る年長滝村で旅役者の一座の芝居がかかつた。土地の百姓吉助の倅あやめは毎日熱心に見物に通つた。そのうち何かの機会からかあやめが拍子木を打つたところ、すべて歌舞伎の法にかない、とても子供技とは思われなかつた。よつてその天分を見込んだ座長があやめを貰いうけ一座に加えた。

と云う。

もともと役者たるべき天分がそなわつていたのにちがいない。かくてあやめの技芸は年とともに磨かれ、遂に惣芸頭に昇つた。惣芸頭と云うのは歌舞伎俳優の階級で、その最高天下無双に続くものと聞いたが、或いは私の記憶の違いがあるかも知れぬ。彼が如何に当時の演劇界に有名であつたかは、秋沢芳葉先生によれば、当時あやめを称する者が、吉田あやめ(能の名人)、よし沢あやめ、芳沢あやめの三人あり、よし沢あやめと芳沢あやめは互いに技を競つたが遂に及ばず、よし沢あやめは後によし沢菊之丞と改名したと伝えられる。

またさきに記した「役者論語」十八条の文は

わが身幼少の頃より道頓堀にて舞台に出で、丹波亀山近在の有徳なる恩人橋屋五郎左衛門の世話となりたり。元々草深く山の泉に生まれたるものなれど、わが身人の人にて芸に生きるものなれば、人も亦われに芝居出るたびに生れしところを問うなり。而して芸人なるものが何処に生れ、何処に死すは愚なり。元より舞台に生れ舞台に死するわが身のねがいなれ。

と言うのであるが、何と言う力強い言葉であろう。あたかも高僧の言葉に接する思いがして、身内がひきしまる。恐らく晩年のあやめは一代の名優たるにとどまらず人間のにも大成した人物であつたに違いない。彼が如何に行住坐臥芸道に徹していたかについては次のような逸話がある。

或る年の正月俳優仲間の家を訪ねた時、到来物の山の芋で「とろろ」をつくつてもてなした。然しあやめは一向に箸をとろうとしない。いろくくとすすめたがとうく彼は箸をとらずに終わった。後にあやめの云うには、私は決して「とろろ汁」がきらいで食べなかつたのではない。山の芋は昔から強精剤として知られている。もし私が「とろろ汁」を食わんか、男性としての機能が盛んになり、女形の技のすさむであらうこと恐れたゝめである。

と、またあやめの相手役も坂田藤十郎という名優であつたが、舞台が終つて楽屋で食事する時も、彼は常に、片隅で「おちよぼ口」をし、いかにも女性らしいつましきで、ひそかに膳に向かつていたと云う。谷本氏の興趣あふれる「あやめ物語」が一応終つて、役場から程近い東観山薬師寺を訪う。

## 東観山薬師寺と観音堂

東観山薬師寺は役場から一町ばかり、部落の背後の小丘の上にある。見晴らしのよいところで、高津尾の民家が眼下に連なり、日高川を隔てゝ新緑の山々がそゞり立つ。目を転じると尾曾水力発電所の赤い煉瓦の建物が緑の山を背に浮び、さらにその前景に竣工したばかりのあやめ橋が、その名の如くあやめ色に輝き、ゆるやかな孤を描いて美しい。

薬師寺は「紀伊続風土記」高津尾村の条に「薬師堂境内二十間村中にあり」と記されている。それで堂宇は近年改修された跡が見える。やがて谷本重清氏は淘汰寺の住職として、一行中の天性寺津本鉄城師と誦経の後御開帖をしてくれる。こゝにまつられる諸仏は昨年県指定文化財の申請があり、今春巽三郎委員が調査され、

曾て異委員から本紙に紹介されていたからこゝでは省畧する。

またこの境内に宝篋印塔も一基あり、古い六体の石地藏もまつられている。ともに寺域の山林内に埋もれていたのを井原教育長が発見したものである。或は古い昔の墓地であった名残かも知れぬ。今村ではこゝを清浄な小遊園地にすべく計画中と聞く。

私達は暫く絶景に見とれて時の移るのを忘れたが、やがて山を下りて観音堂へ行く。この観音堂も早く「紀伊続風土記」に見え、私はバスでこの地を過ぎるごとに心をひかれていた。境内に十数基の墓石が並び、板碑も一基見かけた。高野氏が拓本をとった。こゝでも御本尊を拝む。土地の人でさえめつたに御姿を拝むことはできないと云う。

絵馬が二枚奉納されていたが、一枚に大きな鯰の絵があった。なまずはげ（皮膚病の一種）の患者が平癒を祈願したもので、これもやがては忘れられるであろう民間信仰の名残である。また堂の一方に長さ六、七尺、巾一尺四、五寸に及ぶ制札が掲げられ、筆太の文字で太政官布告と題し、幾箇条かの条文が記され、末尾に壬申と年代があった。壬申は年表をくると明治五年（一八七二年）に当り、維新政権が漸く緒につかんとするころである。

一行中の亀石豊太郎氏が一条一条を熱心に読んで、流石にもと教育家らしく大いに感心している。太政官布告は私達は屢々文献で見ることはあるが、こうして生のまゝ制札として見るのは初めてである。もと観音堂表の街道筋に立てられていたのを此処へ納めたという。今となつては貴重な法制資料である。

外へ出ると境内にそゞり立つなぎの老樹は折から花盛りであった。誰かゞ印南町東光寺のなぎとどちらが大きいのだろうかとい出した。本稿を草するに当り試みに「県史跡名所天然記念物調査報告書」をひらくと、東光寺のそれは「幹ノ周地上五尺ノ処ニテ九尺八寸、根回り一丈四尺、樹高約八間、根元ノ心材ハ朽チテ空洞トナレリ」とあり、幹周においてはやゝ劣るかも知れぬ、然し亭々として天をます姿は壯観であり、樹姿においてはこれが勝る。恐らく樹齡三〇〇年は下るまい。一代の快男児三十木矢之助の悲劇的な末路も、三都の人氣を湧きたゞせた名優あやめの童時代も、このなぎは眺めてきたに相違ない。

## 矢之助の遺品 船津の出土物

観音堂から再び村役場の会議室へ引きかえす。考古学専門の高野光男氏が一人で、この村から出土した夥しい石鏃や土器片の実測を続けていた。そもそも従来の調査では、日高地方の石器や土器類の出土は、平野の周

辺や海岸線に近い地に限られ、日高川中流地帯では発見された例がなかった。従って日高川流域でも船津地方から上流地帯の開発されたのは、比較的新しいのではないかという見方が行われて来た。ところが七・一八水害後、まず川辺町和佐地区や同町松瀬地区の縄文遺跡の発見につづいて、当地の遺跡が報告されるに及び、従来の定説が根本からくつがえされた。即ちわが国が歴史時代に入る遙か以前に、すでにこの地方まで人類が住んでいたことがわかったのである。恐らく遺跡や遺物こそ発見されていないが、この様子から推定すると、石器時代の人の足跡は龍神方面まで及んでいるであろうとの説も一部で行われている。

会議室の机上に運ばれた数百点の石鏃を中心とする石器や土器片は、何れも井原教育長の採取にかゝるものであるが、水害後のあの混乱の中でよく努力されたものと感嘆にたえぬ。出土地は現代田畑に復旧された所が多いが、うっかり見すごしていたなら、或は永久に埋れてしまったかも知れない。

そのうち井原正雄氏宅に伝わるという、三十木矢之助愛用の横笛が披露された。笛は長さ一尺三寸、直径八分、ひる巻を施し、一端に矢之助の定紋という舞鶴の美しい銀の装飾がある。笛は錦地らしい袋に入れ、さらに長さ一尺三寸二分、直径一寸二分の竹の容器に納めている。

矢之助姓は井原氏、壮年時代中山中組の大庄屋となり各地に灌漑利水の工をおこし、大いに地方産業開発につくしたが、一面能に親しみ横笛と鼓の妙手として知られた風流人であっただけに、遺品の笛もかなり手すれがしている。私達はこの一管の横笛を前にして、天和三年五月十三日（一六八三）刑死したと伝える一代の快男児の生涯を偲んだ。この笛は古くから井原家に伝わり、もとは二本あったと云うが、先年大和の売薬行商人の請うまゝに一本を与えたと云うが、何にしても珍品と云わねばならぬ。

私達はまた同家所伝の井原家系図を見る。頗る詳細な者で且つ長巻である。一々これを写しとる時間がなかった。

ついで同地井原利吉氏所蔵の古文書を見る。古文書は全部で数通あるが、まず一番長文のものをひろげる。「乍恐内存奉願口上」と書いてある。今ならさしずめ「陳情書」か「嘆願書」に相当する。

「一、私代々仕来申候筆軸商仕出之儀ニ付云々」と云う書き出しではじまるかなり長いものであるが、要点をいうと

当村の平次兵衛が元（一六八八）禄（一七〇四年）頃から郡奉行の書付を得て百姓の合間に代々当地の矢竹を買入れて筆軸製造をして来た。

ところがその後家運が衰え若干の借金さえてきた。そこで船津、尾曾、老星の人々が平次兵衛の借金を支払うから、筆軸製造売買権を得たいと郡奉行へ願出たが、平次兵衛の借金は高津尾村の庄屋定右衛門

が親代りになって返済し、冥加金として年々銀四十匁ずつ納めさせるから、これまで通り平次兵衛一家に筆軸家業を続けさせ、他からの願出は取上げないで頂きたい。

ざっとこう云う趣旨のもので、江戸時代の地方産業経済資料として頗る貴重なものである。私は一行中の田端憲之助氏に読み上げて貰い、大いそぎで一通だけ写しとった。他の分も機会を見て井原教育長が届けてやると約束してくれる。

平次兵衛の子孫は今もこの近くにあり、同行の平野一良氏の祖母の里にあたり、現代も屋号を「軸屋」とよんでいる等、流石に古い村里であることを思わせる。

午前中の予定が大方終わったところで、ビールが運ばれて来た。思いがけぬ歓待で一同思わず面をほころばす。

## 広瀬の宝篋印塔とあやめの位牌

午後は公民館で仕立ててくれたオート三輪で先ず広瀬の宝篋印塔を見る。塔は道路から二、三間上がった共同墓地にある。「県史跡名勝天然記念物調査報告」第七号所載の芝口常楠氏の記事によると、台石の銘文に

願以此功德 普及於一切

我等与衆生 皆共成仏道

応永<sup>(一四二〇年)</sup>二十七年十二月三日敬白

とあり、右側に

在□名□□□□

比丘□□越□逝去

□□□□現在父母

兄弟六親眷属

三界□□衆生

平等利益□□

「中津村の文化財」第一号 石造遺物

奉為□菩提□□

比丘意趣過去

七世父母現在父母

兄弟六親眷属

三界大道衆生

平等利益

とあると云うが、風雨に摩耗して読み得ない。この塔はもと川向かいの朝日明神社の境内にあつたが、明治<sup>(一八七〇年)</sup>四十一年同社が長子八幡社に合祀した時、ここに移されたものである。又この明神の社地を、土地では大塔の森とよび、同村高尾氏の家伝では、大塔の宮護長親王の侍女某が有田郡で親王の子を生み初王と称したが、

山を越えてこの村に通れ、高尾氏の祖先が御養育に當った。後、初王は広瀬に於て薨じたので、墓畔に祠を営み初王明神、或は朝日明神と崇め、社地を大塔の森と称したと云う。

ついで車を転じてあやめの生地小原長滝に向かったが、途中あやめの位牌をまつている尾曾、駒場李衝氏の宅を訪う。駒場氏は代々小原長滝に住んだが、今から数十年前にこの地に移った。あやめの位牌は今の家を新築した際発見したものであるが、その際もとの位牌は余り古びているので写しかえた。然し当時は誰もあやめの存在に注意しなかつたので、何等の作意も加えず極めて自然な気持ちで昔のまま写した。現存の位牌は長さ五、六寸、幅一寸五分位の白木づくりで、表に

定信覚良恵信女

裏面には

寛政十二年七月二十一日

為 芸名あやめの精霊

頓生菩提

と記されている。定信良恵信女とは如何なる女性であるかはつきりせぬが、谷本重清氏の考証では恐らくあやめの従姉妹にあたる人で、あやめの歿後その追善供養を営んだ際のものであらうと云う。

ついで竣工したばかりの「あやめ橋」を渡って対岸の小原長滝に行く。「日高鑑」を見ると芳沢あやめが生まれ延宝頃（一六七〇年代）は、小原長滝には八軒の農家と三町三反の田畑が記されているが、今は一、二軒を数えるに過ぎぬ。塩崎元船津村長が説明に来てくれた。

かなり高い山々が前後に迫って、その間を日高川が清らかな音を立てて流れている。対岸は千仞の絶壁が連なり、小原側にわずかの平地がひらける。塩崎氏が指し示されるあたりにあやめの生家があつたと云い、近年まで美しい水の湧く井戸も残り、あやめ井戸と名づけられていたと伝えるが、七・一八水害ですっかり荒廃し、今は雑草が生い茂るに任せている。「あやめ草」の一節に、

元々草深く山の泉に生まれたるものなれど云々

とある情景そのままである。

私達は再び歩を転じ、オート三輪で長駆して佐井の鳴瀧を見物した。鳴瀧は「紀伊国名所図会」に

日高川中木村領にて南より北に向いて流れ奇岩怪石兩岸に錯落し奔流其間に懸り激怒雷の如く飛沫雪を噴が如し川筋の内五滝のその一つなり。傍に神の祠あり

と記され、今も奇岩怪石が播居するが、尾曾発電所の開設以来水量が乏しく、往時の壯観は見られない。水

害以来少なくなつたと云うが、所々の岩角に燃える様な「さつき」が辺りの緑の中に鮮かである。

ついで引返して広野の薬師を拜む。三株ばかり立つ銀杏の樹陰におおわれた小堂で、藁葺の屋根が珍しい。正面の格子戸に布製の乳房が夥しく結びつけている。乳不足の婦人の祈願するもので面白い土俗信仰である。

中木の宝篋印塔はもとこの境内にあったが、大正四年(一九一五年)ここから数町下手の共同墓地に移された。井原教育長の先導で山を上つたが中々見つからぬ。可成急坂である。或は道を取違えたかと思つたがやつと行当つた。上部がかけているが現在の総高三尺九寸位。昭和十四年(一九三九年)三月和田喜久男氏が拓本をとつた処、次の如く読まれたことが史跡報告第十九号に芝口常楠氏から報告されている。即ち

□結□講衆

道中通世

家□

□大夫次郎□

部ア又太郎

次郎大夫四郎三

応永廿二年(一四一五年)

三月□日

一結時講衆等  
中蓮山

宗大夫次郎大夫

法印又太郎

次郎大夫四郎三郎

応永廿二年乙未

三月三日

「中津村の文化財」第一号 石造遺物

と訓むべきか」とある。

これで高津尾方面の予定が終つた。一旦役場へ引きかえし、井原氏や谷本氏に別れ、さらに船津まで下る。

## 船津の磨崖物

オート三輪車を船津郵便局前で止め、岡田義一村長の御案内で日高河原へ降る。この辺りは川巾が狭く、兩岸が驚く程高い。七・一八水害で河畔の水田が根こそぎ洗われ、今その復旧工事が行われている。私達が船津から高津尾方面に行くとき聞いて、当地出身の高尾英吉氏からは非船津の磨崖物を見て来るようにと御注意をうけていた。その磨崖仏というのは、滝本橋の直ぐ側の日高川畔にある。

辺りは幾丈もある巨岩が累々と郡立し、日高川の流れが裾を洗い、底の知れぬ青い淵をなしている。そうし

た巨岩の一つに千手観音の坐像が浮彫りされているのだ。もとはかなり彫りも深かったのであるが、長い間の風雨と、洪水ごとの濁流に洗われ、細かい部分が大分摩耗している。高野氏がカメラを持ち出したが光線の具合で難しいと云う。試みに実測すると、総高一米四〇、このうち蓮弁の高さ二五糎、像の高さ八〇糎、巾六五糎で銘文も伝承もない。

岡田村長の説ではこの辺り古来は船や筏の難所で、屢々水難者が出た処である。この観音像も恐らくそうした水死者の供養のものであると云う。また高尾英吉氏の説では、何かの理由で一時に多くの水死者が出たので、その冥福を祈ったものではないか、従って近くの寺で過去帖を調べると、或は思い当たる様な事があるかも知れぬと。何れにしてもこれだけ勝れた磨崖仏は、この川筋を通じて他にあることを聞かぬ。洵に珍重さるべき存在である。製作年代の推定は難しいが室町頃と見て大過あるまい。

## 船津の今昔

これで盛沢山な予定をすっかり終えた。今日は随分広く見て回った。幸いにして村当局がオート三輪を心配してくれただからよかったものゝ、歩いていたらこの半分も覚束なかった。厚く感謝しなければならぬ。バスまで少し時間があると云うので、招じられるまゝ高尾郵便局長邸の二階で少憩する。高尾邸は県道川上線に沿う高台にあり、二階からは日高川の流れや川を隔てた向の山々が窓外にせまるのが目に入る。

○ 山がなれども船津は都、出船入船五十五はい。

トラックやオート三輪車ができてからは昔日の面影はないが、昔の船津はこの俚謡にうたわれた程繁盛した地である。川上、三山路方面の林産物は、船で或は人の肩や馬の背で運ばれて一旦こゝに集まり、こゝから川船で御坊方面へ運び出された。また奥地で消費する日常物資も御坊方面から川船で上され、こゝからまた川奥の村々へ運ばれた。云わば日高川筋の重要な集散地であったのだ。

当時の状況について、昭和十三年一九三八年五月発行の生駒国次郎編修の「稿本日高郡郷土読本」第二巻に次のような文章がある。中々要領のよい名文なのでその一部を転載させて貰う。

「おぢいさん、ずっと前頃には、船津はずいぶん繁盛したのだそうですね」

「そうだな。近頃はこんなさみしい所になったが、前には大そう賑やかな所だった。産物は沢山集ってくるし、人の出入りも多いし、川には川舟が数十隻も往復して、まあ日高川筋第一の都だっただろう」

「山家なれども船津は都、出船入船五十五隻、と歌われた位だ。その当時は問屋や宿屋など、朝から人の出入りで賑わうし、仕事は沢山あつて中々よかつたね」

「川舟が五十五隻もあつたのですか」

「一番多い時はそれ位もあつたかな。何しろその頃、川奥の産物は殆んど、人や馬の肩で船津まで運ばれて来て、今度はここから川舟で御坊の方へ送られたものだ。炭が一番多かつたが、女の人などは雨の日でも傘をさして二、三俵ずつ背負つて来たものだ。川舟は帰りには、又川上の村々で必要な物品を積み込んで来たものだ。あの発電所の工事に使つた機械や、いろくゝの品物なども、皆川舟で運んで来たのだ。旅人もこの舟で往復したが、冬などは炭俵の上にごぎをしいて、その上で炬燵をかゝえて乗つたのだよ。のんきなものだったな。こんなわけで毎日川舟の帰る頃になると、荷物を運ぶ人や食物を持つてくる人達で混雑したものだ」

「舟乗りさんの仕事は、ずいぶん愉快でしたらうね。景色のよい所を上つたり下つたりしたのですから」  
「いや、それが仲々苦勞の多い仕事であつた。先ず一日で往復するために、朝の三時頃にはもう舟を出したのだ。そして八時頃に御坊に着いて、それから又荷物を積んですぐに引返すのだ。やつと三時頃に帰つて荷物を下ろして、それから明日の荷ごしらえをすまし、家に帰る頃には、もう空にはお星さんが光っているのだ。朝は早いし晩は遅いし、それで隣村の人達は「船津の舟乗りさんの子供は、うちのお父さんの顔を知らん」と云つた位だ。それに往復の途中もえらかつた。白帆を上げて走れる所もあつたが、帰りなどは殆んど舟に付けた綱で引いて上つたのだ。冬の氷のような水の中の仕事や、夏の焼けついた河原をほう様にして舟を引いて上るのには弱らされたものだ」

「おぢいさん、川舟の仕事がそんなに辛いので、この頃止つてしまつたのですね」

「そうでないのだ。辛い位に負けるのではないが、舟を出しても仕事がなくなつたのだ」

「それは何故でしょう」

「それは川に沿つて今のような立派な道路が出来たからだ。それまでの道は巾が一米位の狭いもので、車などは一台も通れなかつたのだ。ところがこれでは不便だと云うので、ずつと奥まで今の広い道が出来たのだ。すると先ず牛車を通い出し、しばらくして馬力車が通るようになった。そして川筋の産物は便利な車によつてどんくゝ御坊の方へ運ばれるようになった。そこへ今ではトラックまで通う様になつて、仕事のなくなつた川舟は知らん間にその姿を消してしまつたのだ。産物で賑わい川舟で賑わつた船津は、こんな事情で今のようなきみしい村になつたのだ」

この文章を読むと、出船入船で繁盛した船津の様子が手にとるように偲ばれる。私は船津の小学生や中学生に、こうした村の歴史を教えてほしいと希望する。それでこそ本当の郷土教育だと思うと同時に、今も遺っているであろう船宿や問屋の記録を調査しておいてほしい。大事な経済資料であるから。

本稿を草しているうち、山中三郎氏から御坊図書館に「役者論語」のあることを教えられ、閲覧することを得たので、同書附録の芳沢あやめの畧伝その他を転載して参考に供す。

## ○ 芳沢あやめ

初代。芳沢の系祖齊藤氏、通称権七、初め綾之助、芳沢ともいった。別名芳沢権七、俳名春水、家号橘屋、延宝元年(一六七三年)生まれ、享保十四年(一七三九年)五十七才で没す。齊藤某の子。幼にして大阪道頓堀の芝居三絃方某に色子となり、後抱主から離れて初代嵐三右衛門の薫陶を受け、若衆方から立役に転じ、後更に女方となった。元禄四年(一六九一年)頃から殆んど京に滞り、段々好評を博し、水木、袖崎、荻野と並び「女形四天王」と称せられ、宝永末(一七〇〇年頃)には女方の第一人者として比肩するものなく、享保二年(一七二七年)には「三カ津惣芸頭」という在来の位附になかった最高位に置かれた。同六年立役に転じて不評、七年女方に復し九年「日本無雙」同十三年「三カ津極無類女形巻軸」の位置を得るに至った。所作も能くしたが、地芸に秀で、殊に傾成事と愁嘆事に妙を得「女の情」の実態を把握して自然味の演出を大成した。

## ○ 役者論語

役者論語と書いて「やくしやばなし」振仮名がある。四卷四冊美濃半截本で、内容は

第一卷 舞台百カ条、芸鑑、あやめぐさ。

第二卷 耳塵集。

第三卷 続耳塵集、賢外集。

第四卷 佐渡嶋日記、しよさ秘伝、三カ津盆狂言品定。

となっている。御坊図書館所蔵の同書は守随憲治の編者復刻本で、一九五四年十一月東京大学出版会発行にかかる。

## ○ 「あやめぐさ」

「役者論語」所収の「あやめぐさ」は、芳沢あやめの演技に対する自然主義的な苦心談集で、狂言作者弥五郎が書きとめたものである。芸術的苦悶の上に、人性的苦難の跡がありありと読める。「あやめ草」は明和八年（一七五八年）新刻役者綱目の中に第六巻として八文字屋から印行されたのが、始めての刊行らしい。筆録者弥五郎が整頓したのはこれより早く、この表としての成立は正徳・享保（一七〇一―一七五五年）ごろと見てよからう。

とは守随憲治氏の説である。

○ 「あやめぐさ」の流布本と異本

前記東京大学出版会刊行の「役者論語」所収の「あやめぐさ」には「わが身幼少の頃より道頓堀にて」以下多少記述に相違あり、殊に「元々草深く山の泉に生れたる」云々の文字が見当らぬ。この点谷本氏に照会したところ、谷本氏が引用したのは大阪図書館所蔵の「あやめぐさ」で、東京大学復刻本は流布本によったため、これを脱落しているとの回答があった。当時のことで二、三の異本が行われたのかも知れぬ。

稿本を摺筆（かくひつ）するに当り今回の史跡探訪に際し、中津村当局が御寄せ下さった一方ならぬ御歓待と御配慮に、心から御礼を申し上げる。  
（昭和三十三年五月三十一日夜稿）

## 仙境龍神温泉

「紀州新聞」昭和三十三年八月十六・十七・十八・十九日掲載

### ①

南紀史蹟顕彰会七月例会を龍神温泉で開くことになった。二十六日午後二時五十分南部発の龍神バスへ、井上豊太郎・谷口秀一・巽三郎・中川化生・中田宇南・宮所恒楠・清水長一郎の七名が乗る。

バスは南部川右岸の快く伸びた稲田の間を走って行く。このあたりの風光はどことなく御坊近在のそれと違ってのんびりしている。家のたゞずまいや、田に彷彿く人の姿、いや村全体がのどかである。これはあながち人口密度や、交通量の多寡の相違ばかりでなく、もつと本質的な処に原因がありそうに思われる。

やがて車が元の高城村に入ると、周囲の景色が急に険しくなった。わずかにひらけた山裾の平地に、しがみつくように点在する家々も余り大きいものはすくなく、平野部で見かけるような新築家屋が殆んど目に入らぬ。

この傾向は谷を上り日高川筋に入り、奥地に進む程甚だしい。戦後の所謂農村ブームや山村景気が、これらの村々を余り潤わしていないように見える。村の面積の大部分を占める山林が、殆んど村外の地主に所有せられ、村人は単に山林労働者であるところに、この原因の大半がありそうな気がする。史蹟顕彰会の使命をいさゝか逸脱するくらいがあるが、バスにゆられながらぼんやりこんなことを考える。

いよいよ切目辻の険路にかかる。バスがあえぎあえぎ登るにつれて、視界が次第にひらけて来た。ところどころで木材を満載したトラックや三輪車に出あう。奥地の物産の多くがこうして田辺に送られて行くのを目のあたりにすると、経済にうとい私も流石に残念な気がする。一昔以前印南町川又から龍神村小家谷を通じて、龍神方面と御坊が結ばれていたことがあった。この路線を改修しても距離的にはやはり田辺に及ばないのである。ろうか、柄にもないことを考える。

峠がだんく、高くなる。車窓から見下ろすと数百米の断崖がつづいて、底の方を南部川の上流が、糸のように白く流れている。数日來の雨に洗われた杉や雑木の林が、まるで一幅の墨絵を思わせる。ついこの間貫通したばかりの隧道の工事場であろう、掘り出された黒い岩石が折からの夏の陽に眩しく光っている。

切目辻は海拔四七九米、現代の峠路は頂上からやゝ低い処を通じているが、それでも四百米は下るまい。日高平野周辺の高峰真妻山五二三米六のほど八合目に相当し、中川氏の説明では竜神温泉場の標高と相等しいという。

## ②

やっと日高・南部両河川の分水嶺を越えて山路領に入る。冬はこの峠を堺にして積雪量が違うというが、成程気のせいかな、車窓に流れる風が何となくひんやりと感じる。目のとゞく限り山また山が涯しもなく連なる。寒川・竜神・川上方面の山々で、何れも標高八、九百米級の高峰である。今は竜神村になったがこの地方はついこの間までは、下山路・中山路・上山路の三村にわかれ、ひと口に三山路とよばれていた。しかしそれも明治以来のこと、もとは山地の荘と称した。如何にも山地の名にふさわしい地である。

下福井・坊垣内等の集落を過ぎると、やがてまた中山路越えの峻坂姉さこ峠にさしかゝる。こゝも標高四百米に近い。峠道の片側が鬱蒼たる松と杉が続き、バスがその間を縫うて行く。時々木洩れ日が車窓に注ぐ。頂上近くなるとはるか山裾をめぐる日高川と、川岸にぼつんぼつんと点在する人家が眺められる。ひよいと昔読んだ独歩の短編「女難」の中に、たしかこれに似た峠道の描写があり、作中の主人公が少年の日、母と共に峠を越すところがあったのを懐かしく思い出す。

バスが南部を發して竜神までおよそ十二里。何れの地も詩情をそゝらぬ処はないが、これほどの勝景は少ない。「彼処が明治二十二年の大洪水のとき、大山潰えで日高川を堰きとめたところ」と傍らの宮所氏から説明を聞く。

時は明治二十二年八月日高川が史上空前という出水の時、今はるかに望む竜神村柳瀬の山が、およそ百間に亘つて大崩潰をおこし、一瞬にして九十余戸を埋め、日高川を塞ぎ十二、三丈の深淵となり、忽ちにして六十余戸を呑み、八十余人の生命を奪つた。なるほどそう聞かされると、両側の山が鋭く迫り川幅が狭い。爾来七十余年、今はみどりの木々が山をおおい、明るい夏の陽が柳瀬の集落一杯に照り輝いている。

### ③

峠の尽きた所がもとの中山路村筑根の里である。「これが中山路小学校」と再び宮所氏の指さす方に目を移すと、噂に聞いたセンダン(正しくはあうち)の大木が校庭に濃い陰を落としている。

最早六十余年の昔話りになるが、明治三十七年の春、藍色棒縞のシャツに對の股引バッチ、木綿縞の袴の尻をはし折り、信玄袋を肩にこの山村に赴任してきた一青年教師、いま御坊市で郷土史の研究を続けながら、悠々老を養うておられる芝口常楠氏の若き日の姿であつた。当時学校は同村安井にあり、四年制で児童数は八十人であつた。

氏はある日学校を訪れた旅商人から五粒のセンダンの実を買い求め、これを苗木に仕立てた。それから四年目、学校が現位置に移転新築したとき、その中の一本を記念のために移植した。それが今では幹回り三抱え、高さ十米程の大木となり、来る春ごとに房状のやさしい花をつけ、村一ぱいに芳香をたゞよわし、全校生徒がすつぱりとその樹下におさまるといふ。遺芳千載とはこのことであらうか。

### ④

バスが安井、五領にかゝると川を隔て、竜神村東の集落が目に入る。日高川の支流丹生の川(流程六里余)が本流に注ぐところで山間ながらやゝ平地がひらけ、見るからに旧家らしい構えの家が其処彼処に点在し、こもり生い茂つた鎮守の杜と鳥居が望まれる。このあたりの大社丹生神社鎮座の地である。

さらに車がものゝ五分間も走つたかと思うと、これも川をへだて、鶴城趾が車窓にせまる。「日高郡誌」によると、城塞は東西三十二間・南北十一間・周八十二間、大字東及び西に跨がるとある。玉置氏(山地氏)累代の居城で、天正十三年豊臣氏の南征で落城した。爾来四百年、今は全山雑木に蔽われ、所々に老松が風にうそぶいている。本丸趾と覺しいあたりにテレビ塔の聳えるのが目に入り、安価な感傷を一度に吹き飛ばす。

さきの丹生神社の杜といふ、この鶴城趾といふ、また村のたゞずまいやテレビ塔といふ、古来東はこのあたりの文化の一中心地であったことを思わせる。また今にのこる「山家なれども東は都」という歌も、古い文化の地であることを物語っている。私はこの古めかしい東の姿に強い魅力をおぼえたが、いまはゆつくり顧みりたいと思ふ。将来機会があればこの地を訪れて、今も伝えられているであろう古俗やかくれた歴史を探りたいと思う。

⑤

南部を発つて最早三時間近い。バスは相変わらず日高川沿いに、高い山また山の間を縫うて行く。車窓に映る風光はいよいよひなびて来る。恐ろしく棟の高い萱葺きの家や、桧皮葺きの屋根に石を並べた農家が、見慣れぬ目に珍しい。

やつと車が停まったがまだ竜神温泉ではない。こゝは竜神村宮代という。二、三日前の豪雨で山が崩れ、約十米に亘り道路を塞いでいるのだ。私達は車から降りて土砂で塞がれた道を歩む。目を転ずると道路の一方は岩石こそ露出していないが高い断崖で、数十坪の下を日高川の濁流が渦を巻いている。一歩誤れば転落の危険が十分ある。また山手の方は険しい崖で、大雨で崩潰した山肌が生々しくむき出している。今も思い出したように小石がばらばらと落ちて来る。余り気持ちがよくない。

ふだんは減らず口の達者な一行も、一寸真剣な顔になる。肥った谷口氏や中川氏が大分苦労したが、とも角無事に越えて再び車中の人になる。

「蝸こくろが鳴いている」

中川氏が傍らの田中氏に話してる。成程そう云えば、そろそろかげりかけた山陰で蝸の鳴くのが聞こえる。

「あつ！ 竜神が見えた」

行く手に大きな二階建ての建物を中心に、かなり家の建ち並んだ部落が見えたので思わず歓声をあげたが、それは旧竜神村役場の庁舎であった。しかしもう温泉は近い。バスが日高川の支流小又川を渡り、山の尾を一回りすると温泉場の旅館が見えた。

⑥

竜神温泉に着いた私達は上御殿の二階に通された。昔紀州公が御巡覧の砌、御泊りになったという部屋で、古風な簾を垂れ、畳もその部屋だけ一段高い。所謂上段の間である。窓をあけると宿の裏手が直ぐ日高川で、涼々たる水声が絶え間なく耳朶に入る。

美しく拭きこんだ長い階段を降りた所に浴室がある。二(一九五三年)十八年の水害後の新築にかゝり、それまでは各旅館とも内湯の設備がなかった。日高川の河岸に位置しているので、湯に浸っている耳へ小石を洗う流れの音が聞こえる。

湯は無色無臭、最近、南部保健支所が四十五年ぶりに分析したところによると

温度四十四度 湧出量一時間三十四石

ヒドロ炭酸(八八二mg) フリー炭酸(八、八mg)

クロール(三五mg) 硫化水素(〇、八五mg)

と云われ、温度では四度、湧出量では三分の一に低下したが、目下盛んにボーリング工事を施しているから、昔以上に回復する日も遠くあるまい。

昔しこの地の温泉寺で売り出していたという「温泉畧縁起」には

|| 抑温湯の由来を尋るに往昔役之行者中之峰修行の時この地を踏わけ温泉の湧出を聞き給へり、其後弘法大師此処に来給ひ行者の芳しよくを慕い再び泉源を改め薬師如来の尊像を刻み方丈の草堂を結び安置し云々 ||

と見え、またその始めは有田郡保田村上湯川の湯平に湧出していたのが、いつの頃からか、この地に湧出したとの里伝もある。

その後徳川初世頃から、温泉の効験が広く世に知られ、藩祖南龍公は浴室をつくらせ、六軒の家を建て、殿垣内辺の百姓に下賜された。源氏の後裔といわれる竜神氏がこゝに移り、旅館を開業したのはこの時代である。また寛永十六年(一六三九)藩主の来湯したらしいことが、竜神氏系図中の左の記事により知られる。

一、新御殿 湯本惣助

一、御宿所 二十年來承勤

一、御諸士宿 竜神村小森弥太郎

一、同 断 湯又村是は田辺鍛冶尾与助榎本与助渡ス

一、同 断 小又川村助兵衛

一、同 断 広井村野々河河内屋甚左衛門

一、同 断 二軒分薬師堂長順弟子 権六、七之助相勤ル

右六軒の内四軒は四カ邑より罷出相勤筈、二軒は権六、七之助相勤筈外に御供長屋小家不殘御下宿罷仰付也。

今にのこる上御殿や下御殿という温泉宿に不似合ないかめしい屋号や、ものものしい上段の間の造作なども、こうした古い由緒を物語るものに外ならぬ。

この温泉は昔から万病にきいたが、特に楊梅瘡(梅毒)には特効があつた。そこでこんな山中にもかゝわらず、遠くから湯治する者が四時絶えなかつた。現代湯本の戸数は約二十戸、このうち旅館数は上御殿・下御殿・えびす屋・有軒屋(ありのき屋)・よろずやの五戸。他に商店に二戸・郵便局・農協・床屋・大工・山林労務者となつており、このうち温泉株(温泉旅館の営業権)をもつものが十戸あるという。

古来わが国は火山国といわれるだけに到るところに温泉が多く、和歌山県だけ数えても、白浜・湯崎・勝浦・湯川・川湯・鮎川・湯の峰等五指に余る。しかし竜神温泉ほど俗化してない所は少からう。「名所図会」や「風土記」の時代そのまゝと云つてよい。温泉地につきものゝアベックすがたなど楽しみにしたくとも見当たらず。中里介山が「大菩薩峠」の竜神の巻きの舞台にした山河の姿が今も遺つてゐる。

うっかりすると温泉宿室町家の女房お豊が、いまも向いの旅館の旅館の二階から表を眺め、火薬に吹かれて失明した机龍之介が温泉寺のあたりから降りて来そうな気がする。上御殿には娘のおあやさんはじめ、幸子さん 栄子さんの二人の女中さんがいるが、まるで人ずれがしてない。人境ともに全く仙境の一語につきる。

私達は夕食後遠いところを集まつてくれた土地の方々三十数名から、いろいろ面白い話を伺つた、「名所図会」に記載されているこの地特産「桧笠」や「桧籠」も、明治末年を最後に廃絶したこと、山の神祭りのこと、山稼ぎ仲間に旦那・庄屋・横などの制度が崩れずに保たれていること等、話はなかなかつきぬ。やがてこの家の主、竜神正雄氏は、天誅組の烈士水郡長雄が小又川に幽閉されたとき、その倉の柱に書きのこした和歌を皆の前に持ち出した。数年前の台風でこの倉が倒潰したとき、和歌の書かれた部分だけ切り取り、竜神家に保管されて来たのである。

皇国のためにとつくすまごころは 神や知るらん知る人ぞ知る

九十年の歳月を経て文字の痕はやゝうすれて読み難い所もあるが、憂国の至情は今も読む者の胸にせまる。

## ⑦

翌二十七日六時過ぎに目がさめた。昨夜は終夜枕の下に日高川の流れを聞き、雨の音かなと間違えた程であつたが快晴である。皆の起き出さぬ間に温泉寺に足を運ぶ。寺は街道から数十歩の地にあり、もとは古義真言宗高野山興国寺であつたが、現代は禅宗と云う。

里伝によると弘仁年間(七八四―八〇〇)空海が来錫して温泉を見出し、難陀龍王の夢告により草庵を結んで

自作の薬師如来像を安置した。後、宝永二年（一七〇五）僧明等、腫物治療のためこの温泉に来たり、病癒えて龍王社と薬師堂を再建し温泉寺と号した。明治初年（一八六八年）の記録では桁行六間・梁行四間・境内百二十五坪・信徒も七十八人あった。明治十七年一月十六日、留守居の老僕の過失から火を発し、火は湯本一円にひろがり、わずかに温泉浴場を残したのみで全村類焼の厄に逢うた。その後再興に至らず庫裡を建て、檀戸十二戸で住職がなく、留守番が一人いる。これがざつとした温泉寺の歴史である。

私は一人で御本尊を拝み、境内から湯本の人家を眺めた。ここにも耳石と布製の乳房の奉納されているのが興を惹いた。

朝食後宿の主人竜神氏から土地の話を伺い、系図書一卷を見せて貰う。竜神氏は源氏の後裔、治承四年五月（一一八〇）三位頼政が宇治で討死にしたとき、末子頼氏は京を連れて日高郡竜神谷殿垣内に匿れ、その地を領し竜神氏を名乗った。系図書は頗る浩瀚（こうかん）詳細を極め、ところづくに累代諸人の戦功、主だった出来事が書き入れられ興味をひく。私はそのうちの二、三をいそいで写しとった。

そもそもこの系図は竜神家の家宝として累代相伝して来たが、明治十七年の大火の際、あいにく先代竜神氏が他行中で焼亡するところを、辛うじて取り出した仏壇の引出に納められていたので免れたという由緒がある。

次いでこの辺りに地藏堂か小祠がないであろうかと聞くと、ここから数町下手に「ツビ腫れ地藏」と云うのがある、云い難そうに答えた。これはひよつとすると飛んでもない性神かも知れぬと、早速宿の自転車を飛ばして調べに行ったが、ありふれた石地藏であった。ひどく風化して既に尊顔の目鼻立ちもわかり難い。側面の文字も判断できぬが、わずかに延の字らしいのが認められた。上に一字あったようだから寛延（一七四八—一七五〇）と読むべきであろう、別の側面には

大応寺□齊願之

世話人 豆腐屋新助

とある。大応寺は竜神村東の禅刹であるが、試みに歴代住職の名を調べたが齊の字をもつ者はものは見当たらず。私の写し誤りかも知れぬ。

竜神氏の説明によると、この地藏尊はもと道路のやゝ下手にまつられていた。そこでそゝつかしい女房のうちうっかりして尿をしかけた者があり、忽ちツビが腫れあがった。以てその名の来る所以であるといふのである。「ツビ」は云うまでもなく女陰の称である。

「大言海」によれば

つび（名）玉門（つぼみの約転）陰門に同じ。今も伊豆の賀茂郡にてツビと云う。

云々とあり、「倭名抄」や「名義抄」、或は「靈異記」、「史記抄」の文を引用している。とにかく平地ではとつ  
くの昔に忘れられてしまった古語が、いまもなお生きている処が面白い。  
今でも一般にツビという言葉を使いますかと聞くと、時たま話すことがあると云う。やはり深い山地らしい。

⑧

さらに私達は宿から二、三町上手にあたる道路の傍にまつられている経塚を見る。この経塚は一行中の巽三  
郎氏の説明によれば、昭和四、五年頃道路改修工事中発見されたもので、もとは現位置よりやゝ下手の川寄り  
の地にあつた。工事の際塚石を除くと、地下から河原石が仄に何杯となく出土し、その一石一石に経文が一字  
ずつ朱書してあつた。碑は高さ一尺五寸位、表に

先祖代々諸聖靈

□□施主□中靈

奉書写一石一石

大乘妙典全部

聖尊□諦居士

諦岳慧聽大姉

とあり右側面に

干時寛政十年戊午卯月

左面に

榎本輝勝敬書

とある。里伝によると、昔旅の六十六部がこの地で病死したが、かなりの所持金があつた。そこで手厚く葬つ  
たが、所持金がなお余つたので、追善供養のためこの経塚を営んだものと云う。然し碑の文字から見ると伝説  
とは関係がうすいように思われる。ともあれ徳川時代、それも末期に近い寛政頃の経塚の発見例は極めて少な  
く、本県では新宮に存在するものと、わずかに二例にすぎぬときく。

宿へ戻ると地元の青年が刀と槍を持って来た。専門家の谷口氏が鞘を払うと、刀身に少し曇りがある。無銘  
ながら戦国時代の古刀と鑑定がついた。槍の方は柄が折れている上、穂先がひどく錆びていた。紀州若山住直  
次の銘が読まれた。直次は有名な若山の刀匠南紀重国の五代目に当たり、藩政末頃の人物と云う。

×

×

×

調査はようやく手をつけたばかりである。殊に史蹟に富む大熊や殿垣内を見ずに帰るのは、かえすかえすも残念だが、別の機会をまつより他はない。かくて私達は山高く谷深く、白雲しきりに去来する仙境竜神につきぬ名残を惜しみつゝ、宿の人々におくられて車に乗った。

(昭和三十三年八月一日稿)

## 随筆「みなべ」に寄せて

「紀州新聞」昭和三十三年八月二十七日掲載

随筆「みなべ」第一集が出た。先月南紀史蹟顕彰会で竜神温泉に遊んだ時、同行の中川南部公民館長から、この計画を聞き、「それは面白い、是非やってみよう。そして出来上がったら一冊送ってほしい」と頼んでおいたところ、約束通りとどけて呉れた。

随筆南部はA五判、四十三頁、謄写版刷りながら印刷も鮮明だし、表紙の岩代王子の絵など中々気がきいてる。中川館長の序文に

日常の一寸した話題にも聞き捨てに出来ないものがあります。特に老人の話等には歴史的に残して置きたい多くのものがあります。

又人知れず貴重な研究を続けていられる篤志家もわが町に多いことでもあります。

これらの人々をお願いして、想い出や研究を綴って置くことは、今後の人々の為に大きな貢献をすることを考え、随筆南部の発行を企画した次第であります。云々

とあるように、主として南部町在住の人々の回想談を集めたものである。



一寸目次の一部を拾ってみても

うえんじよ	安部 弁雄
町の今昔	田中 大一郎
昔の南部花柳界	おじ奄
南部金融界の思い出	浜野 大吉
南部の貝について	尾崎 光之助
みなべの梅	中川 長三郎

埴田鍛冶考 . . . . . 堅田 生々  
南道の人形芝居について . . . . . 志場 勝之助  
野村第一風師の思い出 . . . . . 鈴木 刘穂  
梅仙墨の想出 . . . . . 鈴木 しげを  
地方新聞の芽生え . . . . . 福本 登  
と多方面にわたり、執筆者の顔触れもさまざままで興味が深い。



戦後地方史研究が盛んになった。本県でも「田辺市誌」・「箕島町誌」をはじめ多くの郷土誌が発行された。然し町村誌となると、なかなか骨の折れる仕事でその発行も容易でない。その点こう云う風な随筆風な形態をとると、書く方も読む方も肩がこらないで手軽に取りかかれる。

編集者も断っているように、この集は引続き第二集、第三集と発行される予定である。中々根気を要する仕事とは思いますが、何とか続けてほしいものである。と同時に各村の公民館でもこうした方法で、今や急速に亡びようとしている村の歴史や古俗を、いまのうちに書きとめておいて貰いたいものである。五十年か六十年後には、公民館の遺したいろくの功績の中でも、こうした企てはきつと輝かしい業績の一つとして遺るであろうから。

(昭和三三・八・二三)

## 「七・一八水害誌」を読んで

「紀州新聞」昭和三十三年八月二十三日掲載

御坊市長から「七・一八水害誌」を贈られた。曾て本書の編者寒川万七氏から求められるまま、三、四の資料を提供したことがあったが、それに対する御心遣いかと思う。却って恐縮である。

考えて見ると私も「水害誌」とはまんざら縁がないわけではない。と云うのはこの未曾有の洪水を目のあたりに見た私は、「水害誌」とよぶには大袈裟だが、「七・一八水害見聞記」のようなものをつくりたいと思い、被災地を見て回ったり、御坊近在の水位を調べたり、遭難者の回想談を聞いたりして、ひそかに資料を集めていた。

その後私は居村「矢田村誌」の編纂を依頼され、俄にいそがしくなったため、「見聞記」の方は自然後回し

になった。そんな折柄あたかもよし寒川氏の手で「水害誌」の編纂が進められ、私の集めていたロクでもない資料が思わぬところでチョッピリお役に立った。望外の倖せである。

○  
八月十六日土曜日の午後から翌十七日日曜日夕方にかけて、私は日直やら宿直やらで丸一日半公社にとじこもり、人の来ぬのを幸い、「水害誌」を取り出して読んで寝、覚めては読み、五百頁近い大冊を読み終えた。

そして第一に感じたのは記述が平明な点である。どんな勝れた内容が盛られていても、表現が難しく続者に理解されねば何にもならぬ。まして本書のように一人でも多くの市民に読んで貰わねばならぬものは猶更である。

第二に感じたのは、まんべんなく集められた資料が、忠実にありのまま掲載した点を買いたい。あわてて結論を出したり、生じつかない理論を立てる危険を避けているのは流石に賢明である。それにはまたそれぞれの専門家がある。素人はただそれらの資料を提供するだけでよい。

第三は面倒な数字や統計を煩をいとわず、よく集められたと讚えたい。これらの数字は必ずしも正確ではないかも知れぬ。現にそうした意見も二、三耳にせぬではないが、今となつてはこれ以上求めるのは不可能に近い。これでも矢張り将来不測の場合には一応の基準になろう。最善が望めないとすれば次善で我慢するの外はない。

第四は、第七編の生徒や教師の水害作文が面白かった。総員四十名近い教師と生徒の目に、この稀有の水害がどう映ったか、また彼等の父母がこの天災にどう処したか、人各々によって異なる受取り方に一方ならぬ興をそそられる。

○  
こんなことをだら／＼書いては切りがない、終りをいそごう。編者寒川万七氏は湯川中学校の教頭を勤めておられる。見るからに気鋭の学究といったタイプの人で、これまで「積善読本」、「郷土に即した歴史教育」等、三、四の著述をもっておられる。あながち量ばかりを取上げる訳ではないが、「水害誌」はこれまでの著述に比べて頗る大冊である。教職員というかなりいそがしい仕事のかたわら、よくまとめあげられたものと、その根気に頭が下がる。と同時に苦しい市財政の中から、かなり膨大な出版費を捻出された、市長はじめ市当局の英断に深く感謝の意を表したい。

由来御坊市は極めて文化度の低い町と云われて来た。私なども何時であったか、「御坊は市になったとえらそうに力むが水害誌一冊つくれぬではないか」と毒づいたことがあった。ところが今度と云う今度、数多い県下の被災町村のトップを切つて堂々「水害誌」の出版を刊行された。いまこそ私は不遜であった前言を取消さねばならぬ。と共にこれを機会に市当局も市民の文化情操面に、一層関心を持たれるようお願いしたい。

(昭和三三・八・一七稿)

## 野口あちこち

「紀州新聞」昭和三十三年九月八日掲載

明日から九月と云うのに残暑が厳しい。八月三十一日午前八時野口橋上で一同の集まるのを待つ。今年に入つて五回目の史蹟顕彰会の現地探訪である。しばらく待つ程に、亀石豊太郎氏が見えた。次いで酒井旧湯川町公民館町が自転車飛ばして来た。そこへ日高新報社の林松二氏が案内に迎えてくれる。

蒸し暑さのためと、生憎月末で忙しい会員もあつて集まりがよくない。八時半四台の自転車を連ねて目的地の野口薬師堂に向かう。



## 野口薬師堂

薬師堂へは水害前であつたと思うが、巽三郎氏とお詣りして、御本尊を撮影したことがあつたが、村の様子はその頃とまるで変わっている。以前細い農道であつたところや、小川のあつた辺りを、広い農道が真直ぐに走り、曲がりくねっていた田が、長方形に整理され、その間をセメントで固めた水路が縦横に延びている。あの七・一八水害という未曾有の災害が、こゝでは文字通り転禍為福の実を挙げている。

薬師堂は上野口と下野口の境界に近い字野尻にある。もとは境内であつたと思われる方一町ばかりが、周囲の水田より一際高く、堂の背後は夏柑畑になっている。このため水害のときは堂内の浸水は約六十センチとどまり、佛像にまで及ばなかつたのは幸いであつたが、ひどい荒廃である。とかくするうち高野光男氏が参加して賑やかになる。

御本尊は「旧野口村誌稿本」に御丈け四尺八寸とあり、ほゞ等身大の一木作り。白毫をいたゞいた御顔はふつくとゆたかで、無限の慈愛をたゞえられ、曾て巽三郎氏は鎌倉初期まで遡らせるだろうかともらしていたが、日高地方では稀に見る秀作と云うべきであろう。

それにしても古くから薬師庵とよばれ、一般にも薬師如来と信じられて来たが、この御姿はどう見ても阿弥陀如来である。第一右手の印の縵網相はどちらにしても如来だから問わないことにしても、左手に薬師如来の特徴である薬壺のないのがおかしい。それかあらぬか或る書に野口薬師庵の御本尊は、阿弥陀如来とあるのを見たことがあると云うのを、芝口常楠先生から一寸お聞きした。或は後補の際誤ったものであろうか。

縁起によると、昔叡山の恵信僧都が回国の砌り当地を過ぎ、藪中の大木で三尊の御姿を刻み、傍にあつた七尺四方の石の上に安置してあつたのを、寛永五年（一六三五）熊野の元長坊が来て小堂を営み移し奉るといふのだが、もとより縁起作者の創作で信じ難い。

林松二氏の説によると、往古この近くに西光寺とよぶ伽藍があり、<sup>（一五八五年）</sup>天正の兵火で焼亡したとの里伝があり、今も西光寺の小字名が遺っているというから、或はこの廃寺と関係あつたか、または明治末年までこの地に鎮座していた村社春日神社神社の宮寺であつたのかも知れぬ。堂の背後の夏柑畑に、数個の五輪の塔や、石地藏、<sup>（七五四年）</sup>無縁になつた碑があつたが、その中に宝暦の文字のあるのが混じつていた。さきの春日薬師堂縁起の奥書にも、<sup>（七五四年）</sup>宝暦四年とあつたのだから併せ考えて、宝暦頃かなり盛大であつたのかも知れぬ。

## 安楽寺の善妙寺焼

次いで下野口の安楽寺を訪ねる。秘蔵の善妙寺焼を見るためであるが、それまで一応寺の由緒を知っておかねばならぬと同時に、善妙寺焼に対する知識も新たにしておく必要がある。宮所常楠氏が加わつてまた賑やかになつた。

「日高郡誌」の伝える所によると、文明年間（一四六九—一四八六）和佐手取城主、玉置氏の家老格伊藤治部が、蓮如上人に帰依して居宅を道場とした。その後代々俗体のまゝ真宗の法儀を相続し、玉置氏に仕えた。徳川頼宣が紀伊藩主となつた翌<sup>（一六二〇年）</sup>年、日高川金屋の淵で川狩りをして雨にあい、伊藤の道場で休息をし、当主の次郎右衛門（治部の玄孫）に謁を賜つた。この縁故で歴代の藩主が日高巡遊の際、拝謁を許された。寛永十年（一六三三）六月、本山から木仏の本尊と寺号を免許された。これが安楽寺の畧史である。

また善妙寺焼については、これまでも二、三回本紙上で説明を試みた通り、御坊市島善妙寺の第六世玄了が仏門に仕える傍ら、花器や水指、茶碗などを焼いた。もとより営利を目的としたものではないから、その作品は簡雅素朴で紀伊陶器中の逸品と云われる。

製作年代は明らかでないが、玄了の歿年や藩主宗直卿へ献上のことから推定して、大体享保から寛永の間（一七一六—一七五〇）であろうと云うのが定説となっている。

何しろ紀州産陶器中でも最も古作の一つである上、了玄一代の製作で、おまけに趣味的作品だけに、大量生産でないから今日遺っているのは極めて少ない。昨年私達が本家の善妙寺を訪ねたときも、意外なほど所蔵はさみしかつた。

従って実物について比較研究の機会が殆んどない。また作品の多くは無銘で、稀に（善妙寺）の三字の小判形印や「日高」印がある程度と云われるから、いよいよ事が難しい。

安楽寺所蔵のものは

大皿一枚（直径三十四糎）

湯呑茶碗五人前

菓子皿二枚

湯こぼし一個

の五種類で、ほかに善妙寺焼と伝えられる、高さ五十一センチ位の茶壺があるが、何れも無銘である。そしてよく見ると如何にも素人が楽しみに焼いたものらしく、山きずやうわ薬のゆき渡らぬ個所や貫乳が多く、形もあまり整っていない。色は備前焼の暗褐色よりも、むしろ青磁に暗色を帯びたという方が適切かと思える。

御坊近在の旧家にも屢々善妙寺焼の秘蔵されているのを見聞するが、これだけの点数を一堂に集めているところは一寸他所にあるまいと思う。水害の際床に飾っていた菓子皿と、男山の茶碗を失ったと聞いたが返すがえすも惜しい。十分保管に留意していただきたい。お金銭は散じてもまた集めることができる。古い文化の所産である美術品は一度失えば二度と生み出すことはできない。

私達は古陶を囲んで四方山話にふけり、手にとっては冷たい陶器の感触をたのしみ、昼近い時刻、寺を辞しようとして境内に降りたとき、亀石豊太郎氏が変わった墓を発見した。

その墓はまだ新しいものながら正面の上部に、牛の顔を鮮やかに浮彫りにしているのだ。鹿児島県の桜島はおもしろいところで、遺族の者は生前故人が愛好したものを墓の台石に彫りつける。近刊の朝日写真ブック第七〇号を見ると、酒好きの人の墓には盃、花好きの人には花、茶人には茶器とさまざまなものを彫りつけている。また外人墓地などにはよく愛犬や愛猫の墓を見かけるが、この地方では初めてと云ってよからう。そして牛の墓の下に

塩崎家故牝牛霊

別の二面に

塩崎安蔵建立

昭和二十八年七月十八日六才

とある。林松二氏や伊藤住職の説明を聞くと、七・一八水害で溺死した牛のために建てたものと云うが、まことにゆかしい。口で動物愛護を説き、道徳教育の必要を叫ぶのは多いが、これだけの心掛けの人は滅多にあるものではない。しかもこんな人は何の言葉挙げもせず黙々として仕事に励んでいる。古人云えらく「云う者は知らず、知るものは云わず」と、と角、口舌の雄には感心するのは少ない。話は飛んだとろへ外れた。先を急ごう。

### 伊藤茂卿の墓

伊藤茂卿の墓は下野口から熊野へ越す太子峠の傍ら、藪畑の中にある。いままで案内の労を勤めてくれた林松二氏は所用があつて一行と別れた。私等だけで墓の所在が判るかと不安を覚えたが、さき程から善妙寺焼見学を共にした伊藤儀三郎氏が、気軽く先導を引き受けてくれた。

伊藤氏は寺の近くに住んで、南海果工株式会社に勤め、赫丹と号し俳句をたしなまれる。その作品は時々本紙上で拝見するが、どちらかと云えば割合絵画的な艶麗な作風であつたように記憶している。或は私の思い違いかも知れぬ。もっともこの時は赫丹氏とは全く気付かなかつた。知っていたらもっと挨拶のしようもあつたものを、お詫びの外はない。

この峠を太子峠とよぶのは、明治末年合祀されたが、近くに村社聖徳神社が鎮坐していたによる。峠は割合

ゆるやかな勾配で熊野の方へ延びていて、その八合目ぐらいを少し入った藪畑の傍らに墓がある。伊藤茂卿は前記聖徳神社の神主で、師匠屋として村の子弟に読み・書き・算盤を教えたが、特に書に巧みであった。碑は弘化三年丙午（一八四六）、門人達が建てたものである。

私達は生い茂る夏草を踏んで墓前に額いた。墓は高さ六二センチ、四重の台石の上に据えられかなり大きく、八角形に作られているのも一寸珍しい。正面に

従五位駿河守維景後裔工藤莊司景光

十一代伊藤治郎 訶之十代孫

伊藤治部允藤原茂卿神靈

とあるのも、今から見ると大分時代めいているが、幕末の神職とあれば当然かも知れぬ。ついでをしへ子のおもひ建つ碑の石文に

しるせる名のみ朽ちせざらまし 茂卿

と流石に手習いの師匠だけに美しい文字で刻んである。私は碑の文字の一入りならず優雅なことや、自作の歌を撰んでいる点から考えて、茂卿は生前門人達に歿後の建碑を依頼し、万端の用意をととのえておいたのではないかと推測する。別の面には

天貴御先祖代々神靈

弘化三年丙午十二月之建

門弟中之建

## 熊野神社

伊藤氏と別れて熊野神社に向かう。此処からは高野光男氏が案内役である。北熊野から神社の馬場への道はかなり峻しい。正午近い太陽が容赦なく照りつけて暑い。境内の樹陰に自転車を置いた私達は、社頭に聳える南龍公御手植えの太い二本の松を仰ぎ社前に参拝する。

熊野神社の由緒を社の記録にもとめると、いつの頃か塩屋浦の海中に顕れた神は、同地権現磯から上陸し、牟婁郡熊野に至らんとして暫し歩をとどめた旧跡という。往古は本社十二社・末社四十社・境内八町四方で、神主一人・禰宜七十五人・神馬七十五匹・鉾七十五本を算え、社殿も荘厳を極め神領も多かつた。また祭礼の

時は神主・禰宜七十五人が馬に乗り、御幣二本・鉾七十五本を擁し、鼻高の面を先頭に、金の御輿で遠く田辺の莊牛の鼻に渡御し、郡中の百姓が皆従うた。威風堂々として辺りを払い、道筋の家々は煙をあげることを遠慮し、鉾に付けた鼻高の面が海の方に向えば不漁の兆しとして漁師達は恐れ、途中で馬がいなければ其処に凶事があると人々は戦々とし、絶えず道中を清掃し潮をうって只無事に過ぎるを祈った。

然し打ち続く戦乱で社殿も荒廃し、遂に十二社を合祀して四社とした。「続風土記」に「本神社、一御前社、大和御前社、大宮、右四社合わせて熊野権現といふ」のがそれである。この四社はもとは境内を相連ねていたが、中古大宮だけが境内を別にし、明治初年には誤って無格社になった。

また田辺中の鼻(今の鼻)への渡御も永祿頃(一五五八—一五六九)から廃絶したが、近年までそこに御所の跡というのがあり、その後は中の鼻にかわり、川辺町入野の大山権現(大正初年土生八幡社に合祀)へ渡御した。

この他特記せねばならぬのは、当社と大山権現が瘡瘡の守り神として有名だったことである。即ち南龍公の三男頼純右京大夫を初め、吉宗公は何れも瘡瘡を病んで、両社に祈願して全快し、そのため寛文中(一六六一—一六七二)には、わざ／＼南龍公の親拝があり、また年々供米十二石を賜ったり、社殿の造営をされた。

然しこうした藩主の手厚い保護も廃藩とともにやみ、また今次の敗戦で愈々維持が苦しくなった。曾ては壮麗であつたと思われる神殿の桧葺も、上屋の雨漏りのため腐朽し、扉や破目板に彩色の痕のみ残っているのも傷ましい。

### ○ 神歌と神宝

神主中村氏は生憎不在であつたが、前もってお願いしてあつたので、私達は社務所に案内され、令息から数々の古文書や神宝を拝観する機会を与えられた。その中には享保(一七一六—一七六六年)年中の「殺生禁断」の制札をはじめ、瘡瘡平癒の祈願状や、神社の由緒書があつたが、特に神歌の古写状に興味をひかれた。

神歌はすべてで十三首あり、「南紀土俗資料」に収録されているが、その一、二をひくと

○ はつ王子のみねの細道ほそくとも、才才つれだに行かば車路とせう。

○ 朝日さす夕日かがやく熊野山、才才熊野山 いづれもだけに雲やかゝらむ。

○ 此の御前のましますさきは地もゆるぐ、才才地もゆるぐ 木草もなびくちやうの早さよ。

○ 此の御前けふの御幸に逢はうとて、才才逢はうとて いさなる神も今ぞまします。

○ 鷹の子はいづくか住所入乃山、才才入乃山 いまおり居所は耳聞の宮。

○ 筑紫船上るときかば紅つけて、才才紅つけて 齒黒めされて出てすきや。

等々、よくわからぬ点もあるが、いかにも歌詞が古雅で朗々誦すべきであるのみならず、本社の成立を考証

すべき重要資料と思われる。この神歌は毎年の大祭に神前で奉唱したが、第八首目から第十一首目までは秘文として太鼓を打ち鳴らし参詣者に聞かせなかつた程、その取扱いも厳肅であつた。

いま神社に伝わる神歌の古写は、寛文十年（一六七〇）塩屋浦の医師で当社の社僧であつたらしい杉浦安心が、旧伝のものを写しかえたもので、末尾に

寛文庚戌天十一月六日杉浦安心三十八書之

と奥書がある。紙はありきたりの和紙で、長さ七十<sup>寸</sup>・巾二十七<sup>寸</sup>、十六折に畳んである。この粗末な一片の紙片が長い年月をよく伝えられて来たものである。

私達はこの一葉の神歌の古写を辿りながら、悠久の古代遠く出雲の地から、はるか紀州路に植民して来た出雲族の一団を思い浮かべた。彼等は塩屋浦に上陸して、再び熊野に入るに先立ち、この辺りを根拠として暫し居をとどめ、勢力を扶植したのである。そして山河幾百里を距てた故国出雲の地をしのび、出雲と同じ日の御崎・三尾・比井の地名をこの山野に附して、わずかに故国を懐かしんだのであろう。

#### 神歌第五首目の

○朝日さす、夕日かゞやく熊野山、才熊野山いづれもだけに雲やかゝらむ。

の中のいづれもだけは、恐らく出雲ヶ岳の誤りであるとは、故吉田東伍博士の考説であるが、そう云えばこの一首の底には脈々として、古代出雲族の望郷の情が流れているような気がする。

また、次の六首目の

○この御前のましますさきは地もゆるぐ、才地もゆるぐ木草もなびくちやうの早さよ。

からは、開拓者の悲壮な雄叫びと気魄が、胸をゆすぶってやまぬ。斯様に味わってみると、わずかに十三首の神歌が無限の興味をよぶ。

ついで有名な鼻高の面を見る。渡御の際これを銚につけて列の先頭に立ち、鼻高の面と云えば道筋の人々を慄え上らせたものだが、いま手にしてみるそれは朱塗りの恐ろしく鼻の高い面である。面に就いての知識を持たぬ私達には、その製作年代も作の価値も分りかねる。

然しこの面を先に立て、田辺の中の鼻までと云う大がかりな渡御をしたと云うには、何か訳がなければならぬ。恐らくそれは古代この地から、再び熊野に移った一行の、古い道筋を辿ったものと思われる。

また雨乞の壺というのもあつた。中村神職が不在のため、この壺をどのようにして雨乞に使用したかを聞くことを得なかつたが、雨乞に壺を使用する例えは、一寸珍しい習俗ではないかと思う。壺は瓶子の一種で高さ二六<sup>寸</sup>・周五五<sup>寸</sup>・底部の周り三六<sup>寸</sup>、薄い暗褐色のうわ葉がかゝり、唐草様の紋様がある。

高野氏の話では恐らく宋代のもので、多分神社付近から出土したものであろうと云う。惜しいことには上部が大きく割れて接着している。この壺が如何なる経路で神社に伝えられることに至ったか不明であるが、これも当村の成立を知る貴重な資料と云えよう。

暑い暑いと云いながらも流石に季節である。神社の杜では法師蟬が鳴いている。私達は数々の古文書と神宝の拝観の後、岩内古墳を見るため神社を辞した。

(昭和三三・九・四稿)

## しっぺがえし

「紀州新聞」昭和三十三年十月二日掲載

郷土研究のような時代おくれの趣味に打ちこんでいる私にも、近頃の世相は余りにもけわしい。勤評の是非については富安太郎氏が三文随筆で述べた如く、既に論じ尽された感がある。私も敢えてそれには触れるまい。それにしても世間も少し神経質すぎる。しっぺがえしがひどすぎはせぬか。教祖がストをやった途端に、PTAを解散したところがあつた。私はPTAについては多くを知らぬ。然しこの制度は敗戦日本が幾つかの拾い物をしたものうちでも、もつとも優れたものの一つではなかつたかと思う。

ストをやるような不埒な先生があればこそ、PTAは一層必要なのではなからうか。いくら力んでみた所で、教師を除いて父兄のみで何の教育ぞやとも云える。教師に圧力をかける手段なら本当をぶちまければ、PTAがなくなつた処で先生は痛くも痒くもなからう。一番の被害者は児童ではないか。

スト騒ぎの最中、そんな教師の居る学校なら、講堂の寄附など御断りと云う声が御坊町の一部で出た。見当違いも甚だしい。講堂建築に骨を折つたのは先生達ではない。そんなことをすれば、建築費調達に精魂を傾けた中川さん達を困らせるだけだ。

最近また来年度卒業の和大学芸学部の学生中、勤評反対に加わつた者は採用しないと決議したところもあつた。これなどもおかし。

温厚貞淑、良妻賢母型で聞こえた奈良女高師の後身、奈良女子大学芸学部の学生でさえ、道德教育反対のピケに参加する時代である。学生がピケに参加する是非は別として、この混沌たる世相を目のあたりに見て、何の動揺も感じぬ程不惑性の学生は甚だもって頼母しくないと云える。要は程度の問題である。ひと昔前、東条内閣が「八紘一字」を叫ぶと、国民はワァーと熱叫した。敗戦当時は猫も杓子も民主主義の号令でワァーッ

と沸いた。今また気に食わぬ奴を誰かが赤だと指さすとワァーッと襲いかかることが流行している。教祖も教祖なら文部省も文部省、そしてまた父兄も父兄だ。一国の良識何処にありや。洵に情けない話だ。いや情けない話ではすまぬ恐るべき傾向である。

人間の思想など簡単に右とか左とか割切れるものではない。誰にだって赤い部分もあれば白いところもある。骨の髄までの赤なんて滅多にあるとは思えぬ。お互いに他人のかけ声だけに踊らず、更年期の女性の如きしつべがえしをやめて、秋風に頭を冷やそう。――完――  
(昭和三三・九・二八夜)

## 南部川村の秋

「紀州新聞」昭和三十三年十月十・十一・十二・十三・

十四・十五・十六日掲載

はじめのおことわり

さきごろ私のもつとも尊敬する某先輩から、文章もう少し簡潔にするようにと、御忠告を戴いた。なる程時々本紙に載せる私の雑文は冗慢である。然しそれでよいのではないかと思っている。私はここで文章論をするつもりはないが、第一本紙は専門紙ではない。また私の発表する拙文は、学術論文でも報告書でもない。読者もまた郷土研究などは縁の遠い人々が大方である。そうした方々に読んで貰うためには、時には脱線もし、多少の冗長がまじっても許されるのではないかと思っている。とに角比較的気楽に読んでいたでいて、そのうちどうかのはずみで郷土文化に関心を持たれる方が一人でも出てくれるなら、私の雑文の目的は達したことになる。そのために私はやっぱりこれまでの行き方がよいように思う。現に私の書くつまらぬものにも、関心を寄せられる商店の主人や、村のおばさん達から、過大な褒めの言葉や苦言を、常に聞かして戴いている。そして褒められた時はとんでもないと恐縮するし、後者の場合は謙虚に反省している。「云う者は知らず、知るものは云わず」、「文章を書くのは恥をかくのに等しい」。こうした戒めも知らぬではない。また皆様にお伝えする程の何物をも持たぬ自分であることも十分心得ているのであるが、前述のような気持ちから、敢えて駄文を奔している次第である。――と妙に云い訳めた事に終始したが、やっぱり私の流儀で歩もう。

×

×

×

九月二十三日夜来の雨が小降りながらまだ降りつづけていた。然し空模様も明るいし、ラジオの予報も「朝

のうちは小雨が残るが次第に回復する」と悪くない。それに南部の皆様もきつと待たれるに違いないと、思い切って道成寺駅七時発田辺行きに乗る。

和佐駅で小山民三氏が久し振りで参加されたが、いつも欵かさず見える亀石豊太郎氏や高野光男氏、井原武氏が欵席された。天候がたたったらしい。七時五十一分南部駅着。案の定、尾崎光之助氏、前山愛之助氏、寺本幸吉氏が迎えて下さる。全く勿体ない。早速竜神バスで南部川村徳蔵の「天王の森」に向かう。

### 天王の森

バスはゆたかに熟れた南部平野を快く走る。日高郡では御坊平野に次いで広いが、南部川方面まで入れて、大体五百町歩の水田面積と云う。天王の森はこの広い田圃中の小字斉藤にある。はじめ天王の森と聞いた時、ひよつとすると秘められた皇室関係の伝説でも絡まっているのかと想像したが、それは牛頭天王社の畧称であった。

牛頭天王は仏説から来たもので、祇園信仰と同じく素戔嗚尊を祭神とし、疫病を免らしめる神であると同時に水神でもある。宝暦十年（一七六〇）の「南部組大指出帳」徳蔵村の条に

一、宮一社 牛頭天王

と見え、「紀伊続風土記」には

○牛頭天王社

境内周三十二間

村中畑中にあり、拝殿あり、西本庄村御霊宮より勧請するといひ伝う

とあるが拝殿は現存しない。たぶん明治末年の合祀の際取り毀たれたのであろう。また棟札や古記録類も失われて、今のところ当社由緒はこの程度以外知り難いが、恐らく「続風土記」の説の如く須賀神社からの勧請で、或は南部川の水災を護るために祀られたのかも知れぬ。

### いん石

ここから超世寺は近い。田圃の中の道を三氏からいろくお話を伺いながら歩く。上南部中学校の大串先生と中学生二名が参加されて、一行は賑やかになった。有名ないん石もここから近いが、雨あがりて道が悪いと聞いて素通りした。この石について「日高郡誌」に

○いん石

大字筋、超世寺の東三町、田中の森の北二町ばかりなる田畔に、里神岩神と呼ぶ石あり、いん石と覺し。

大きさは、長さ巾各三尺位ずつ。共に黒色を呈し、触るれば祟りありと人敢えて近づかず。正月には注連縄を飾り、祝祭日には酒、餅等を供う。里の古伝に或夜轟前たる音響と共に此処に落下せり。同時に有田郡の某処にも落つ。その形之に同じと云えり。又云う此の石時として大音に叫ぶことありと。

とあるが、近年南部高校の野田三郎氏が調査の上、水成岩でいん石とは全く異なる。或はストーンサークルではないかとの見解を発表された。岩神と称し人々が恐れたり、注連縄を飾り祝祭日に供え物をする点から考えて、この説が案外正体を捉えているかも知れぬ。

こんなことを考えているうちに寺に着いた。

## 超世寺

超世寺は今から四百二十余年程前の(二五七一年)元龜二年僧侶空受言が開創した。受言は俗名松井左内。今川義元の旗下、富永伯耆守の家来松井新吾の弟である。

永祿三年(一五六〇)今川義元が織田信長の奇襲に亡んだ時、左内の一族も多く戦死を遂げた。時に左内は三十四歳。人生の無情を感じ、京都粟生の光明寺に入り、仏門に投じ一字を建立して非命にたおれた主君義元や、一族の霊を慰め、かたぐ、仏の道を弘めたいものと発願した。その後縁を求めて紀州に来て南部地方に留まり、当寺を建立した。

ここから近い南部町の真宗の巨利勝専寺が、(二四七六年)文明八年、土地の若太夫を開祖とするのにおくれること約百年。一方が数寄を極めた半生を持つ武士の果てであるのに較べ、後者は名もない土地の神主の子であるのは極めて対照的で興をひく。

それはともかく、侶空受言は高德の誉れ高く、道徳に帰し、遠近風を仰ぐと伝え、超世寺の外田辺磯間に超願寺を、中芳養に泉養寺を、下芳養に善徳寺と生涯に四カ寺を建立している。一説に侶空受言の兄松井新吾は今川義元の勘定方であったため、受言は今川氏の財宝を受け継いでいた。その財力が多くの寺となったとも云うが、それだけでは寺を建て衆望を得ることは難しい。

かくて侶空受言は天正十三年三月二十九日(一五八五)寂したが、最近南部町の堅田三千穂氏は、「南部高等学校新聞」に、次ぎのような伝説を載せられた。

|| 同寺(超世寺)についての猟奇的な伝説が西牟婁郡上芳養村、今の牟婁町に残っている。超世寺の外伝として拾って見よう。「開祖超世寺受言上人が天正十三年三月二十九日に遷化した」と云う日に、上人は上芳養村東山区(古谷谷)の馬頭山流れ越峠で四人の賊の兇刃に襲われて不慮の死を遂げたと云う事

である。即ち伝説に拠れば桶狭間の後の残党が、受言に随って紀州入りしたのが、尚竜神山麓に隠棲して、上人はこれに会いに行く途中、古谷谷から馬頭山流越峠を越えて行くところを、所持金をねらわれたか、他に理由があつたのか、前記の兇刃に倒れたので、今なお流越峠には善徳寺岩と呼ばれる所があるのは遭難の箇所、凶賊等の家も子孫も今尚同村に残っている。これ等は村八分にされて住民との交際が絶たれた為に不幸な事が絶え間なく、又理由を聞き伝えた他所人が、その家の事を附近の野にあつた百姓に尋ねた所、百姓は無言でその家の方向を鋤の柄で指し示したという事で、鋤差しという変わった苗字が残っている。(以下畧) 〓

堅田氏もはつきり伝説とことわつておられる通り、この物語を直ちに史実と受取るとは危険であるが、とに角超世寺縁起の一部として興味が深い。

かくて超世寺その後寺門興隆して、遂に十四カ末寺をもつ本寺となり(「日高郡誌」)、西の九品寺とともに、西山派・鎮西派の相違はあるが、日高地方浄土宗の二大勢力となつた。猶末寺の寺院名は堅田三千穂氏は

来迎寺(東本庄)

極楽寺(西本庄)

光明寺(晚稻)

道林寺(熊岡)

法伝寺(芝)

薬師寺(埴田)

新福寺(山内)

常福寺(塚)

光明寺(東岩代)

光照寺(西岩代)

来迎寺(丹生)

超願寺(磯間)

△万年寺(島ノ瀬)

△慶雲寺(宮の前)

△安養寺(川又)

△田福寺(脇の谷)

△浄土寺(柳川)

の十七カ寺を数えられ、高尾英吉氏は堅田氏の示された△印五カ寺にかわり

仙光寺(山口)

西岸寺(印南原)

東光寺(印南)

観喜寺(光川)

泉養寺(西芳養)

善徳寺(下芳養)

の六カ寺を挙げていられる。

いまの本堂は間口九間・奥行き十間。明治四十三年<sup>(一九一〇年)</sup>二月第十八世真空諦承の再建にかかり、道成寺や御坊市の本願寺日高別院とともに、実に本郡屈指の大伽藍である。寺本幸吉氏のお話に、天井にかくれた本堂の木組には、驚くような巨材が縦横に用いられ、建築に当たった棟梁は、棟木から錐を落としても、縦横の巨木に遮られ、地上には落ちぬと語つた程と云う。

## 須賀神社

超世寺を辞した私達は、折よく来合わせたバスで須賀神社に向かう。須賀神社は南部河畔の深い樹立の中に鎮座する南部郷切つての大社で、戦前は郷社格として曾つては秋季大例祭に郡長が参向し、また神撰幣帛供進

神社でもあった。

社伝によると、神祇大副吉田兼延の三男宗沢(従五位下)が一条天皇の時か、それよりやや遅れて(九八七—一〇一一)、勅命で京都御霊宮(八坂神社)より勧請したといひ御霊宮とよんだ。宗沢は譜代の神官数人を伴つて来て、この地方の公文職となるとともに社務を執り、住む土地を吉田と名づけた。氏下は南部本郷の十五カ村と南部川村八カ村、大川五カ村の二十八カ村であつたが、後南部川・大川は分離した。

昔は神宮寺ニカ寺をもち、神主数十人あり、神宝も多く愛洲・野辺・その他のこの地の支配者が代々保護を加え、徳川時代に入つても屢々国主が参拝し、安藤氏田辺入城後は歴代社参を続けた。また社号は古くから祇園御霊社と称したが、明治元年<sup>(一八六八年)</sup>須賀神社と改めた。以上がこの社の畧史である。

さて史跡顕彰会九月の行事として南部川巡りを発表した時、高尾英吉氏から参加したいが微恙のため行けない。ついでには彼地に行つたなら、これくゝの事に注意するようにと、二、三の御教示を戴いた。その中に当社の社名須賀は、海河の岸の高い所を須賀というと言海にあり、出雲あたりに須賀という大社なきかとの御言葉があつた。

成程そう云われて見ると須賀の地名は各地にあり、その多くは水辺に位置している。試みに吉田東悟博士の「大日本地名辞書」で拾うと全国で二十カ所に近い。これによつて思うに「スガ」は洲処ではなかるうか。或は植物の菅から来たものもあるかも知れぬ。また素盞鳴尊を祭神とする社に須賀・須佐の名の多いことも事実で、現に出雲国大原郡に須賀神社・因幡国岩美郡に菅野神社・安芸国高田郡に清(スガ)神社があり、何れも素盞鳴命を祭神としている。

第二に高尾氏が御注意下さつた、日高郡では衣奈八幡宮と当社のみと云う。両部鳥居は、近年再建の時鹿島鳥居に改められ、その特長は見られない。

私達が社前の勅使館の礎と伝える四カばかりの苔むした石を見てみると、村長の谷本勘蔵氏が車で駆けつけられ、また賑やかさを加えた。長床の前にかなり大きな石の狛犬がある。天保十年九月(一八三九)玉井元秀・岡崎恒七郎・中村喜右衛門・山内藤村太夫・和歌山屋吉兵衛等氏下の有力者の寄進したことが刻まれている。

これは和歌山に注文して作ったもので、南部の浜まで船で持つて来たが、この時土地の豪力者井上金蔵は、狛犬二ツをフゴに入れ一荷にして運んだと、今も土地の語り草になつていたりとか。狛犬二ツで優に百貫は下るまい。それ程金蔵は大力であつたらしい。

長床には大小さまざまな絵馬がかけられている。近年神社へ絵馬を寄進する風が急速にすたれ、各地の神社にも現存するのが少なくなつた。私が歩いた範囲では、当社や丹生の真妻神社が多い方と記憶する。

当社のものでは熊代繁里翁奉納の三十六歌仙が目をひく。御名染の三十六人の歌人の絵に、繁里翁が美しい字で和歌を書いている。長床に掲げているのはそのうちの二十一枚で、後は神社に保存されていると云うが、風雨にさらされてかなり損傷したものもある。また別に神社の由緒を美しい細字で認めた一枚もあった。これも文字の痕が大分薄れている。翁の遺著や筆蹟が故あって大方亡失した今日、日高地方が生んだ国学者、歌人の遺品として貴重な存在である。

神殿は三社並んで、いずれも茅葺春日造り、丹青の彩色はやや色があせているが、後方の杜を背景にした姿は実に明るく美しい。明治末年頃の修理と聞く郡内ではこの社程建築と背景のよく調和した美しい明るい神社は少ない。

参拝を終えて社務所へ落ちつく。神官の楠本悦次氏が、大きな棟札を蔵めた大きな箱を持って来てくれる。棟札は全てで十五枚ある。かねて和田喜久男氏からその写しを取るようにと御注意をいただいているが、これはまた別の機会にゆずる外はない。十五枚を古いのから年代順にザツと拾うと、

○ 明徳四年(一三九三)

○ 延宝六年(一六七八)

○ 明和元年(一七六四)

○ 文安四年(一四四五)

○ 元禄十五年(一七〇二)

○ 文政十一年(一八二六)

○ 永正十年(一五一一)

○ 享保五年(一七二〇)

となる。棟札は社寺の建築や修造の際、文字の通り、その年月や由来等を書きつけ、棟木に打ちつけたもので、当時の土地の支配者や歴史を知る貴重な資料である。こうした性質のものだからこの神社にもある筈だが、現在殆んど残っていない。殊に当社のように室町初頭ごろのものとなると少ない。よく保存されて来たと思う。

### 須賀神社放談

あまり須賀神社の条が長いので、気分を変えるため「須賀神社放談」と小見出しをつけて見た。須賀神社に関する放談という意味でなく、須賀神社に於ける放談と云うことである。南部川村は本庄・西本庄など、古い文化の地であることを思わせる地名があるように、純粋な農村であるが郷土文化に関心を寄せられる方々が多い。

本日御案内の労をとられた前山愛之助・寺本幸吉氏は古くから地道な研究を続けて居られるし、谷本勘蔵町長は「南部川村誌」の刊行を計画され、今日は御見えになられぬが、西川裕氏の如き研究者も居られる。殊に上南部中学校の大串先生や、二人の中学生が参加されたことは心強い。

雨が思い出したように時々降ったりやんだりするのが、却って気分を落ちつかせて話はずむ。何れも郷土

史に関するものながら、研究談と云うほどの堅苦しいものではなく、それが一層面白く聞き捨てにするのは惜しい。思い出すままに二、三を書きつけて見よう。

### ○ 前山愛之助氏曰く

今皆で見た明德や永正の棟札ですがね。もう何十年も前のこと、或時私が宮へ来て見ると、その頃の神主が御供物の餅を一生懸命に切っている。ひよいと見ると、何とこの棟札を俎板がわりに使っている。びっくりして「神主さん、とんでもない。これは大事なものです。大切に保管下さい。」と、早速片つけさせたことがあります。

西洋に豚に真珠という諺がある。こうして貴重な資料が年々消えて行く。心しいものである。

### ○ 寺本幸吉氏曰く

瓜谷石も近ごろうんと少なくなつた。昭和四年六月一日陛下が白浜に御幸の時、本県から献上した瓜谷石は、西本庄の留場松次郎氏の秘蔵の逸品で、その前小竹岩楠氏が来て五百円に買上げたものである。昔から有名な名石であるが、古くは藩主から一般の採掘を禁止していた上、産額も少ないから瓜谷石で財産を作つたと云う家は西本庄に一軒あるあるぐら이다。然し時にはこんなこともある。

二十年程前のことだが、小学生ら二、三人で素晴らしい名石を掘り出した。通りかかった村人が、「どうだ七円で売らんか」と云うたので、子供等はよろこんで売った。これを聞いた仲買人がやって来て二十五円で買いとり、更に田辺の某富豪の家に三百円で売った。これは稀代の名石で某氏はわざ／＼徳富蘇峰の箱書きをつけて秘蔵しているが、住友家から一万二千円でゆずらぬかと交渉があつたと云う噂がある。

### ○ 前山愛之助氏談

上南部周辺の谷々には、清岸寺・実相寺・法華寺・ぶせん寺・生蓮院・御供養家等の小字名があり、古く仏教文化がかなり栄えた地と思われる。また高野山一乗院の古文書には、南部郷が同寺の寺領であつたことが記されていると云い、つい近年までこの辺りから山上参りをすると、必ず一乗院で一泊した。今から六十七、八年前一乗院が焼失してその再建の時、一乗院の法主がこの辺りへ勧進に来た。深い関係があればこそと思う。

### ○ 寺本幸吉氏曰く

晩稲と云うのは明治二十二年（一八八九年）町村制実施の際つけた村名で、それまでは山田村と称した。その時何故晩稲と名づけたか今ではハッキリ分からない。昔からあの辺りは一般に晩稲を栽培することが多い。或は

そんなことが理由かも知れぬ。

はなしは中々尽きぬがまだ外へも回りたい。私達は小雨の中を徳蔵の一宮神社へ向かった。

## 一の宮神社

一の宮神社は宇徳蔵にある。明治末年須賀神社に合祀されたが、戦時中旧に復した。「続風土記」に

○ 一宮権現社周四十間

末社二社拝殿

村中にあり、日吉権現といふ。(一五三九年)西本庄に御霊社を勧請せざる前は当荘の産土神なりといふ。天文八年

上梁札あり今伝はらず。(一五四六年)天文十五年棟札に本願辺川八郎左衛門尉直吉とあり

と見えるように、社格こそ低かったが、一宮の名の示す如く、須賀神社よりも寧ろ当社の方が古い由緒をもっている。須賀神社がどちらかと云うと、当時の此の地の支配者がその権力扶植の拠点としたのに対し、当社は村民の本当の産土神であったのだ。

当社の境内に大きな手水石がある。前山氏はどうも手水石にしてはおかしいと云われたが、成程巨大なものである。型は不規則な球形で、上部に丸く穴を穿ち水をたたえている。測ってみると周囲三米十八ある。或は礎石を利用したのかも知れぬ。

これで今日の予定はすっかり終わった。雨に祟られたのは惜しいが、南部地方の研究者にお会いできたのは、何よりの収穫であった。森彦太郎先生の名著「日高郡誌」も、矢張り南部方面の記述がやや薄いように感じられる。今後こうした熱心研究家の努力にまつ処が多い。一層の御研鑽をお祈りすると共に、いそがしい一日を御割き下さったご厚情に対し、心から御礼を申したい。 — 完 — (昭和三三・九・二七)

## 小山蔵王権現跡を訪ねて

「紀州新聞」昭和三十三年十月三十・三十一日記載

私達が今日訪れようとしている小山権現は、「紀伊続風土記」平川村の条に

○ 蔵王権現境内山周七町末社一社

行者堂 愛染堂 鐘楼堂

村の北在田郡小山というにあり、村より坂道二十町許りなり、祭日二月朔日、遠近の諸村より参詣する

者多し、勸請時代詳ならず。中略。土人相伝う、土生村の百姓賀右衛門という者の祖吉野より勸請し、小社を営み代々支配し、後別当寺を置くという。これは再建の事をいうならん。天正十一年(一五八三年)和佐村の城主玉置直和より境内方八町を定むる状ありしという。

別当 高山寺 金光山 宮の側にあり真言宗古義名草郡紀三井寺末なり。

とあり、延宝六年(一六七六)の「日高鑑」平川村の条には

寺二軒

一軒浄土 光導寺

一軒眞言 高山寺

とも記されている。

この蔵王権現社と高山寺は、日高平野から北を望むと、有田郡境にちようど屏風を立てたように連なる白馬山脈中の高峰九〇・八〇年小山(標高四五八米)の山上にまつられていたもので、山の名をとって小山蔵王権現とも云われた。ところが明治四十一年八〇年県下の神社合祀が行われた際、この社も水分神社(みくまり)として船津神社(紀道明神)へ合祀され、高山寺も退転した。然しこの時これ等の社寺にまつられていた神像や仏像その他の什物がどうなつたかは「日高郡誌」も触れていないし、社寺の成立についても多くの謎がのこされている。

無論こうした研究は一朝一夕に成果を挙げることは難しいが、せめて今は荒廃していると伝えられる社趾や寺の跡をしのんでみたいものと、史跡顕彰会十月の行事としてとりあげたものである。

○

十月十九日、雨の多い今秋にはめずらしい秋晴れであった。一行は井原武・巽三郎・高野光男・清水長一郎の四名に、延長八年(九三〇)夢告により大和国吉野郡から蔵王権現を勸請し、長く当社の別当をつとめたと伝える、川辺町土生瀬戸家の当主瀬戸勇治氏が参加されて、はるかな遠祖のあとをしのばれたのはゆかしい。

バスが下平川停留所に着くと、清水義雄氏が迎えてくれた。また山の地理に詳しい同地の滝本虎吉氏も案内して下さることになった。農繁期の折柄まったく御礼の言葉もない。

蔵王権現の鎮座していた小山は、停留所から約二十町の地にある。私達は山に登るに先だち、合祀の際山上から移されたという、光導寺境内の金銅製手水鉢を見るため、同寺を訪ねた。

光導寺は浄土宗鎮西派に属し、小松原九品寺末であるが、明治二十二年(一八九九年)と昭和二十八年(一九五三年)の水害に仏像什物を悉く皆流失し、辛うじて建造物だけが遺った。従って小山権現の仏像等の一部こゝに遷されていた物も、既に

失われていたものと想像していたが、だんだん話を聞いていくうちに、幸いにしてそれらは寺の後手の一段高い旧住吉神社の社地に小堂を設け無事に安置されているとわかった。

小堂は二棟あってそのうちの棟に高山寺の本尊蔵王権現がまつられている。清水義雄氏が厳かに開扉してくる。一行の目がうすぐらい堂の内部に一斉にそそぐ。真つ先に巽三郎氏が「アッ！」と感嘆の声をあげる。思わず「これは素晴らしい」と、狭い堂内を像の近くまで進む。

蔵王権現像は木像寄木造り、丈け約一米三〇、立像で丹青の緻密な彩色が施されている。合祀の際村の信者鳥居新六が背にして山を下ったというが、数十年の歳月を経、塵と埃にまみれてはいるものゝ、尊厳さは少しも損なわれていない。鎌倉時代の秀作である。

つゞいて次の小堂を拝すると、ここには不動明王をはじめ、数体の神像・行者堂の本尊役行者像・愛染明王・その他高山寺累代の住職の位牌が、処せまく安置されていた。何れも木像で鎌倉時代の様式を具えたものである。

私達は意外に多いこれらの諸像にしばらく声をのんだが、試みに位牌を調べてみると、これらは多く江戸中期以降のものであった。また堂の鴨居にかけられていた二個の天狗の面も極めて優秀な作であった。これだけのものを調査するとなると、こゝだけで優に一日を要する。それで今日はこの予想外の大きな収穫だけに満足して、ひとまず予定通り山に登ることにした。

○

山への道は光導寺のすぐ背後からはじまる。道の両側には萩がこぼれるように咲き乱れている。四、五町登ったところで松山の尾根に出た。誰かゞ「松茸」と叫ぶ、声の方を見ると、成程小松の根もとに点々として落葉をかむった松茸が頭をのぞかせている。

山は一步一步高くなる、清水義雄氏の愛犬アカがいそがしい足どりで先頭を歩む。脚下に平川の部落が見えてきた。三百瀬の稲田がおだやかな秋の陽をいっぱいに浴びている。日高川が和佐山の裾を洗いながらゆたかな水嵩を見せ、三百瀬橋が美しい弧を描いている。

道がだんだん峻しくなった。小山権現の祭日は旧暦二月一日と、六月十八日で、日高地方はもとより有田地方からも参詣者が多く、山上には時ならぬ板店が出て賑わった。案内役の清水義雄氏も幼い頃父母に伴われて参詣したが、早朝村を出るのが例であったから、この辺りは何時も深い霧の中を歩んだという。当時は山上に住職の老夫婦が住んでいたし、常に登山するものも絶えなかつたので、道巾も今よりはずっと広かつたらしい。

しかし宮の合祀後は山稼ぎの人の外はめつたに通る人はない。道の左右にはようやく雑木や笹が生い茂って来た。滝本氏が鉦で道を切り開いてくれる。

尾根をいく回りがすると「彼処が小山の峰」と清水さんが指される方を望むと、くつきり晴れあがった秋の空の中に、標高四五八米の小山が浮かび、白雲がしきりに流れている。私達は笹や雑木のやゝ少ない一角で一息入れて、再び登山をつづけた。

登るにつれて道はいよいよ細く、丈なす笹や雑木がおゝいかぶさっている。或る所は茨を分け、木の枝にすがり一行は頂上へいそぐ。道の左右には馬酔木が多い、花の頃はさぞ見事だろうと想像する。粟が所々で小麦色の肌をのぞかしている。

頂上が近くなった。此処は墓の段とよばれる所だ。身を歿する竹や笹を分けてすゝむと、方十間位が平地になり、石垣の跡があり、藪かげに墓碑が並んでいる。その一基の文字をたどると、

○ 権大僧都法印朝雄和尚

○ 権大僧都賢養

○ 大法印道朝靈位

○ 阿闍梨智住

の名が見え、年代も享保七仁寅九月八日・天明五巳年十月四日・寛政九巳歳等とある。またその傍らに宝曆（一七五一—一七六三）・安永（一七七二—一七八〇）の年号の石地蔵もまつられていた。

何れも高山寺の諸仏に仕え、この山中で生涯を終えた和尚達の墓碑であるが、寺が退転した今日訪う人としてなく、春風秋雨の幾星霜を深い草蔭にひっそりと静まりかえっているのは哀れが深い。

○

ここから神社のまつられていたところまで、自然石の二、三十段の石段がつづく。何時のころよりか幾人とも知れぬ敬虔な信徒達に踏みならされた石段も、今は草に埋もれ、落葉にかくれ足もとが危ない。石段の尽きた処が社前の広場で、三十坪位もあるうか、やはり草木の茂るにまかしている。清水義雄氏に何うと社前は草葺きながら九間に六間の大きなもので、俗に九・六間の堂とよばれたと云う。それにしても九間に六間とは少し大きすぎるような気がする。或は高山寺のことを話されたのを、私が聞き誤ったのかも知れぬ。何れにしても今は深い草木の中に遺る石壇の石垣と礎が当時を語るのみである。

ところが私達はここで意外なものを見出した。それは高さ約三米、直径四米余りに及ぶ丸い塚で、周囲に荒

い石組を施し、一見して経塚と認められるものである。が、残念なことには既に盗掘の形跡が歴然と見られ、埋葬されたと覚しいカ所が掘りかえされ、蓋石らしきものが散乱している。

そもそも経塚と云うものは、平安時代の中期から終りかけ、浄土教の普及による欣求浄土と末法思想に起因し、埋経の功德で極楽浄土を求めたもので、わが国では寛弘四年（一〇〇七）関白藤原道長が法華経を書写し、大和の金剛山に埋経したのをはじめと云われる、

然して経は普通銅製または陶製の経筒に納められるものであるから、もしそれらが発見されたなら、このお宮の成立を知る貴重な資料となったものを、洵に惜しみてもあまりあり、何人の仕業か心なき所業と云う外はない。高野氏と巽氏がそれでも詳細に調査して、漸く数個の土師器片と、緑泥片岩製の塔婆様の石製品を採取した。



私達はこの経塚の周辺で昼食をとり、再び寺跡をさぐり、境内の一隅に設けられた井戸に、往時の山上の生活をしたのだ。「紀伊国名所図会」後編六之巻、雄山蔵王権現社の条に曰う。

伝云近郷土生村に瀬戸賀右衛門というものあり、其遠祖吉野の蔵王権現を信じ、老年まで参籠怠らざりに、延長八年九三〇年神殿に通夜せし夢中に神現れ給ひて、積年の参籠を感じ給ひ、今は汝が里近き山にゆきて、供を受くべしとて、遂に此処に天降り給ひしかば、かく堂舎を草創せしといへり（此事旧記によりて近年天台座主の染筆し給へる一卷ありて其家に傳ふ）登詣の山路は、桜の大樹左右に列植す。祠前はものふりて苔を畳めり。本社より嶺つゞきの懸崖に、愛染堂を建て奥院とす。此地ますます翁鬱として、土俗魔所と唱へ、申ノ刻より詣ずるものなし。抑々此山在田・日高の二郡に跨がりて、四望の景色いふ計なし。在田奥の山々より那賀郡中を北に見さけ、山地・十津川の峰々は北に重なり、西は郡中の村落山々のをちこちに隠れ頭れ、日高川の河脈は縈曲として田園を貫きて海口に走り、日の御崎・松魚島・南部崎は帆影につらなり、阿波・淡路は一すぢの髪をひきはへたるが如く、真妻ガ嶽・切目畝は東南の雲に聳えたり。例年二月朔日・六月十八日は蔵王・愛染の縁日なれば、兩郡の男女群集していと賑し。めつたに叙景に頁を費やさぬ「名所図会」の編者達をして、これ程まで賞讃させた眺望も、今は周辺に叢生する木々に遮られて思うに任せぬ。そのくせ余り大木は遺っていない。清水さんの記憶では、当時は椎の大木と「名所図会」に記されたように桜の老樹が、鬱蒼と境内をおおっていた。然しそれらの大樹も明治三十二年七月二十七日夕の大山火事と合祀後の伐採で亡んだ。ただ所々に桜の大きな株と、椎の枯損木があつて、わず

かに往時をしのばせる。

私達はここから数町を距てた奥の院愛染堂跡へ深い繁みを分けて進んだ。この辺りが小山の最高点で海拔四五八米。地理調査所の三角標識があり、愛染堂跡には方二間ほどの石垣だけが遺っている。

堂跡の南にやゝ平坦な地があり、こゝで祭礼には投餅が行われ、また旱魃の年には雨乞の火を焚いたと云う。滝本氏が伐り払ってくれた松の木に上つて四方を望むと、東北は山また山が際限もなく連なり、南西は日高平野の諸村と、はてしてもない太平洋の潮が、秋の陽ざしに明るくかゞやいている。

「名所図会」の名文の後へ私の下手糞な景観描写を持ち出す勇氣はないが、この雄大な眺望は捨て難い。確か池谷信三郎の小説の中であつたと記憶するが、「沖行く船を涙なしでは眺められぬ」とあつたが、私は山上から遠い山脈を望むと妙に感傷的になる。

あの果てしもなく連なる山々、その下にはそれぞれの村々があり、村にはそれぞれの家がある。そして家々ではそれぞれの男女が、怒り・笑い・歎び・悲しみ・恋をし・働き、つかの間の幸福を求めて生活している。たつた五十年か六十年の生涯、いま見はるかす自然の悠久さに較べて何とその生命の短いことよ。

いま私が立つ小山上に、何時の頃か蔵王権現がまつられた。高山寺が草創された。愛染堂が営まれ、行者堂も設けられた。鐘楼からは朝・夕鐘の音が流れた。そして幾百年か経た現在、山は何事もなかつたようにもとの姿にかえつてしまった。然しそれが人生と云うものであろう。

山のあなたの空遠く 「幸」住むと人のいう ……

私は思わず上田敏の訳詩「山のあなた」の一節を口ずさんだ。

○

ペンが妙な方向へ外れた。こんな安価な感傷は今時高校生でも持っていない。話を元へもどそう。

さて私達は旧神社跡と諸堂跡をくまなく見て回り、その昔別当寺の鐘を鑄たと伝えられる「鐘ひき山」を山上から望み、滝本氏と清水氏の御案内で今度は蛇尾谷へ下った。

因みに高山寺の鐘は合祀後、紀三井寺の裏手の辺りと云うから、海草郡安原村辺りの某寺に売られた。嘗て清水氏は十数年前わざ／＼この寺を訪ね、しばし鐘を眺めて懐旧去るにしのびなかつたと云うが、村の名もいま俄に浮かばぬと云う。例え思い出されても恐らく金属供出のため残つてはいまい。惜しいことである。

私達はそのうち何時か道をとり返した。さんざん苦勞してようやく蛇尾へ辿りついたのはもう四時に近かつた。思えば今日の踏査は苦勞も多かつたが収穫も多かつた。今後ゆつくり整理整頓してみたい。

## あまのじやく

「紀州新聞」昭和三十三年十一月二十七日掲載

これが新聞にでるところは、大角力九州場所もとつくにすんでいるに違いない。実は今度の私の雑文は、少しばかり角力や野球に関係がある。と云うのは妙なことに私は角力や野球のシーズンになると、きまつてむしろくしゃ仕出すのだ。困った性分である。

事務所から一足街へ出ると、どこの四ツ角も一杯に人だかりしている。テレビの前が黒山になっている。これが第一憂うつの種である。おまけに家に帰ると子供までが、スポーツニュースをかけると云って聞かぬ。私はいよいよ不機嫌になる。

成程角力は日本の古い国技である。いかにも淡泊なわが国民性に似合ったスポーツであることには異存はない。殊に敗戦後わが国固有の芸能が、例えば浄瑠璃や人形芝居が、年ごとにさびれつつある折柄、角力だけがこれ程大衆に愛好せられているのは、洵にめでたいことで、文句を云う筋合いはさらにない。

また野球にしても今さらその効能を並べるまでもなく、これ程健全にして新時代にマッチしたスポーツは、外に一寸類を見ない位だ。

世間はいま激しい嵐が吹きまわっている。左右対立の波が、田舎の隅々まで容赦なく荒れ狂っている。しかしスポーツの世界には赤も黒もない。また生活にいたみつけられ、戦争前夜の不安におののいている大衆が、角力や野球にせめてもの憩いを見出し、あまりにも現実的な明け暮れに、枯れしぼんだ青春の夢を、横綱の強さや、投手の神技に託する気持ちばかりすぎる程わかる。

が、それにしても昨今見られる世間の熱狂振りには、いささか常軌を逸していないかと疑う。角力がはじまれば角力、野球シーズンになれば野球、日本中の人間が猫も杓子も目の色を変え、ラジオにしがみつき、テレビに食い入る風景は、どうひいき目に見ても正常とは見えぬ。たしかに平衡を失っている。

現代日本の人口がどれ程かは忘れたが、恐らく七千万あるいは八千万と云う所であろう。それ程数多い国民の中に、せめて一人や二人ぐらいは、角力なんて糞面白くもない。野球など凡そツマラン話さと、うそぶく男があつても不思議はなからう。いやありそうだと云う気がしてならぬ。

こんなことをいつか富安太郎氏に話すと、頭のよい彼はラグビーの話など持ち出して、うまく私を云いくるめてしまった。虫がおさまらぬので山中不艸氏に話ると、「僕は昔から若秩父のファンでね」とにやにやした。山中三郎、富安太郎の両氏にして斯くの如し。ああ我また何をか云わんや。すると私はやつぱり「あまの邪鬼」か。

(昭和三三・一一・二一夜)

## コーヒー讃

「紀州新聞」昭和三十三年十一月二十九日掲載

五時半に仕事が終わるが、めったに真っ直ぐ帰らぬ。途中で書店へ寄り一わたり書棚を見回った末、夕刊を讀んで引揚げることにきめている。店員も心得たもので私が姿を見せると、「清水さん、新聞」と翌日付の「紀州新聞」と「日高新報」を渡してくれる。

近頃はこの外にコーヒーを呑むことを覚えた。最近の流行とかで、狭い御坊市内にも俄に喫茶店やバーが増えた。その中で私は大浜通りの「ふみ屋」をえらんでいる。この店のコーヒーは断然美味しい。何よりも店の明るいのが気に入った。

○

どう云うわけか昨今出来る喫茶店やバーは申し合わせた様に暗い。広い入口を小さくし、涼しい風の入る窓をわざと塗りつぶし、昼間も薄暗い電灯をつけ、相手の顔も判然せぬ店が多い。

客はこんなじめじめした室内で、深刻らしい顔でジャズレコードを聞き、洋酒を飲んでねばっている。その不潔さつたらない。よく保健所あたりがやかましく云わないものと思議なくらいだ。

あんまりコーヒー店通いが続くので、時には喫茶嬢が「あの小父さん、ひよつとすると私に気があるのか知ら、老らくの恋と云うこともあるし、油断できないわ」などと怪しまれはせぬかと一寸気になる。

然しそんな風流はとつくの昔に過ぎた。

大体私と云う男は、郷土史なんて時代遅れの代物を、後世大事に有難っている程で、コーヒーのようなハイ

カラなものには凡そ縁の遠い存在である。そんな私が急にコーヒー党になったのにはこんな訳がある。

○  
またしても引合いに出して恐縮であるが、私は数年来仕事の余暇に「矢田村誌」の編纂をしている。しかし根が怠け者であるため中々はかどらない。何時までもこんな仕事にかかっていては他の勉強がお留守になる。実は内心少なからぬ焦りを覚えている。が、何分にも一定の勤務を持った身には時間が乏しい。たまの日曜や休日にも畑仕事待ちかまえている。勢いペンを執るのは夜以外にない。ところが机の前に座ると、昼間の疲れでつい睡魔のとりことなる。そこでいろいろ考えた末コーヒーを試みたらどうだろうかと気がついた。

○  
むかし私の甘才代のころと思うが、カフェーの全盛時代があった。「酒は涙か溜息か！」などセンチな歌が一世を風靡し、藤田草宇君の記憶によれば、小さな御坊町内にも三十数軒のカフェーが軒を並べた。一夜若気の至りでこの三十数軒を一巡しようと思ひ立ち、片ッ端からコーヒーを飲んで回った。

いまから思うと鼠の小便のような薄いコーヒーであったが、流石に家に帰っても睡れず、とうとう朝まで転々苦しんだ事からの思いつきであった。

結果は上乘である。コーヒーはよく効く。或は神経のせいか、体質のせいかも知れぬ。とに角睡たくない。六時頃の一杯が優に十二時近くまで効果を保つ。おかげで二百五十字詰め原稿紙千八百枚の村誌も近く脱稿しそうである。完成の暁はコーヒーの歌でも書いて、その徳を讃えんかな。  
(昭和三三・一一・八 夜誌)

## 春の重山

「紀州新聞」昭和三十四年四月四・五・六・七日掲載

三月二十一日、今年第一回目の史跡巡りを由良方面で行った。昨年もちょうど春分の日、亀山城趾を訪ねたが、一昨年はこの日、原谷を振り出しに王子巡拝をした。こゝ二、三年来いつか春分の日が本会の年度頭初の例会となった。月日のたつのは早い。今度の重山踏査で私達の史蹟巡礼も十六回を数える。

いま、これまでの探訪地を拾って見ると、

第一回	三尾巡り	昭和三十一年十二月十五日
第二回	王子趾と徳本上人遺跡巡り	三十二年三月二十一日
第三回	小池、入山巡り	五月十八日
第四回	塩屋、野島巡り	六月二日
第五回	衣奈八幡と西教寺	七月七日
第六回	興国寺灯籠焼見学	八月十日
第七回	御坊町内巡り	九月十五日
第八回	印南巡り	十一月二十三日
第九回	亀山城趾探訪	三十三年三月二十一日
第十回	鹿ヶ瀬と峠越え	四月二十七日
第十一回	船津、高津尾巡り	五月二十五日
第十二回	竜神温泉巡り	七月二十六日
第十三回	野口巡り	八月三十一日
第十四回	南部川巡り	九月二十三日
第十五回	小山登山	十月十九日

となる。思えば随分歩き回ったものだ。だが、まだ未知の地が多い。これからもたゆまず巡礼を続けて行きたい。

### 糸谷港

この日午前十時巽三郎・高野光男・山中三郎・小山民三・瀬戸勇治・筆者の六人が由良町糸谷でバスを降りた。前由良町長岩崎茂助氏が迎えて下さる。岩崎氏は郷土研究会の先学として親しい間ながら恐縮に堪えぬ。昔から「暑さ寒さも彼岸まで」の例え通り、全く気候は申し分ない。お負けにそよとの風もなく、由良の海は鏡のようにおだやかで、小波一つ立たぬ。糸谷の家々は村の背後に聳える重山（標高二六九米九）の麓、静かな入江に臨んで連なり、大引に通じる一筋のバス道の傍らに、榕樹が常夏の色を湛えているもの南国の港らしい。

糸谷は大字吹井に属し、古くからその天然の良港の故に避難港として知られた。由良町連専寺誌に

○万延元年庚申七月十一日（一八七〇）伊義利栖船糸谷浦へ差。長五十間・横三十間・唐人三百八十人乗船。

造り方ナンバン鉄にて内外張りつめ帆柱二本。水ニ入丈銅張ツメ火車二つナンバン鉄。其外綱不残ナンバン鉄の鎖也。十三日朝西風ニ迷而出られ候。

○ 文久元年八月二十日（一八六一）伊義利栖船糸谷浦へ来ル。是ハ海ノ深サ湊ノ間数ヲ取り処々ノ図ヲ書写シ申候。異人あたま毛、しゆる之如眼少丸くくぼし墨眼、黄白眼少し青ク顔手足赤白、背腹白き事雪ノ如し云々

○ 文久二壬戌六月二十一日（一八六二）薩摩船糸谷浦へ来る。此船異国船長五十間ニ而人数百五十人乗、二十四日出と見え、明治以前はやくも、外国船との接触のあったことを伝えている。

その後明治三十九年（一九〇六年）二月、西牟婁郡大島村や新宮市浮島と共に、和歌山県下の三大遊郭の一に公許せられて以来一層その名が有名となり、わけても大正から昭和初年にかけて大いに繁栄した。当時こゝには平佐楼のほか、二、三の妓楼が軒を並べ、一般民家もひそかに娼妓を置くものがあり、時には妓を小舟に乗せて、停泊中の船まで稼ぎに出た。「熊野民謡集」（松本芳夫編）に見える。

親子船かへ 金なし船か  
糸谷港を みて通る

の謡なども、その頃の糸谷港の姿をうたったものである。が、いつか世は移り星かわり、いまはそうした纏綿の情緒を求むべくもなく、港一体にどことなく敗類（漢類）の気の漂うのを感じる。私達が古びた家のたゞずまいや、細い港町の路地裏に、海の男達の哀歎の痕を偲んでいるうちに、人家が尽きて真新しい、「海防艦戦死者供養塔」を見出した。塔は港を見降ろす小高い山裾に建てられ、表に

昭和二十年七月二十八日、字糸谷宮ノ鼻海岸ニ於テ海軍第三十号海防艦沈没。楠見中佐以下六十四名戦死。

と簡潔に記し、裏面に

昭和三十三年七月二十八日

一般有志建設

発起人代表 友沢新太郎

世話人代表 渋谷 伴吉

と彫りつけている。

時はわが国の無条件降伏の日も間近い昭和二十年七月二十八日午前九時頃のことであった。折りから由良港内糸谷港宮ノ鼻海岸に碇泊中の、海防艦第三〇号七百五十屯は、B 29の直撃弾をうけ、司令塔で指揮中の艦長

楠見直俊中佐は、「危い！機関室に待機せよ」と叫びつゝたおれた。時を移さず松尾艦長代理が指揮をとり、敢然応戦したが、如何にせん既に半身不随になった艦は午後八時になって炎上、二十九日午前零時頃沈没した。またこのとき附近に碇泊中の姉妹艦百二十号も損傷をうけ、六十四名が艦と運命を共にした。も早十数年の昔語りとなったが、この尊い犠牲者のことは永く忘れてはなるまい。

## 重山

重山の登山路はこの供養塔の傍から始まる。道はかなり広く手入れも行き届いているが、頗る峻しい。道の両側には一米前後の雑木が繁り、その間に桜の苗木が植えてある。処々に奇岩が人を威圧する様に露出している。歩みは一步步高く、視界は一足ごとに開ける。路が峻しいので誰かゞ

「まるで箱庭のようだな！」  
と云ったほか余り口を利かぬ。こうしてひたむきに登ること約三十分、ようやく二六二米九、重山の頂上に達した。

頂上に登るとやや平坦で、(小川仲記編「白崎村誌」に東西七間・南北十七間とあり)茲に方三間ばかりの小堂があり、白雲山海宝寺と号し、千手観音木像一軀を安置している。海宝寺の由緒については、由良町「連専寺誌」に

宝治三年四月十八日(宝治三年は西暦一二四九年にして三月十八日建長と改元す)大風雨にて諸方大あれ云々。この日白雲山海宝寺潰、この寺は西国十二番江州岩間寺の根本とかや、依而此山に岩間と云大石有。これを仏休石と申、山の東表に有(昔本尊居玉ふ如也)、亦戒壇石西表に有、本尊は昔慈覚大師肥後国阿曾山より負帰、此山に九日難風を遁給い此山に残候。尤天台宗旨也(コノ寺札所番付ノ時哲山和尚朝眠シテ番ニモレ江州へトリ切番ニ入トカヤ夫ヨリ此山ヲ朝眠山トイフ)  
当山の詠歌

白雲たなびく岩場分け登り 御法も深き海寺の庭

補陀落や峰にたな引く白雲の 晴れ間晴れ間を照す月影

と見え、さらに

○ 累山観音堂再建、(二八六一)文久元年辛酉四月十八日上棟、祝儀餅蒔致候。此寺は古へ西国四十二番江近岩間寺根元とかや。

今に岩間仏休石という大石あり。本天台宗にして本尊薬師如来大引浦に御安座、此寺潰而より六百十三

年目に再建（コノ寺カサネ山と云ハ不可也実ハアサネ山ト云ナリ）

ともあるが、その草創のことは知り難い。また重山と云うは朝寝山の誤りと云うのは妄想も甚だしく、一種の地名伝説に過ぎぬ。

○

観音堂は堅く鍵を施し、本尊を拝すべくもない。私達は致し方なく狭い境内を訪ねているうち、一隅に数基の宝篋印塔や五輪の塔を見出した。ところが惜しい事には何れも、相輪がなかったり、塔身を欠いたり、或は蓋を失ったりして、やや完全に近いのはようやく二基を数えるのみであった。が、そのうち一基の塔身の三方に、この地方にしては珍しく、六観音の像を陽刻し、一面には梵字を陰刻しているのが見られた。

また別の一基の塔身にも、胎藏界四仏を陽刻し、一方に種子を陰刻したのがあった。数基ともに記年を欠くので造立年代を明らかにせぬが、石造美術に詳しい巽氏や高野氏は、室町初期の様式を持つと断じられた。一体の種の宝篋印塔に、仏像を刻したのは少なく、和歌山県下の報告例は甚だ稀である。本年三月三十一日付け日高新報に寄せられた、芝口常楠先生の「仏像を彫刻した宝篋印塔」によれば、昭和<sup>九四</sup>十五年<sup>〇年</sup>同氏が由良町江の駒専福寺に於て、宝篋印塔の台座に仏像を刻したのを発見されたとあれば、この地方としてはそれに次ぐ発見と云うべきであろう。然もかように発見例の乏しいものが、同じ由良町で相次いで発見されているのは、洵に興味深い。また専福寺の宝篋印塔には、応永三年二月二十七日（一三九五）の記年を見ると云えば、重山の石塔を室町初期と断じた事も、余り誤りなしと見て差支えあるまい。

以上の宝篋印塔や五輪の塔は、観音堂から十数歩の西南の一隅に、粗雑な石垣をもってかこまれた一廓の中にあるが、それに隣接した別の一廓中には、板碑式五輪塔が二基並んでいる。この五輪板碑も本県では珍しい存在で、然も碑の刻法は深く、風化を受けた現代でも、空・風・火・水・地の梵字が鮮明に顕れ、二基ともに完形を保っている。然しこの二基も記年を欠くが、様式上桃山期、或は江戸初期の造立と推定される。何れにしても貴重な文化財である。この機会に町としてもその管理に十分の配慮をお願いしたい。

私達が思いがけぬ収穫に元気づいて拓本をとったり、カメラに収めたりしたが、一先ず見晴らしのよい地で昼食をとることにした。そこへ一汽車おくれた石橋健作氏が加わって、一層賑やかになった。

相変わらずおだやかな春日和で、眼下の由良港は湖の様に静かである。海を隔てた日高町柏の人家や、山裾にひらけた僅かばかりの麦畑や菜種畠が、平凡な言葉だが全く絵のように美しい。また海岸を縫うて走る一筋の新道が、柏の手前で尽き、その少し先に話題の温泉地がある。やや眼をあげると大きな西山山塊が蟠踞して

日高平野をかくし、その低鞍部から永く突きだした尾の崎の鼻が遥かに望まれる。

さらに眼を転ずれば西山の終わる処に、日の岬の山があり、その先は茫洋たる春光の中に紀州灘の波が白く光る。実に壮快な眺めで、日頃のおくせくした生活が恥かしい。周囲十三町余と云う蟻島も、この山頂から見降ろすと、ひどく小さい。また幅七町乃至十三町、奥行き一里余、県下第一の良港たる由良港も、恰も箱庭のように感じる。昨年であったか、日高平野が某石油工場の一候補地に挙げられた際、この由良湾が積出港として話題に上がったが、五万トン級の船なら湾口柏沖、三万トン級なら湾の中央部まで航行し得ると云う。

○

食事がすんでまた一頻り写真をとり直したり拓本をとったりする。山中不艸氏が塔に彫られた仏像の姿を、実に美しいと見とれてゐる。全く如何なる工人の手になつたものか知るべくもないが、何の銜ていも気取もなく、幾十、百年の風雪をたえぬかれて、今は文字通り野の仏と呼ぶにふさわしい。

私はさき程からこうした愛すべき野の仏を、我が家の庭に安置したら、どんなに親しみ深からうかと考えたが、うっかりそんな話を持ち出そうものなら、信仰心の篤い老母や山妻から忽ち猛烈な抗議を受けるに違いない。これをうまく説得するのは恐らく憲法改正よりも難しかろうと諦めた。

ぼんやりするうちに時間が過ぎた。も早塔を実測製図する余裕がなくなつたので、各石造遺物の法量は省畧するより外はない。

岩崎氏の先導で今度は山を神谷部落の方へ下る。帰路もやはり仲々の急坂である。然しアツという間に神谷に着いた。何だか膝の関節の調子がおかしい。浜伝いに岩崎氏のお宅へ案内される。此処にも榕樹の大きいのが、あちこちに逞しい枝を拈げている。

岩崎氏宅で少憩。お茶とお菓子を戴く、疲れた体にお菓子もお茶も実に美味しい。みんな何杯もお茶のお代りをする。そのうち奥さんがお鮎を出して下さる。カマスに似たサヨリとよぶ小魚の煮付けがあつさりと美味しかった。食後岩崎氏が撮影した由良の幻灯写真を拝見し、二時半、これも岩崎氏が差し回された発動機船で帰路に就く。

発動機船がポン／＼とエンジンの音も軽く神谷の突堤を離れた。岸壁で手を振っていられる岩崎氏の姿が、見る見る小さくなって行く。

由良のとをわたるふな人梶をたえ

ゆくえも知らぬ恋のみちかな

この歌は勿論紀伊の由良を詠んだものではないが、そんなことは百も分かっているながら、余りにもぞかな由良の渡りの故に、思わずも若き日に親しんだ古歌を、そっと口ずさんでみた。(終り)

## 川中の史蹟を探る

「紀州新聞」昭和三十四年五月十五・十六日掲載

### 佐井と坂野川

四月二十九日、中津村川中方面の史蹟を訪ねた。井原武氏・高野光男氏・山中三郎氏・清水長一郎の四人の外に、新たに津村慎吾・田淵友蔵の両氏が参加された。

八時三十分高津尾停留所でバスを降りると、岡田村長はじめ井原教育長、高尾郵便局長、その他の方々が車を留意して待ち受けて下さった。思えば昨年五月下旬この地を訪れた時も、一方ならぬ御配慮を頂いた。御厚意まことに身にしみて有難い。

### ○

一行の車は日高川の流れに沿うて、新緑滴る山峡を走る。あやめ橋・尾曾発電所・鳴滝の奔流が映画の一コマのように、つぎつぎ現れては消えたかと思うち、佐井に着いた。ここは後山(四七四米八)の東麓、小やかな日高川河段丘上に展げた村落で、日高川を挟んで東西に分れる。いまから二百八十年ばかり前の「日高鑑」には、「寺一軒、浄土極楽寺・但九品寺末」とあるほか、戸数併せて四十八軒と見えるが、この戸数は恐らく今も余り変わるまい。それほど村は静かである。

私達はこゝで正徳二年十一月(一七一二)厭誉欣秀の開基という極楽寺に詣で、村内の薬師堂や村後の小堂を拝し、更に川を渡り柏木秀一氏に伝わる系図を拝見した。系図書は頗る詳細な長巻であるが、要約すると

その祖は近江源氏の流れをくみ、代々近江国に住したが、建武二年十月(一三三五)秀家のとき、近江を出て紀州伊都郡柏木村に移り、慶長元年七月(一五九六)柏木助兵衛秀人に至り、本郡塩屋村に転じ、さらに明暦三年(一六五七)柏木三左衛門、佐井村に居住した。これを佐井柏木氏の始祖となす。

柏木邸を辞して坂野川山向寺へ寄る。この寺も浄土宗鎮西派で小松原九品寺末に属するが、今は無住で極楽

寺の住職が兼務する。私どもが立寄ったので、村人が本堂の雨戸を開けてくれた。この時集まった村人の一人が軒下の半鐘を、郡内でも古鐘の一つであると話したので銘文を見ると

為菩提奉寄進

施主 老星村

六兵衛

維持延享丁卯

五月十五日

と読まれた。延享丁卯は一七四七年に当たる。さして古作という程のものではない。

次いで境内の小堂を拝したり、墓地を見ている中、宝篋印塔と板碑各一基を発見した。何れも室町期のものとして誤りはあるまい。して見れば「日高郡誌」に云う

○山向寺 || 川中村坂ノ川。由緒不詳。台眷円華(正徳四年八月七日寂)を仮の初代とし云々を二百年ぐらい上らせてもよからう。

## 原見奉納館

山向寺を一わたり拝した私達は、寺の直ぐ近くに架かる坂ノ川橋を渡り、原見伝之助氏の奉納館を訪ねた。

原見氏は桓武平氏、原孫四郎胤高より出で、下総国千葉郡原荘に住したが、数代の後胤弘享徳年間(一四五二〜一四五四)京都に遁れたまま興国寺林仙和尚に謁したのが機縁となり、由良横浜に移った。胤弘の子徳胤は新十郎と称したが、永正十一年(一五一四)二十六才で大又に入った。

爾来四百五十年、家運時に消長を免れなかったが、今は山林事業家として余りにも有名である。

一行が車を降りて数十歩、細い谷川の流れに沿うて歩むと、やがて高い石垣の上に長屋門が顕れ、この門をくぐると見るから旧家らしい一構えが目に入る。

そもそも奉納館というのは、昭和二十九年(一九五四年)原見氏の氏神、原見神社(祭神天照大神、或は牛頭天王とも云う)を造営した際、伝之助氏が数十年来蒐集した各種の資料を、まとめて此処に保管し、この神社に奉納したもので、本家の西裏手にあたる一際小高い地にある。

原見氏は八十才とは思えぬ元気な足どりで一行を案内してくれる。導かれるまゝに奉納館の階上に通ると、

こゝは二部屋に分かれ、両室とも夥しい資料、例えば古銭・古紙幣・切手・地図をはじめ貝類、日露戦争従軍記念品が処狭しと整頓されている。また壁間に弓・槍・その他の武具、床には乃木希典大将の書簡と日本刀二振が飾られているのも、自ずとその家系と氏の半生を物語っている。

そのうち大きな机上に家系図の写しや古文書がくり展げられたが、このうち「宗旨人別改め」が二、三枚まじっていたのが興味を惹いた。私達は「自由に引き出して見るように」と云われるのをよいことに、いろんな物を取り出したり、お茶とお菓子を頂きながら、土地の話の聞いたり、窓外の風景を賞でたり、暫らく時の移るのを忘れた。

奉納館の向いは溶かしたての絵具の色を思わせる若葉の山で、その中程に石楠花しやくなげの花が今を盛りと咲き誇っている。「私の子供の頃から大きさは殆んど変わっていない。樹令は二百年、いや、もつと古いかも知れぬ」とのことであつた。此処で聞いた里伝のうち忘れ難い二、三を次に書きつけてみる。

原見氏の向いの谷を通称「はらの谷」とよぶ、いま坂野川にある山向寺はもこの地にあつたと云い、「阿弥陀の森」・「堂ガ谷」の地名が遺っているし、「くしの谷」という谷もあるが、山向寺の向の谷にも同じように「くしの谷」がある。また、この谷から五輪の塔を掘り出したことがあり、これは原見氏邸に今もまつられている。古くは人家があつたと伝えるが、硯を出土したことがあり、その石質は美山村川原河辺から出る砥石として用いられるものと同質であつた。

三十木弥之助がこの谷に池をつくつたとの里伝もあるが、数年前林道工事をしたとき、地塘の遺構が頭れ、その中芯らしいところから鶴嘴の破片が掘り出された。



大又部落に何時頃はじまつたのか明らかでないが、「うまのと講」と云うのがあり、毎年九月九日に部落の者が土地の小社の前でお勤めをしたが、このとき各自が里芋を炊いて持ち寄るのが例であつた。「うまのと」と云うのは、「午の頭」の事で「牛頭天王」の牛を午と誤つたのかも知れぬ。尤もこの講は二、三年来中絶の形になっている。

私達は更に奉納館の階下に案内された。此処は二室一杯に整理棚が設けられ、これに山林経営者らしく木材の見本や、砥石類書冊が蔵されているが、何よりも驚いたのは夥しく保存されている新聞紙の綴りであつた。新聞紙は大阪毎日新聞(一九二三年)・大正十二年以降(一九二三年)・産業経済新聞、地方紙は和歌山新聞(昭和十二年)・紀南新聞(昭和十二年)・代(昭和八年)以降)に続く紀州・日高の両新聞、しかもそれが一目で分るように年月を墨書きし、大体二、三ヶ

月間を一綴じとしてゐる。お負けに重要記事には索引まで作っているという。全く驚嘆すべき努力である。殊に地方紙を斯様に古くから一日も漏らさず保存したところは外にあるまい。洵に貴重な郷土資料と云うべきである。

## 本川谷

本川谷は三佐と老星の間にあり、かなり大きい。「紀伊続風土記」三佐村の条に「……村の南三町谷にあるを小名本川という」とあるそれである。林道が開けているが、車の通行は危険と聞き、一行は谷の口に車をとどめて清らかな清流沿いに歩む。

慶安三年十一月（一六五〇）当時紀伊藩の執政として六千石を食み、南龍公の寵を集めた兵庫頭牧野長虎が、俄に罪を得て李村に幽閉され、これに連坐して長男新蔵・次男伝蔵が配流された地と云うだけあって、僅かに一方にひらけた谷の入口は、狭いが奥地にはかなりの田地がある。洵に人を監禁するには屈強の地と云える。谷に入つて二、三町小さな土橋を渡ると、二畝ばかりの麦田がある。「この田を今も別当屋敷とよび、新蔵・伝蔵を監視のため藩から派遣された次郎別当の屋敷跡と云う。またこの近くに「出待ち」の地名もあり、これは藩庁の役人の巡視を、此処で待ち受けたとも云う。」井原教育長は一つ一つ里伝を説明してくれる。橋を渡つて再び溪流沿いの山路を上ると、釣竿を持った少年に出会った。籠の中には十数匹のハヤと、山魚が一尾あつた。

「沢山釣れたね……」  
声をかけると、少年はニッコリ笑つて山路を消えて行つた。

秋は肥えたるハヤの子を

小笹に貫きて提げかえるも

匂える眉は……

季節は勿論秋とはほど遠い晩春であるが、この伶俐そうな少年を見て、私はふつとろ覚えの横瀬夜雨の詩の一節を思い出した。

谷は中程から東谷と西谷に岐れ、私達は東谷へ曲がる。片側は山で片方には狭いながらも麦畑が続く。山の

緑がいよいよ濃い。処々に真赤な「ツツジ」の花が燃え、藤蔓が薄紫の花を付けている。塵埃と騒音が全く消え、頭がジーンとなる程静かである。

「伝蔵の屋敷がこゝにあつたという。その上が新蔵の屋敷跡……」

井原義男氏の説明が続く。屋敷跡は今柿畑となつて、当時を偲ぶものは何も遺っていない。

「明治三十年頃までこの谷に数戸の家があつた。また新蔵の後裔と名乗る家が今も三佐にあり、刀劍等も伝来している……」

兵庫の後裔の一族と伝える、船津中学校の湯峰先生が、この頃から参加されて補説してくれる。私達は三百五十年の昔、父の罪の犠牲となり、この山里にあたら生涯を埋めた牧野兄弟の身を回想し、暫く暗然たる思いに耽つた。思い出したように老鶯が山峡のしづまを破つて啼く。

## 安楽寺

正午過ぎ安楽寺へ着いた。村を一望する小高い山裾にあつて、今まで経て来た佐井の極楽寺も、坂野川の山向寺も、その本堂は普通民家と同じ構えで、平坦部の寺院建築を見慣れた目に、一寸異様に映つたが、安楽寺は寄棟造りながら堂々としている。

この寺も浄土宗鎮西派九品寺末であるが、その由緒は明らかでない。寺伝によると宝暦二年（一七五二）火災にあい、同年四月八日本堂再建、当時藁葺であつたのを、明治十一年瓦葺に改めた。現代の本堂がそれである。また庫裡は宝暦四年の建築にかゝる。

私達はこの寺の広い庫裡で少し休憩し、岡田村長が用意されたビールに咽喉をうるおし弁当を食べる。庫裡と本堂の間の泉水で真鯉・緋鯉が悠々と泳ぎ回るのが美しい。さきに記した牧野兵庫長虎の一族が寄進した双盤は大小二個伝わり、その一個の椽に次の文字が陰刻されている。

松寿院清巖固白居士逆修

施主 牧野直能

紀州日高郡御座村 安楽寺

愍誉代 正徳三癸巳五月十八日

これで見ると、施主牧野直能と松寿院清巖固白居士は同一人で、直能が生存中の正徳三年五月に自己の菩提

を修し、この双盤を寄進したものとされる。しからば松寿院清巖固白居士牧野直能とは何物であろうか。これを知るべき資料は、宝暦二年初頭の火災で失われたか、寺には何も見当たらず。

だが此処で私の想像が許されるならば、直能はまさしく、本川谷に幽閉された兵庫頭の長男新蔵その人ではないかと思われる。何故なら、次男の伝蔵は里伝によると監視中の某夜、ひそかに役人の目をくらまして此処を逃走したと云われるし、慶安三年十一月（一六五〇）新蔵兄弟が本川谷に流された際、二人は何才であったか明らかでないが、長虎には新蔵・伝蔵のほかに、まだ王丸・藤丸・千代丸（この三人は美山村李に流配さる）があり、藤丸はこのとき三才ぐらいであったらしいと云われる。これから推測すると、長男伝蔵が本川谷に来たのは、十才前後を多く出なかつたであろう。さればこの双盤を寄進した正徳三年（一七一三）には、恐らく伝蔵は七十才前後であつた筈である。

そこで伝蔵はもはや自己の余命の長からぬを思い、不幸なりし生涯を回想し、生存中に自分の死後の冥福を祈つたのであるまいか。

またもう一つの双盤には

清誉浄念信士施主竹野甚兵衛

宝暦六丙子三月竹誉代

江戸 西村和泉守作

の銘があつた。浄念信士と施主竹野甚兵衛は如何なる人物かについても知るべき資料を欠くが、土地で聞いた話に、勘兵衛屋敷と云うのがあるとのことであれば、これも兵庫に関係したものでないかと思われる。

高野氏は此処で双盤の拓本をとったり、井原教育長が最近この寺の墓地で発見した宝篋印塔を調べたり忙しく活動が続ける。ついで再び車に乗つて小釜本部落の遍照寺を訪う。

## 遍照寺

小釜本も日高川に拓けた静かな村で、寺は山際の小高い山裾にある。この寺もいまは浄土宗鎮西派九品寺の末寺であるが、遍照寺の寺号からして、恐らくもとは真言系の寺院であつたものと思われる。

住職がないので管理者の安楽寺の南祇隆夫師が同行して本堂を開扉してくれる。普段しめきつているのに掃除が行届いて清潔だ。本尊を拝観して一同アツト驚嘆した。

薄ら暗い内陣の奥に寂然と安置された阿弥陀像は、丈一米二〇、或は室町時代を多くをでないであろうものであるが、御顔ばせは優しく柔かで、見る角度によつては、その御唇の辺りに微笑さえたゝえられているように感じられる。当地方としては実に稀に見る秀作と云うべきであろう。写真を見ていたゞきたい。

有名な長子八幡宮は此処から西北数町の地にあり、もとは真言宗般若寺なる神宮寺があつた。従つてこの御本尊も般若寺からの伝来かも知れぬ。と角する中に田尻の名門龍田氏が、家伝の系図一巻を届けてくれる。一行はそれを拜見の後、更に長駆して下田原、上田原の古田家を訪ね、午後四時半姉子からバスで帰る。本稿をおくに当たり、今回の史跡探訪にさいし、岡田村長はじめ、中津村各位から一方ならぬ御厚情を賜つたことを、心から御礼を申上げる。また、牧野兵庫畧伝については稿を改めて続けてみよう。(昭和三四・五・八稿了)

## 雑説牧野兵庫伝

「紀州新聞」昭和三十四年五月二十・二十一・

二十二・二十三・二十四日掲載

はじめに

私はこの間うち「川中の史跡を探る」の雑文の中で、牧野兵庫の遺跡のことについて触れた。然し数多い本の紙の読者の中には、牧野兵庫とはどんな人物か不案内な向きも居られるに違いない。もしそうだとすると、あの下手糞な文章は一層読みずらかつたと恐縮する。そこで順序が前後したようなきらいもあるが、兵庫の畧伝をざっと紹介してみよう。

### ①

牧野兵庫頭長虎は紀伊徳川頼宣公の寵臣で、禄高六千石を食み、藩の執政として権勢を誇つたが、慶安三年十一月(一六五〇)俄に罪を得て捕らえられ、その三男太郎・四男藤丸・五男千代丸と共に日高郡李村(いま美山村李)に流され、長男新蔵・次男伝蔵は本川谷(いま中津村三佐)に幽閉され、その党得井太郎右衛門・同三十郎・同十郎兵衛は切腹、村上彦右衛門・同弟亦八は永の暇となつた。次いで兵庫頭のみ新宮に送られ、承応元年五月(一六五二)田辺に移され、同年十月十日病死、遺骸は同月晦日田辺の法輪寺に葬られた。然し「田辺市誌」の著者雑賀貞次郎氏は、兵庫のおくり名、月霜院殿円空寂心居士の月霜院の文字から見て、病死とは云うもの、実は死を賜つたのではないかと疑つて居られる。

それはとも角として、昨日まで藩の執政として六千石を食んだ大身が、急に罪を蒙り、然も己れのみか一家一族まで流配される等、その処分の峻烈さから考えても、これには余程重大な事件があったと見ねばならぬ。ところが不思議なことにはその失脚の理由となると、或は由井正雪事件に関係があるとも云い、或は藩の老臣加納直恒との争論のためとも云い、諸説粉々として一向はつきりせず、今に至るも深い謎に包まれている。まず順序としてその生い立ちから述べよう。

## ②

牧野兵庫頭長虎の出生について「牧野伝記」の記事によると、

初め金弥と称し、父は越前の人で主殿と云い秀康公に仕え、禄三千石を食んだ。長虎十一歳の時その友人と論争の上、これを斬って熊野の社家に隠れた。たまく、頼宣公が熊野に参詣の際、長虎は多くの人々とその行列を拝観したが、その非凡な風貌が公の目にとまり、召出されて近侍となった。その後頼宣に従うて江戸に出たが、公が病に冒された時、長虎は四十日にわたり寝食を忘れて看病し、その誠実振りが評判となった。或年紀の川が洪水の際、長虎は進んでこの対策を買って出で、時を移さず民家を潰し木を伐り、その氾濫を防いだ。公は大いにその処置のよろしきを賞し、翌年大番頭に拔躍し、爾来累進して遂に執政となり食禄六千石を賜った。

また一書に

牧野兵庫頭長虎は猿楽役者の子と云い、或は公家出との説もあるが、事實は越前の生まれで、同国藤島の真宗長命寺の児姓であった。十五の時仔細あつて熊野新宮の社家に寓居したが、或時頼宣が鷹狩りの節社家へ立寄り、金弥の容色の非凡なるを見て召出し、始めは禿童に召使われたか、後小姓となり、また紀の川洪水を治めてその手腕を認められ、十八歳の時大番頭に進み、程なく家老となり兵庫頭として六千石を給わる。――。

とあり、「牧野伝記」の記事と畧々一致する。

即ちこの両書に記された兵庫頭の人為は、少年時代から剛毅果断ごうきかだんな野心家であり、然も非凡な才幹を持つ努力家であつたらしい。それでなければ、兵庫が頼宣に仕えた寛永頃から慶安年代（一六二四―一六五〇）は、紀伊徳川家の建設期であつたと云え、喧し屋の国家老安藤直次等が目を光らせていた時代である。小姓から忽ちにして六千石の重臣に取立てられよう筈はない。

また彼の出世の動機が頼宣公の行列拝観の砌、郡衆中から「容色勝れたるを御覧あり被召出……」とある

程で、生来眉目秀麗の美丈夫であつたらしく、「南紀徳川史」第五冊に長沢伴雄の言として、

長沢伴雄云。兵庫頭面相いかにも柔和にして心根飽迄剛強也、強力にして唐銅の大火鉢を片手にて持扱いたるとぞ……云々

と見え、武芸に秀で、軍学にも心を寄せていたと云うことである。一口に云えば頗る有能の士であつた。

### ③

さて斯様に僅々二十余年の間に、社家の食客から執政六千石と云う異例の出世を遂げ、主君頼宣公の覚えも目出度かつた長虎は、慶安三年（一六五〇）に至り、扨かに一族郎党を従え、脱藩して何処とも知れず匿れた。身分が身分だけに藩の上下に与えた衝撃は一通りではなかつたと思われる。

彼の脱藩の理由について、「牧野伝記」はじめ、諸書の説く所は、

藩の老臣加納五郎左衛門直恒が藩士海堀佐左衛門を推挙したのを、長虎が佐左衛門の武功の申立てに不審があると論難し、その排撃を頼宣公に進言して容れられなかつた為

と云い、また一説には

慶安四年七月、江戸と駿河国久能で捕らえられた、由井正雪と丸橋忠弥の事件に、主君徳川頼宣公が関係していたのが発覚した為、牧野兵庫頭が身代わりとして、その罪を一身に負うたもの

とも云う。然し考えてみると、さきの加納直恒との争論の結果と云うのは、如何にも根拠が弱い。と云うのは長虎程の苦勞人であり、才人であり、且つ重臣が、一藩士の推挙問題ぐらいで、六千石の大禄と執政をそう簡単に投げ出せるであらうかとの疑問である。

また頼宣と正雪の関係であるが、これも諸談の「慶安太平記」などには、由井正雪は頼宣の虎の印を盗み、徳川幕府転覆の大陰謀の軍資募集に利用したばかりでなく、頼宣とは秘かに気脈を通じていた如くになっているが、果たして事実は如何であらうか。これについて少し古臭いが徳富蘇峰の「近世日本国民史」の記事を引用すると、

……紀州頼宣は家康晩年の愛子にして御三家の一なる頭要をしめ、頻りに天下の浪人を懐柔し諸大名の臣家中にも名ある者共にはそれぞれ渡りをつけていたと云えば、幕府が彼を疑うたのも必ずしもその理由なしではなかつた。頼宣果たして野心がなかつたかは誰も知る者はない。……中略……そはとも角も頼宣は当時に於ける第一の注意人物であつた。

また同書には

予て野望を蓄えたる正雪は、家光去りて家綱の代となり、所謂主幼臣疑人心動揺の時期を見弥よその決行に着手した。然して彼は天武天皇の弘文天皇に於ける如く、永樂帝の建文帝に於ける如く、紀州頼宣の名を籍りて大事を遂げんとした。斯る場合に叔父が弱姪の位を奪うのは、古今有り勝の事だ。然して頼宣は実に家綱にとりては大叔父だ。正雪が彼の名を利用したのは決して理由なしではない。

ともあり、他にも頼宣と正雪に関するさまざまの巷説が伝わっているが、今は省畧する。

要するに頼宣と正雪の關係は、あつたようでもあり無かつたようでもあり判然としない。例えありとするもその様な証拠は残されていよう筈はない。判然せぬのが当然であろう。斯様に頼宣と正雪の關係さえ明確を缺くのに、兵庫頭が主君の罪を負うたとは抛かに信じ難い。まして兵庫が逮捕されたのは、正雪の陰謀發覚よりも八カ月も早い。当然他の理由でなければならぬ。

#### ④

「牧野伝記」その他の伝える所によると、原因はともあれ斯様にして一族郎党と共に若山を去つた長虎は、その婦の里方である京都の堀川氏邸に匿れ、老中松平信綱に密書を送り、「紀州頼宣公が陰謀の企あり」と訴えた。事実とすれば全く一大事である。無論幕府からは紀州藩へ問責があり、紀州藩は時を移さず兵庫逮捕に全力を挙げた。

かくて弓術家として知られた吉見善左衛門径孝は、藩命を受け京都を探索し、その妻女は針売に身をやつして兵庫の所在をつきとめるといふ、芝居もどき的一幕もあつて、長虎の帰藩をもとめた。兵庫一族の籠が雄の山峠を越えて、山口御殿へ入つた時、高田喜八郎が椽側に飛び上がり、「兵庫！御用なり」といふ、兵庫は籠の中ではつゝと平伏すると、すかさず流刑の旨を高らかに読みあげた。

「御情けなき御事に候」

咄嗟に兵庫は自刃せんと脇差を抜こうとした時、関口柔心門下の竹本茂兵衛が得意の柔術でサツと投げた。瞬間、田宮流居合の名手で知られた兵庫は、倒れながらも脇差を抜いて横に一閃、茂兵衛の鉄の脛当三本を切り折つて捕らえられた。時に慶安三年十一月、正雪の陰謀露見に先立つこと八カ月である。

執政六千石牧野兵庫頭長虎ともあろう人物が、一藩士の推挙問題に絡んで脱藩すると云うのもおかしいし、その上例え脱藩したとは云え、知遇を受けた旧主を密告するが如きは甚だ納得し難い。これには確かに公表出来ぬ何かが秘められている様な気がしてならぬ。

また頼宣と由井正雪の關係にしても、正雪が紀州に來た事は前後二回に及ぶというものの、それを以て直ち

に陰謀に結びつけるのは、物語としては面白かるうが、事實はどんなものであろうか。大坂夏の陣以来約三十年、徳川幕府の基礎が日に月に確立し、最早一浪人正雪の陰謀位で如何にもならぬ事を、英主と云われた頼宣が承知せぬ筈はなく、知って気脈を通じる訳はない。然しこれは現代人の常識的な判断にすぎぬ。人心の機敏と当時の世相、部将の心情は知るべくもない。やはり永遠の謎であろう。

⑤

とまれ斯くして牧野一族は逮捕され、それぞれ処分を受けたことは、この文章の首めに書いた通りであるが、兵庫の長男新蔵、二男伝蔵の流刑地「本川村」が、従来何処と知れなかつたのを、中津村三佐本川谷と考定したのは、同村教育長井原義雄氏であつて、私も同地に相違あるまいと思う。

と云うのは同地にはいまも、伝蔵兄弟の屋敷跡と称する地や、兵庫一族に関する多くの伝説が遺っている上、その末裔と伝える家もあり、三佐安楽寺には正徳三年五月八日（一七一三）牧野直能が寄進した双盤が現存し、「紀伊続風土記」三佐村の条にも「村の南三町谷にあるを小名本川という」とあることも、傍証とするに足りよう。

また一説に彼等を幽閉したのは藤野川（いま川辺町）であるとも云う。成程、藤野川には藩の圀圍のあつたことは事實であり、一書には「……右牧野兵庫頭長虎堀川殿帰るとひとしく洞の川という所へ押込められ……云々」とあることはあるが、先年友人藤田草宇氏が同地を調査したが、同地には左様な伝承もなく、また同地に近い三百瀬の長楽寺の過去帳にも、他の流刑者の法名はあつたが、彼等のものらしいそれは見当たらなかつたと云う。なお、その他の三男太郎・四男藤丸・五男千代丸は、李村（いま美山村）に幽閉された事はさき書いたが、美山村愛川遍照寺には千代丸寄進の念仏鉦が伝えられ、それには、

愛川村遍照寺奉樹施主

牧野千代丸建方

李住辰右衛門孟包

享保十乙巳歲七月十七日

京六条住丹下播磨大たい貞的作

の銘が見られ、李の小字小串には高さ八十cmの花崗岩の碑があり、

故牧野藤丸之墓

李講中

の文字があるという。また同地井原勘次郎家には、牧野兄弟の遺物として、鈴と念珠と袈裟らしい布片、更に栗林信次郎家には、ミツ柏の紋を施した椀が遺っていたことが、昭和九年十一月同地を訪れた大阪毎日新聞社の西瀬英一記者が報告している。

私は此処で少し長くなるが、昭和九年秋川上村李(いま美山村)の、兵庫父子の遺跡を紹介し、同地の模様を偲んで見よう。

：：：兵庫の妻子を押込めた座敷牢や、豪力な藤丸のために特に頑強に造られたであろう獄舎の跡は、すっかり水田になっているが、なお荒涼極まる谷底である。射場区長は腰の鎌で丈なす雑草を刈り尽して、くると、高さ九〇<sup>セシ</sup>の苔むした墓石が一基現れた、藤丸の墓の碑より遙かに古い、石質もよく「延宝八年十一月二十四日、賀宝輪慶信女靈位」の文字が判読される。俗名も刻まれていたらしいが、これは全然読み得ない。李の里では「乳母の墓」と呼ばれている。延宝八年(一六八〇)と云えば流罪三十一年後で、千代丸・藤丸の壮年時代である。恐らく流罪当時嬰兒だった——否、流罪後生み落とされたのかも知れぬ——千代丸と藤丸を慈しみ生存させて、一家と不倖を共にして果てた優しい乳母で、彼女は里人の伝える如く、李の井原家の娘だったかも知れぬ。さらに北の入口に近い崖の雑草を刈って貰うと、同じ様な石塔と六地藏が現れた。「天和三年三月二十七日、董覚信女靈位」と判読される。この墓石は高さ七〇<sup>セシ</sup>立派な石塔で、これに並ぶ六体の地藏仏も誰が刻んだか気品の高い石仏で、この地藏尊こそ兵庫とその子五人を形どったのではなからうか、勿論この墓こそ乳母に先立たれる事二年後、空しくなくなつた兵庫頭の内室の墳墓であらうと思われる。

西瀬英一氏が見たこれらの遺品や遺跡は、水害後の今も果たして無事で遺っているのであろうか。

## ⑥

以上私は牧野兵庫頭長虎とその一族の悲惨なる生涯のあらましを述べたが、一族中もつとも悲惨にして、且つ劇的な最後を遂げた四男藤丸のことを述べよう。「牧野伝記」の伝える処によると、

四男藤丸は父兵庫の血を受けて性質逞しく、大男で腕力も人並みはずれて強かった。彼は常に牢番に向かつて云うには、「お前達は神妙に俺を監視しているが、そんなことは無駄なことである。もし俺が本気で牢を破ろうと思えば一たまりもない。見ろ！この通りだ」と格子に手をかけてゆすぶると、角物の格子がゆがみたわんだ。番人共が驚いているく、なだめると、「心配するな俺は上の咎めを受けた身だ。何処へも逃げをせぬ」と笑った。ところがこの藤丸が、元禄十二年卯二月(一六九九)、破牢の上番人李

兵衛を殺し、何処をどう逃げたか姿をくらし、近江国大津まで落ちのびた処を捕らえられた。恐らく父兵庫の郷里越前に匿れんとしたのであろう。翌年三月朔日切腹を仰せつけられて果てた。時に五十四歳、在獄、実に五十一年であつた。

⑦

これで私の「雑説牧野兵庫伝」は一まず終わる。こんなことは云い訳にはならぬが、私はさきに本紙に載せた、「川中の史跡を探る」の雑文中、兵庫の事に少し触れたものの、あれだけでは読者に何の事やら理解し難いと考え、補筆のつもりで大急ぎで稿をなした。文字が蕪雑であり文字に精粗があるのはその故である。また「兵庫伝」の参考文献として明和(二七四六―七二)の人「抱嶺」の著「牧苗類叢」や、幕末の歌人長沢伴雄の著「龍の御稜威」のあることを知りながら、遂に閲覧の暇がなく、僅かに「日高郡誌」・「田辺町誌」・「田辺市誌」・「南紀徳川史」・「近世日本国民史」・西瀬英一氏の「牧野兵庫父子の哀史」等を見たにすぎぬ。他日もし未見の二書を非読し、李の地に遊ぶ事あれば、もう少し詳しい詳しい事情がわかるかも知れぬ。その日を期したい。

(昭和三四・五・一四 夜誌)

## 城戸医伯家蔵善妙寺焼に就いて

「紀州新聞」昭和三十四年五月二十五・二十六日掲載

五月九日、前和歌山県文化財委員谷口秀一氏の斡旋で、中津村三佐城戸医伯秘蔵の刀剣と陶器を拝見する機会を得た。

私にはもとより骨董癖はない。まして骨董道楽のうちでも、最も難しいと云われる陶器の鑑賞眼などあろう筈はない。然し郷土研究を志す以上、ある程度刀剣や陶器の知識がなければ不便である。それには文献を読むことも必要だが、より以上に多くの実物を観ることが大事である。洵に得難い機会であると考え、お言葉に甘えることとした。

この日十一時三十分私達を乗せたバスは、折柄の細雨の中を三佐に向かう。一行は前記谷口秀一氏と、理屈も何もない、只もう陶器が好きで好きでたまらぬと云う、木下パン店主人の三人。高津尾で中津村教育長井原義男氏、紀州新聞中津通信員、その他が加わり午後一時三佐に着いた。

医伯は越前福井の人で、壮年時新宮病院に職を奉じ、のち御坊市吉原通りに医院を開業、昭和二十八年頃中津村三佐に移られたと仄聞する。

その刀剣と陶器に興をもたれて、既に四十余年と云われるだけあって、夥しい光彩陸離たる銘刀であり、珠玉の名器で、好事家の垂涎を禁じ得ないが、不粋な私にはこれを語る資格はない。ただ郷土研究という立場から、特に興味を惹いた善妙寺焼について、一、二を記して自己の備忘とする。

○ 善妙寺焼のことは、これまでも二、三回本紙に書いたことがある。したがって少しくどのような感もあるが、もう一度くり返してみよう。

善妙寺焼は御坊市島浄土真宗善妙寺の第六世玄了が、仏に仕えるかたわら趣味的に作った陶器である。玄了和尚は宝暦九年正月十九日（一七五九）に歿しているから、ちようど二百年余り昔の人に当たると。和尚は当時名僧として知られた華嚴鳳潭に師従して、善妙寺の額を貰っている程であるから、相当学識の高い人であつたに違いないが、詳しいことは一切わからぬ。

陶器用の土は楠井村（いまの御坊市楠井）から採つたので、今も同地に善妙寺畑と云う所が遺つていて聞く。窯は多分同寺の境内か、或は同寺からあまり遠からぬ地にあつたものと推定されていたものの、従来は何処とはつきり知られなかつたが、昭和十六・七年（一九四一・四二年）ごろ、善妙寺の現住職木下靖夫師が、かねてから窯跡と伝えられる、大字島向河原の水田約一坪（大字島福井義一郎氏所有）を発掘したところ、地下約六〇センチの地点で、多数の陶器片と火熱により既に融化した窯内壁の一部を得、ほぼ窯跡と確認されるに至つた。

玄了が善妙寺焼を製作したのは享保（一七一一—一七三六）ごろから宝暦初冬（一七五九）の約三十年間と云われ、玄了歿後その製作は絶えた。作品には花器・水指・茶碗などいろいろあるが、その最も代表的なものは、籠型花生とされる。これは本宮の名物桧籠を模したもので、現存の桧籠の中に善妙寺焼と全く同じものがあると云う。

いづれにしても善妙寺焼は、紀州の陶磁器の中で最も古い歴史のもので、頗る簡雅素朴の気品に富み、郷土的色彩の裕かなものとして珍重され、紀伊六代藩主宗直卿にも、しばしば献上したことが善妙寺の記録にある。即ち、

「御用御焼物殿様へ焼上候住持は玄了師也。但御公儀へは島村文助と書上候。御用数年相勤め色々焼物差上候。依之毎度公辺より御尋之品も有之候に候」とある。

また文泉堂主人貴志貞善著「紀伊陶磁器史」の記事には

——多くは無銘で稀に(善妙寺)三字の小判型印がある。「日高」印も稀である。古記録に肥前焼に似しとあるが、今日伝わっているものに、普通備前焼と云う暗褐色式のものはない。釉薬(うわぐすり)は殆んど青磁に暗色を帯びたものである。古記録者の見解の差違が判明せぬ為、暫く疑問として置くが、寧ろ古伊賀等より胚胎した考案で無かるうか——ともある。

○

以上で善妙寺焼の概畧を終えるが、さてその実物はとなると、中々厄介である。と云うのは第一現存するものが甚だ少ない。私もこれまで所謂善妙寺焼籠型花生を二・三見て来た。しかし正直に云うと、どうもよくわからないのである。見る度に何か感じが違うのである。成程これが真正正銘の善妙寺焼かと、頷けるようなものには、なかなかめぐりあえなかつた。それが今度城戸医伯の愛蔵品を拝見して、はじめて得心するを得た。城戸医伯家蔵の善妙寺焼水指は、高さ十八<sup>セ</sup>・口径十三<sup>セ</sup>・直径九、五<sup>セ</sup>で円筒形、釉薬はやや黄色味がかった暗灰色を帯び、備前焼程の堅緻さを感じられぬ。これは肥前焼が営利的に完全な窯で焼いたのに比べ、善妙寺焼は一個人の余技として、小規模な釜で製作した相違であろう。またこの水指には面白いことに、竹べらの様なもので

伊勢大神

大遷宮みぎり

寛延二年

霜月

ぜんみやうじ

玄了(花押)

とやわらかな筆跡で彫りつけ、底裏に「日高」の刻印が見られた。

寛延二年は一七四九年にあたり、今から数えて二百五十年程の昔になる。この年果たして伊勢大神宮の御遷

宮があつたか否かはまだ調べていないが、とに角伊勢大廟御遷坐のことが、草深い紀州の片田舎の和尚にまで影響を及ぼし、その作品に敢えて記銘させているのは、一寸愉快ではないか。

いま年表をくると、寛延は四年十月二十七日で宝暦と改元している。そして善妙寺焼の製作者玄了は、同九年に示寂しているから、この水指は彼の死に先だつ十余年の作と云うことになり、善妙寺焼としては比較的後期に属するものでないかと思う。

私にはこの作品の美術的、あるいは骨董的価値はわからない。けれども製作年代の確かな点と、玄了自身の記銘の存する点から、善妙寺焼研究上洵に得難い資料と考える。それにつけても、当日あわてて写真機も拓本道具も持たなかったことが悔やまれてならぬ。次の機会には是非とも、その写真と拓本を得たいものだと思う。

—終— (昭和三四・五・二二夜)

## 由良文化会の発足にあたって

「紀州新聞」昭和三十四年六月一・二・三日掲載

国鉄由良駅に勤めている岩崎芳幸氏から、「五月十日に興国寺で由良文化協会の発足式を挙げる是非顔を出せ」と云う言葉を貰った。

興国寺へは一昨年灯籠焼を見学に行ったまま御無沙汰している。季節はちょうど晩春で申し分ない。若葉につつまれた禅林で小半日を過ごすのは願ってもない。御言葉に甘えてぶらりと遊びに行くつもりでいた。

ところが十日朝の「紀州新聞」を見て驚いた「当日、井上豊太郎・清水長一郎の両氏が講演を行う」とある。冗談じゃない、私はこう見えても純情なるロマンスグレーである。蔭では人一倍へらさず口をきくが、さてとなると、からきし物が云えない。

大正末期から昭和初年にかけて人気の高かった大衆小説家に三上於兔吉という作家がある。その最初の頃には、「元禄若衆」や「戦国英雄」など、英仏の浪漫時代の古典をまげ物に、何食わぬ顔で翻案したことがある位で、相当心臓の強い人柄であつたと思うが、この三上於兔吉が、はじめに何処かの文芸講演会に臨み、いよ／＼本番が来て壇上に立つや、顔色蒼白ついに卒倒すると云う騒動をおこした。と云う記事を最近読んだ。気の小さい私が、とにかく五分間か十分間、あまり大汗をかかずに喋りできたのは全く奇蹟と云う外はない。

さて、馬鹿噺はこれ位にして、当日お集まりの人々の御様子を拝見すると、神田耕一郎氏や岩崎茂助氏、それに日高高校の裕田信雄氏を別として、郷土研究には比較的初心の方が多く様に見受けられた。勿論私も一年生。しかも極めて出来の良くない一年生に過ぎぬ。けれども郷土研究に志してからの期間と云うと、ほんのちよっぴり古い。そこであの席でお話したこと、郷土研究の入門書と云うようなことを、もう一度補足してみたい。参考になれば幸いである。

## 日高郡誌

森彦太郎著、(一九二三年)大正十二年一月二十七日、日高郡役所発行。菊判・総クロス千七百頁。発行部数五百三十部(推定)・定価十円。

### 内容

第一編 || 自然誌・第二編 || 統治誌・第三編 || 食貨誌・第四編 || 産業誌・第五編 || 神祇誌  
第六編 || 宗教誌・第七編 || 文教誌・第八編 || 民俗誌・第九編 || 名門人物誌・第十編 || 名勝及び旧蹟  
第十一編 || 古文書誌。その間三百九十箇の写真版あり

本書は明治四十三年(一九一〇年)十二月から十三ヵ月の日子を費やして完成したもので、日高郡で郷土研究を志す以上、逸することのできぬ名著であり、一面日高郡に関する百科辞典の如き便利さもある。

## 南紀土俗資料

森彦太郎著、(一九二四年)大正十三年三月十三日刊行。菊判三百二十七頁、藍色総クロス。

内容は上 || 土俗篇・下 || 方言訛語篇、方言訛語辞典よりなり

上 || 土俗篇はこれを

第一伝説・第二童戯・第三民間信仰・第四俚謡に分れ

下 || 方言訛語篇は

第一章総説・第二章音韻の変化・第三章方言語法に分れる。

本書は日高地方の民俗学研究上、まことに貴重な著述であり、いまなお学界から高く評価せられている。

## 日高近世資料

森彦太郎著、昭和十一年（一九三六年）五月十五日、自費出版、和装菊判箱入、八百五十頁、定価九円八十銭。

本書はもと天田組大庄屋中村家所蔵の、日高七組の大指出帳に田辺市田所氏所蔵の宝暦十年（一七六〇）の大指出帳写を併せ収録したもので、藩政時代の日高郡全市町村の民力経済事情を調べる上で、最も重要なものがあり、巻末の「日高近世資料考説」七十頁は本書を中心として、日高地方近世の経済社会史を詳論し、甚だ示唆に富む。

鷲峰 余光

森彦太郎著、昭和十三年十月五日、興国寺発行、和装帙入菊判百八十頁。

本書の内容は、上編・下編の二部に分ち、上編には十一編に亘り興国寺法灯国師の法語を掲げ、つづいて本文十一章に、法灯国師九十年の御生涯を中心にその時代相を語り、国師寂後の興国寺盛衰史に及ぶ。下編には興国寺関係の古文書、同寺関係の旧記を網羅する。単に興国寺や法灯国師を知るだけでなく、由良町の歴史を極める上で、特に由良地方の人々は読まねばならぬ。

詳細紀伊郷土文献拾遺

井上豊太郎著、昭和十二年二月十一日、起雲閣発行。菊判箱入、藍色総クロス、本文四百三十二頁、定価五円、三百部限定出版。

本書は現存する南北朝以降明治末年まで、凡そ六百余年間にわたる紀州郷土関係の文献、数百巻の中から抜萃した文章、詩歌を年代順に配集し、文献の解題はもとより、著作者の伝記・文意の詳解を附したもので、行文簡明流暢、実に親切な書である。特に由良地方の研究家としては、阿戸教専寺の西海、及び智定の由良十八景の詳細と伝記、或は由良義溪守応の研究資料として、今日これ以上のものは一寸難しからう。

## 紀伊続風土記

紀藩に仕えた有名な儒学者仁井田好古を総裁とし、国学者加納諸平・本居内遠以下十九人の俊秀を助手として、前後三十三年の日子を費し、天保十年三月十五日（一八三九）完成した。総巻数百九十二巻、紀伊一國の地誌として古今独歩のものである。

しかし従来はゆずかに写本数部が伝わるのみで、研究家が見ようとしても、容易に手にし得なかった。そこで明治四十二年（一九〇九年）和歌山県神職取締所が、これを復刻活字本五冊として一千部を刊行し、次いで四十四年五月、二版若干部を印行した。この復刻本は四六版で、第一輯八七四頁・第二輯七七〇頁・第三輯四〇二頁・第四輯九一四頁・第五輯四〇六頁に及ぶ浩瀚なものである。

和歌山県神職取締所とは何処にあってどんなことをした所か、これについて私は何ひとつ知らぬ。けれども「紀伊続風土記」の復刻刊行したことだけでも測り知れない。

## 紀伊国名所図会

前後編併せて刊行された分は二十三冊にのぼる。私の所蔵の前編の奥書によると、天保九年九月（一八三六）発行、後編は嘉永四年四月（一八五二）発行となっている。また発行所書肆は前・後編とも若山の帯伊書店である。

そもく、「紀伊国名所図会」は、若山の人高市志友が、編纂の藩命を受け公撰したもので、後編は国学者加納諸平等が編纂に当たった。行文流暢・平易、おんな子供にも分り易く、特に岩瀬廣隆の挿絵は異彩を放ち、わが国名所図会中の白眉とされる。

大正末年か昭和初年ごろ、「全国名所図会全集」のうちに収められ、復刻刊行された。

## 白崎村誌

匪石、小川仲記著、大正四年（一九一五年）十一月編述されたもので、もと白崎町役場に保管されていた。三十字詰十二行原稿用紙百三枚に記され、未刊本。

## 由良村郷土誌

大正<sup>(一九一六年)</sup>五年十二月、由良村郷土誌編纂委員原胤衛氏の編纂によるもので、美濃野紙約八十枚に毛筆で誌されている。編者胤衛氏の歿後、同家に保管され、私は昭和<sup>(一九五三年)</sup>二十八年春、当時畑小学校長であった田端辰夫氏の御尽力で借用の上全文写本した。

前記「白崎村誌」とともに何と云っても由良町と直接関係のもつもので、是非一読すべきである。

## 和歌山縣史蹟名勝天然記念物調査報告

舌を嚙みそうな長い名前である。第一集から第二十二集まであり、戦後は「和歌山県文化財調査報告書」の名で第二集まで出ている。両方ともそれ々の委員が、県下の史蹟名勝天然記念物を、実地に調査した記録集で、日高郡関係のものも多い。

ところが厄介なことには、以上の書籍は今日では希少本に属し、一寸手に入り難い。また仮令古書店で見出したとしても、かなり高価である。無論何をするにしても、余り金銭のみにこだわってはロクなことは出来ないか、初めから大きな犠牲を払わされると、つい嫌気がさし易い。

そこで私は、公民館あたりにこれらの諸書を備えたり、文化会のさし当たりの事業とて、以上書籍中の、由良町関係の部分だけでも抜粋して一本にまとめ、謄写印刷の上会員諸氏に配布しておく、非常に便利ではないかと考える。

甚だ生意気なことを並べて恐縮する。そんなことはお前に云われるまでもないとお叱りも覚悟している。ただ同じ日高郡内で、しかも御坊市に近い由良町に、私達と志を同じうする研究団体が出来た嬉しさに、つい云わでものこを申し上げたに過ぎぬ。御諒承を願いたい。

(昭和三四・五・二七夜誌)

## 寒川ドライブの記

「紀州新聞」昭和三十四年七月三十一日

八月一・二・三・四日掲載

○ 有名な地球物理学者ですぐれたエッセイストでもあった寺田寅彦は、晩年家族づれで郊外をドライブするのを何よりもよろこんだと云う。実際四季を問わず、自動車で遠乗りするのは愉快なことに違いない。だが今の日本では貧書生の私達には一寸望むべくもない。私達がたま／＼自動車に乗るのは、病気で入院するか、酔っ払って大虎になったか、とにかくロクでもない場合しかない。ところがそんな私達が、最近美山村寒川までドライブした。新晃商会主小山豊氏が商用で寒川まで行く、一緒に行こうとすすめて呉れたのである。

○ 一行は山中不艸氏・中井千代松氏・筆者の三人。六月十三日正午前、小山氏の運転する車はすべるように御坊をはなれた。東町を経て善妙寺橋を渡り、出島堤へ出る。日高田圃の麦はあらかた刈りとられ、田ごしらえの盛りである。この街道は筆者が朝夕通勤する道であるが、ボロ自転車で埃を浴びて走るのとは、大分おもむきが違う。精一杯えらそうなポーズをつくっているうちに、早くも野口橋が過ぎ、千曳の山裾にかかる。傍らに伊達千広の歌碑がある。「日高郡誌」に云う。

#### 金屋淵 Ⅱ

日高川は早蘇村玄子の辺より南々西に転向しその末、終に千曳山(丹生・野口村界)の絶壁を衝いて更に北西に折るる処、河水深く濶(トロ)み、古杉老松これに臨みて色藍の如し、名づけて金屋ノ淵という。実に本川第一の深淵となす。丹生・野口簡の細径はこれを見下して僅かに山腰を通ず。一碑あり。

うごきなきわが君が代のためしには 千曳の山ぞひくべかりける 千広

かくえりつけたるは 瀬見善水

この辺、古来螢の名所して聞ゆ。明治二十三年(一八九〇年)の洪水以来噸にその数を減と雖も今も初夏の夜舟を浮かべて清興を尽くすもの少なからずという。

森彦太郎先生がこう誌されて四十年、戦争と水害と農薬で、も早螢は絶滅に近い。水に映じた古杉・古松も殆んど伐られ、石材採取のため山容は革まり、わずかに通じた細径は、トラックとバスが砂塵をあげて通うている。今も昔に変わらぬのは日高川の水のみとなった。

車は細長い江川谷の半ばから南に折れ、鴨尽し池を左に見て、印南町白河に出た。この辺りは既に植付けが終っている。所々に咲く山百合の花が車窓に映る。自動車はなか／＼好調である。ところが大歳神社を過ぎ、もう直ぐ才ノ神峠と云う所で厄介なものに出くわした。行く手に木材を満載したオート三輪が、デンと腰をすえている。運転手は必死でエンジンをかけるが、その度に車は身もだえするばかりで、前へも後へも動く気配がない。そのみか車体の動揺で積荷が上かぶきして前輪が浮きあがる。

小山氏が様子を見に行く。運転手も助手もまだ経験が浅いのか、一寸放心状態になっているらしい。「弱ったナー」車中の三人はふだんは人一倍へらず口を叩くが、こうなるとさっぱり智恵がない。その間小山氏は車輪の下へ歯止めをしたり、浮き上がる前輪を押さえたり、右へ切れ・左へハンドルを回せと、一人で奮闘してやっと危地を脱せしめた。それにしても漸くオート三輪が通るだけの道路、前輪が浮く程も木材を積んだ車、事故にあうと一人でもならぬ運転手、何だか日本の縮図を見るような気がする。ここで四十分ぐらい手間どった。

切目川のほとりに出た。脇の谷・松原・丹生・崎の原・皆瀬川・小原等の小さな部落がつぎつぎと後へ消えて行く。川の大きさに比例するの、総じてこの谷筋は日高川沿岸にくらべておっとりしている。日高川筋のような騒しさががない。自動車は軽快な音を立てながら青葉の山裾を縫うて行く。田の垣内で車を停めて貰う。ここは印南町に合併するまで真妻村の役場の所在した地で、傍らに真妻神社が鎮座する。私共が停車したのは神社を拝むためではない。実は神社の一、二町上手の街道傍に建つ古碑を見たかったのである。碑は丈約一米、長方形で頭部が丸く龜頭形をなし、その下部に地藏菩薩を陽刻し、

為屋敷先祖一切精霊

施主 弥吉

嘉永四亥年五月立之

の文字が見られる。いま年表をみると嘉永四亥年は一八五一年に当り、格別古いとは云えぬ。また建碑の趣意も屋敷先祖一切精霊のためとあれば平凡である。が私にはこの碑の形状が面白いのだ。男性器をホウフツするものを感じる。性神ではないかとの疑いを抱いて十余年になる。その間、人伝えではあるが、土地の伝承を調べたが、それらしい形跡は認められなかったにもかかわらず、私の疑念はまだ晴れぬ。ここからやや下流に当

たる軍道の腰神と云い、何か秘められた性的信仰の気配がしてならぬ。なお精査をつづけて見たい。

再び車上の人となる。車は相変わらぬ川沿いに、山脚を幾つかカーブしながら進む。上洞へ来た。駐在所・小学校・郵便局があり、この辺りの一中心地をなす。小名、休場(やすば)の地名もあるように、切目辻を経て山路郷へ出る古い三里峰越の宿場でもある。切目川沿いの水田の畔をいろどる「さつき」の真紅が目にしみる。谷の兩岸がようやく狭まって来た。川又観音入口と書いた標柱が流れるように後ろに消えた。樹木の色が全くなり、道巾も車がやつと通るだけである。

縦・楡・楓・杉・桧、植物学の心得のない私達には見当もつかぬ樹々が左右に生い茂り、濃い緑の蔭をなして、車窓に流れる空気をひんやりとする。不艸氏があわてて上着をつけた。峠道の七、八合目で二、三人の伐採夫達に出逢う。樹陰に山小屋があった。峠を登り切った処が小谷谷墜道だ。今から十数年前私は自転車で此処を越したことがある。ちょうど冬の最中で、墜道の入口から太い氷柱(つらら)の垂れていたのを思い出す。余り長いトンネルでもないが、岩肌が露出しているのが威圧的だ。車を乗り入れると溜まっていた地下水がひどいしぶきをあげた。或人の説では明治四十年代(一九〇七年)の開通と云う。それにしてもこのトンネルが日高奥地輸送の幹線株井トンネルの開通より早いのも面白いし、「日高郡誌」に貫通年代の記載がないのも腑に落ちぬ。しばらく疑問を伏しておく。トンネルを出た所で小山氏が車を停めてくれた。待ち受けたように老鶯が啼いた。澄み切った声だ。続いて名も知らぬ山鳥が啼く。負けずに鶯が啼く、山鳥が啼く。全く素晴らしい。人煙を離れると鳥の声もこんなに美しものであるか。「あの山はどの辺りであろうか」山又山が遥かに重畳する涯を一人が指さす。「上山路か竜神と違うか。雲か山か呉か越か」一人が糞真面目な顔をして戯れる。「あれは君、護摩ノ山さ」誰かが答えた。

下山路側の下り路は一層険しい。道中はいよいよ細かい。おまけに急カーブが多い。数十米の下を日高川の支流が幽かに流れている。悠々おしゃべりを続けながら操縦する小山氏の手ぎわは、私達から見ると全く神技に近い。深い樹林に名も知らぬ花が、ひそやかに白く咲いている。馬酔木の細かい葉が車窓に映っては消えた。額あじさいの野生が路傍にこともなげに淋しく花をつけている。道中たった一人の道路工夫に出くわしただけで、日高河畔に達した。それ程人通りはない。昨今この道路の改修が論議されているが、いまでは日高地方で

たった一つ残った仙境だ。日高川筋に出るとさすがに視界がやや広くなる。自動車は日高川の流れに沿うて下る。所々に杉皮葺の家が散在する。風に備えた屋上の河原石は、実用と同時に一種の美術的な趣きを出している。五味発電所の少し下流で日高川を渡り、寒川の溪谷に入る。「紀伊続風土記」寒川谷の条に

#### 寒川谷 II

この川原は村の長(うしとら)西野川村より流れ出て村領一里を経て村領一里を経て大川に落合う大谷なり。寒川の名茲におこる。

とある。

またこの地が生んだ小説家沖野岩三郎の作品の中に、「寒川の名の示す如く、寒々とした寒村に生まれた」と、恰も寒川の名は、寒々とした村乃至は、貧しい村勢に起因する如く書いていたのを思い出すが、事實はそうではあるまい。手っ取り早く云えば寒川のソは十である。十川が寒川に転じたのに違いない。つまり十は谷々枝川の多きを形容した言葉である。こんなことを考えているうちに、寒川村土居福島栄助氏方の表に着いた。

#### ○

おそい昼食を福島氏の食堂で認め、令息の案内で安楽寺へ行く。安楽寺は臨濟宗興国寺末で、村を一望にする景勝の地にある。物古りた石階を上がると、明治八年(一八七五年)に改築した建造物が、初夏の昼下がりの陽光の中に静まっている。私達はここで先年巽三郎氏によって広く紹介され、県文化財となつた正平十四年(一三三九)在銘の神像と仏像を拝む。技法素朴、むしろ稚拙と云うべき作である。虫害の甚だしいのが気がかりだ。客間の長押しに三芝古田庸の詩文「観瀑之記」があつた。また仏前の双盤に

紀州日高郡油(原)良畑村、長谷寺什物六才衆為菩提寄進  
寛文八年(一六六八年)、天下一出羽大椽宗味作

と文字のあるものや、半鐘に

天保十三年(一八四二年)四月吉日

細工島村、金屋平蔵

の銘が見られるのが、私の興味をひいた。安楽寺を辞して川向かいの山裾に寒川神社を拝む。この地の豪族寒川氏の氏神で、その由緒は古い。しかし私達をよろこばせたのは、境内の老桜の幹一ぱいに咲きほこっている白く咲きほこっている石斛(せうこく)の花の見事さであつた。この老桜について私はかねてから林貞助氏から概畧を聞いたことがある。

寒川神社の境内に素晴らしい桜の大樹がある。天然記念物に申請したいとのことであった。その時林氏は、しかし近年この老木に風蘭が寄生して樹勢がやや衰え気味だとも云われた。けれどもこうして見ると、成程桜もいいが、風情のあるのはむしろその寄生している風蘭とやらではないかと思つた。私はさきに林氏から聞きたいいきさつもあつて、頭から風蘭ときめてかかったが、山中氏は歳時記をとり出して、風蘭は間違いで石斛だと云い出した。試みに歳時記の二者をくらべると、

石斛の花 森林の岩の上や老樹の上に生ずる常緑の草で、多数の剛質の鬚根から節のある木賊とくさに似た緑の茎を六・七寸叢生する。節ごとに葉をつけ晩夏のころ、白または淡紅色の茎一寸ほどほどの美しい花を二つずつ茎の上にひらく。鑑賞花として栽培され、変種が多い。

風蘭 山中の老樹の上に生ずる草であるが、鑑賞花として愛用され、その種類が多い。晩夏のころ葉の脇から花茎を出して、一寸あまりの白い五弁の蘭に似た花が微香を放つて咲きはじめるが、咲き疲れると黄色くなる。

葉は細長くて二寸あまり、厚くて万年青おもとに似た葉を抱きあつてつける。樹上に風を見て茂ると言われこの名がある。

以上が手許にある山本健吉著「新俳句歳時記」夏の部の記事である。何れにしても深い緑の杜を背景に、老樹の梢まで点々と白く匂う花は環境が環境だけに、甚だ印象的である。



再び川向かいの福島氏の宅へ戻る。途中にこの地の豪族として知られた寒川道典氏宅がある。寒川の溪流に臨む一角に、椒酒な壁を繞らし、四脚門を構え、前後に白亜の土蔵を並べ、中央に庇瓦萱葺の本屋を見る。実に堂々とした邸宅である。見るからに旧家らしい。福島家の居間で紅茶を御馳走になる。美山村切つての富商で、三尾屋の名は界限で誰知らぬ者はない。屋号が物語るように先祖は美浜町三尾から出た人だ。家伝によると福島家は代々三尾村の庄屋を勤めたが、後故あつて湯浅に移つた。初代栄助氏は嘉永元年三月十五日(一八四八)に生まれ、幼名を政之助と称した。元治元年(一八六四)一七歳の春から魚類雑貨を商い、有田郡修理川から長尾根を越え、愛川を経て寒川一円を行商、明治元年三月、下西野川に家を構え三尾屋と号した。これが立家の祖であり、いまの令息で四代を重ねる。福島家の居間の長押しには、いまも初代栄助氏が使用の「おこう」が飾られている。私達は福島邸のやや下手で落合う小薮川沿いに峠の石地蔵を訪ねたり、山裾の草地に咲く山百合を賞したりする。「河鹿が鳴いている」不艸氏と中井氏が立ちどまる。成程そう云えば蛙の鳴声でない。も

つと澄んで美しい。このあたりも過る七・一八水害ではひどい被害を受けた。けれどもいまはすっかり復旧している。川沿いに洒落た旅館がならび、山峡の別天地のしずけさだ。何時まで居ても飽きぬ。けれども、そろそろ五時に近い。私達は残りおしいが再び車上の人となった。

(昭和三四・七・一夜)

## 笑い祭

「紀州新聞」昭和三十四年十月二十五日掲載

十月十五日午後、山中不艸氏と川辺町江川、丹生神社の祭礼を見て来た。有名な笑祭の行事を見物するつもりであったが、うっかり時間を取違え、それは間にあわなかった。

神社の近くまで来ると、鎮守の杜からは太鼓の響きや笛の音や、人のざわめきが聞こえて来て、年がいもなく胸がはずむ。横手の細い間道から急ぎ足で境内に来て見ると、既に御輿の渡御が終わり、馬場では江川の四ツ太鼓が、ワツシヨクと練り回っていた。早速見物の群れに加わる。

四ツ太鼓はこのほかに山野にも和佐にもあるのだが、特にかわったところはない。たゞ四ツ太鼓を先導する鬼の行動が、なかなか厳格で几帳面なのに感心した。先導するのも他所村の鬼のように、単に飛んだり跳ねたり走り回るだけでなく、動作が一ツ一ツ丁寧で折目正しい。

また先導の前をうっかり横切りでもしようものなら、どこまでも追いかけて、もとの位置へ連れ戻す。甚だ律儀であり、真面目さがあつて、見ている気持ちがよくつた。

四ツ太鼓がゆっくり練り回している間に、ざっと境内を一巡する。拝殿に笑祭の行事に使った一升杓型の函が納めてあつた。内部に藁をつめて、これに三十位サウジの女竹を数本立て、柄の尖端先端に蜜柑や柿を串刺しにしていた。渡御の際大勢の氏子がこれを持ち、口々に笑え笑えと囃し立て大口あけて笑いながら進むのだという。このせち辛い時世に、何とも間の抜けた囃である。

近来この起源について諸説粉々であるが、何れも想像や伝説の範囲を出ない。あわてて決論を出すには及ぶまい。

気がつくくと御輿庫の戸が開いていたので、古い棟札でもないかと窺うと、赤さびた湯釜が転がっていた。重いのを我慢してにじらせると、次ぎのような銘が椽に刻んであった。

寛永<sup>(一六四四年)</sup>廿一申卯月吉日

寄進主江川平右衛門

紀州日高川上庄江川

八幡宮□□津村正重

これは私にとって大きな発見であった。と云うのは津村正重は私の居村に近い若野の住人で、その所伝は明らかでないが、日高地方の社寺の釣鐘や半鐘におくこの名を見る。私の知る限りでは正重鑄造の鐘は十数個を数え、美浜町吉原松見寺の享保五年(一七二〇)鑄造を最古とし、野口法林寺の明治九年<sup>(一八七六年)</sup>の半鐘に及んでいた。したがって目下印刷中の「矢田村誌」人物誌に、正重を享保以降明治初年まで数代にわたる鑄造師としておいたが、寛永鑄造の釜が出た以上、約百年を溯らせねばならぬ。因みに寛永廿一年(一六四四)は三代將軍家光の治世で、その十二月十六日正保と改元している。

そのうち雀踊りははじまった。山野の若者達が社前に大きく輪をつくり、中央に数名の囃子方が三味線・笛・拍子木・太鼓をもって床几により、その歌と囃子で優美な踊りが進行する。

目出度の千代に八千代に、これも千束の玉手函………にはじまり

秋の祭りの賑わいに民も安全、神のいさめの神樂の太鼓ともろともに………

に終わるかなり長い時間を若者達は神妙に踊りつづける。この雀踊りは小松原から学んだものと云うが、既に自家の小松原では廃絶せんとしている今日、まことに有難い存在である。次が江川の奴踊りとなり「添わば日高の奴等サ………」と踊ってゆく。

奴踊りはいまも各地にある。現に私の居村土生八幡宮の祭礼には、小熊の若連中が奴踊りを奉納したが、ここ数年来、人前で踊るのは照れ臭いと、利いた風な連中が多くなって中絶している。

ところが、この雀踊りにしても奴踊りにしても、実に真面目に、律儀に、しかもたのしみ、一種の誇りをもっておどっている。川一つへだてるだけで、こうも気風が違うものだろうか。

○ 帰り道自転車を預けておいた、不艸氏の句友森口穂子氏の家により、進められるまま無遠慮に上がりこんで御馳走になる。

時候は中秋、日和は晴天、時刻は夕べ、酒はよし肴はよし、いずれも勿体ないほど結構づくめてあったが、わけても大皿に盛られた「なれ鮓」は見事であった。よほど材料を吟味しているのである。電灯の光に見る鮓は青白くさえ、その風味はおつとりと、長時間に自ら熟成した天然自然の味だ。

○ 聞けば穂子氏の厳父はその年の天候で、鮓魚すしなの塩かげんをする程の気の配り方とか、まことにさもありなるとうなずかれる。

○ 御坊市周辺の祭礼が、近年ようやく乱れんとする折柄、丹生神社の祭礼が、忠実に古式を伝えているのはうれしい。御坊方面ではあまりお祭り行事に熱をあげると、彼奴は金太郎とわらう。私は金太郎とわらわれてもいゝ、お祭りが好きだ。お祭りとか運動会とかは実に庶民的でよい。庶民的ということは、とりも直さず人間的と云うことであろうから。

(昭和三四・一〇・一九 夜)

## はまゆう雑記

「紀州新聞」昭和三十四年八月十・十一・十二日掲載

○ 浜木綿の花が咲き始めたと聞いて、六月二十七日の午後、山中不艸と楠井海岸の浜木綿自生群落地を見て来た。

○ 浜木綿は紀州をはじめ暖国の海浜に多く自生し、近年は観賞用にも栽培されている。わざ／＼楠井くんだりまで出掛ける程のことはない。けれどもこの花の本当の美しさはせまい庭に一株、二株咲いたのを見ただけでは味わえぬ。少し大袈裟でもはてしない灼熱の砂浜に、紺碧の黒潮を背景として幾百株と乱れ咲いたところを見てこそ理解出来る。最近はまだ心なき人々がむやみに濫獲して、とみにその数を減じつつあると云う現状も、一度知っておく必要もあった。

ところで浜木綿とはどんな植物か、海岸地方の人々には今更説明の要はないが、山間部では知らぬ向きがあるかも知れぬ。順序として一応諸書の記すところを紹介して見よう。

ハマユウはハマオモトともハマバシヨウとも云い、漢名は「広東新語」にある文珠蘭であると云われる。また古く辺鄙の地では、浜百合とか浜芋とか称したと云う。

わが国では紀州のほか、暖国の海浜に自生している。葉は多数叢生して開生し、長広な披針形をなし、肉質厚く緑色で光沢がある。茎は直立して太く短い円柱形をなし、その葉鞘が巻き重なって偽茎となっている。八・九月頃、葉間から緑色の帯を描き、高い頂きに多くの花が集まって、かさ形をなし、花は白色で香気を放ち、狭い六花蓋片がある。六雄しべ、一子房があつて、その白色花柱の尖端は紅紫色を呈する。花の後に円い実を結び、淡緑色の果皮がはじけて大きな白い種子がこぼれる、種皮はコルク質で海水に浮かんで運ばれるのに適し、漂着したところで新しく仔苗を作る。

云い忘れたが、浜木綿はもと熱帯性のものでヒガンバナ科に属し、宿根生の大形常緑草木である。また浜木綿とよく似た植物で、鉢植えにしたものに、「いんどほまゆう」がある。原産地は東印度。花は薄桃色を呈し、浜木綿にくらべて、どこか可憐で淋しい。

このほか浜木綿の茎をへぐと、白い紙のようなへだてがある。大臣の大饗の際、料理に出す雉子の足をつつむ料に、志摩の国から献上するのが古例であつた(仙覚抄)とか。恋文をこれに認めて、彼女の許へやると、返事をよこさぬと凶事があるとか、恋人の名を書いて枕の下に敷き寝ると、必ず彼女の夢を見るとか(藻塩草)。昔の人はなかく、味なことを書きのこして面白い。

前おきが長くなつた。下楠井でバスを降りて真直ぐに畑の中の細路を海の方へ下る。見渡す限り諸畑が連なり、所々に西瓜畑がまじつていて、どの畠も手入れが行きとどいていて、草一つ見かけぬ。

間もなく砂浜に出る。前面に紺碧の紀伊水道がひらける。畑と砂浜の間は松の疎林がつづき、その根もとには葦や、浜ゴウ(蔓荊)や名も知らぬ蔓草が密生している。しかしその中に点々と白い花をつけた浜木綿があつた。しかしその数はあまり多くない、花もまだ盛りと云えぬ。少し時期が早かつたかな、そんなことを思いながら穏やかな波の音を聞きつつ、私達は東南の方へ歩いた。幸い薄雲が出てそれ程暑くない。足もとでザクザクとくだける砂が快い。

ところが私達が東南に進むにつれて浜木綿は次第に多くなつた。あるものは蔓草の中で、あるものは崩れかけた砂丘の影で、持ち前のエネルギーな葉を逞しくひろげ、太い茎を雑草からぬきんじ、元氣一ぱいに花を咲かせている。中には大波に洗われたか、すつぽりと根をさらけ出し、転がったものもある。周到な不艸氏

は用意の移植鉢で、ていねいに植えてやる。すばらしい生活力を持つ浜木綿のことだ。来年は花を見せるに違いない。

こんなことを二、三カ所できりかえしたり、おしやべりをつづけながら下楠井の浜から数町来たところで、私は思わずアッと目をみはった。この一角は波ぎわから数十歩、海面から二、三米の高さに帯状台地をなし、蔓草や雑草がジャングルのように生い茂り、その茂みの中に数百株に及ぶ浜木綿がいまを盛りと咲き乱れていた。来てよかったと思った。「三熊野の浦の浜木綿百重なす……」と詠まれた古歌の趣きがピッタリと感じられた。

○

三熊野の浦の浜木綿百重なす 心は念えどただに逢はぬかも

古来浜木綿を詠んだ歌は、殆んど枚挙にいとまもないが、もっとも有名であり、かつ傑れているのは、やはり「万葉集」巻の四に収められた、柿本人麿の一首であろう。口訳すると、

「熊野の浦の浜木綿のように、幾重にも幾重にも心には思うが直接には逢わないことよ」となる。

大宝元年十月(七〇一)人麿が文武天皇の紀伊行幸のさい浜木綿を採って、それにこの一首を添え、一行中の持統太上天皇に供奉していた妻に贈った歌であろうと云われる。おなじ行幸の中にあっても、人麿は文武天皇に奉仕し、その妻は持統太上天皇に供奉していたため、思うままに相語ろうことができなかつたのであろう。私はここで、ゆつくりこの歌を鑑賞するゆとりはないが、先ず「三熊野の」と大きく歌いあげ、ついで「浦の浜木綿」とやや小さくしぼり、そこに自生する浜木綿群落へと層々集中を重ねた手腕は、流石に大人人麿の名にそむかぬ。また下旬の「心は念へど直に逢はぬかも」の如きも、ただ単純に直ちに逢いたいと云うだけでなく、逢えない中をどうしても逢いたいと云う思いの、幾重にもこめられた、重くはれやらぬもどかしさが、巧みに表現されていると思われる。

この歌を引いたついでに、もう一つ挙げておかねばならぬのは、一首中の「浦の浜木綿百重なす」は、一体葉か花かと云う論争だ。

先ず葉説では、「万葉集童蒙抄」・「万葉集畧解」・「万葉集古義」・折口博士「口訳万葉集」・窪田空穂「柿本人麿」等、また花説では、鴻巣盛広「浜木綿の百重」・「万葉花譜」・武田 諒吉「万葉集全注釈」・斎藤茂吉「人麿評釈篇上」があり、これを植物名と見ず、波頭をたとえたとするものに、「万葉集代匠記初稿本」・「万葉集

目安補正」・土屋文明「万葉集門外語」・「万葉紀行」等があつて、各々自説を執つてゆずらないとある。

○  
いずれにしても浜木綿は万葉のむかしから、南国紀州の代表的植物とされて来た。そして紀州の浦々いたるところに、豊に美しく群がり咲いて来た。ところが近年文人達の間にもはやされ、新聞・雑誌にとりあげられるに及んで急にその数を減じた。或人の話に一昔前は、煙樹浜や美浜町元の脇から三尾への磯辺には夜目に白いくらい群がり咲いたものだと言ふ。それが今は一本も見当たらず。無論みんな濫獲された結果である。

私達は陸に快速列車「はまゆう号」を走らせ、観光地に「はまゆう旅館」を建てるのもよい。けれども肝心の浜木綿が減んでは、元も子もない。下世話通り「やはり野にわけんげ草」と云う言葉がある。なる程浜木綿は紀州の代表的植物で美しいが、せまい庭ではそれ程のものではない。下世話通り「やはり野に」おいてこそと思う。

—昭和三四・七・六 夜—

## 高尾英吉氏を憶う

「紀州新聞」昭和三十四年九月七日掲載

○  
今年はいつまでも残暑がきびしい。

お盆がすぎても、三十度を越す暑い日が毎日つゞく。そんな酷暑のさ中に、高尾英吉氏が永眠された。同じことならもう少し涼しくなつて、九月に入つてでも、逝かせてあげたかったが、こればかりは思うにまかせぬ。

高尾さん——当然高尾氏とすべきだが、それでは何かよそよそしい——

私が高尾さんに親しくしていたゞいたのは、南紀郷土学会がつくられてからのこと故、ここ十年足らずに過ぎぬ。それでも亡くなられる前の一・二年間は、随分しげしげとお目にかゝつた。そして一時間も二時間も、時には半日も話し込んだ。

○  
高尾さんは中津村高津尾で生まれた。生家は村でも名門であつたが、当時家運ふるわず小学校卒業後、しばらく村役場の小使いをしていたと、これは高尾さんから直々聞いた。

その後和歌山師範に入学したが、そのとき芝口常楠先生は、高尾さんの二年先輩で、室長であった。師範を出た高尾さんは、郡内各地を歴任されたが、若いころは宮相撲などもとり骨太い体格だけに、なかなか強かったと云う。

また文学趣味がゆたかたで、当時の「紀南新聞」紙上に、しばしば高尾弦月のペンネームで、小説や詩歌を投稿された。晩年は淡々としてめったにペンを執らなかつたが、昨年の夏、史蹟顕彰会が興国寺の灯籠焼を見学した際、たまたま一緒になった二十日会に加わり、すらすらと一句を詠まれたのを拝見して、やはり昔とつた杵柄だすと、感心したのを思い出す。

またあれは昭和一九五六年三十一年のことであつたが、三和銀行和歌山支店階上で開催された日本貨幣の展覧会を、高尾さんのお供をして見学した。展覧会をゆっくり見たあとで、二人は長い北島大橋を渡り、ひどい北風の吹く紀の川堤を歩き、当時評判になつた市外大谷古墳を訪ねた。

風は強かつたがよく晴れた日で、古墳のある山裾からは、紀の川をへだて、龍門山の美しい姿が望まれた。私達は古墳の上に腰を下ろし、折から来合した山主の爺さんから、いろいろ土地の話聞いた。高尾さんは眼下にひろがる紀の川平野を縫うように走る街道を指して、

「あれは大和からつづく古い淡島街道だよ」

と説明してくれた。あの時分の高尾さんはそれほどお元気だつた。

その前後のことであつた。私が何かの話から、「和歌山縣蹟をほしいが一寸手に入り難くなつた」と云うと、「僕のを進呈しよう」と云われ、あの部厚い上下二冊の書籍を店の人に持たせ、わざわざ専売公社までとゞけて下さつた。



こんな風を書くとき、高尾さんの思い出はいつまでもつきぬ。そして私の臉にうかがふ高尾さんは、いつもにこのこと笑いを含んでおれた温容である。まことに高尾さんほど、何時お目にかゝつても、にやかな人は珍しかった。およそ十年の御交際の間にも、高尾さんが厳しい顔をされたのは、ついぞ見かけなかつた。それほど、おだやかな人柄であつた。また長く教員生活をした人に見かける一種の臭みはどこにもなかつた。

亡くなられる一・二年前は、お逢いするごとに何か体の衰えが感じられた。そして大抵は二・三年前新築された裏の離れで、床に親しまれる日が多かつた。高尾さんはここで、本を読み新聞を見て、余生をすごしておられた。私が時々新聞へのせる雑文なども、克明に読んでくれた。「矢田村誌」がおいおい進んでいると話し

た時、

「僕、一冊もらうよ、今から予約しておくよ」

と、私を励ましてくれた。「矢田村誌」はいまや私の手をはなれ、京都の出版社「綜芸社」で印刷が進んでいる。初校の終わる日も近い。おそくとも十一月には刊行できよう。しかし高尾さんには最早見ていただけない。よろこんでくれる人が一人少なくなつた。人生の無常をしみじみと感じる。

また岩波写真文庫を愛されて、新刊ごとに取寄せておられた。史跡巡りを好まれた高尾さんは、春秋のころよく大和あたりに遊ばれたが、それが出来なくなつて、写真文庫を見て、慰めておられたのである。

高尾さんは創立当初からの南紀郷土学会の長老であつたし、史蹟顕彰会の有力な会員でもあつた。どちらかと云えば、悠々郷土研究をたのしんでおられたという風であつた。

甘い物好きだつた高尾さんは、身边には常に生菓子や飴類を絶やされなかつた。

「君一ツ食わんか！」

無器用な手つきで、羊羹を切ってくれたことも今は懐かしい思い出となつた。私は高尾さんの進めてくれるお菓子を、無遠慮にいたゞきなながら、いつも長つ尻をした。

そしてその時聞いた話の二・三が、ノートの端に書きつけてある。そのうちに「高尾英吉夜話」とでも題して書きたい。

いさり火の消えて銀漢さえわたる。

—昭和三四・九・二 夜—

## 有間皇子の「結松」の歌について

「紀州新聞」昭和三十四年十二月十八・十九日掲載

御承知のように「万葉集」は、わが国の最も古い歌集であります。古いばかりでなく最も優れた歌集でもあります。この歌集に収められている歌は、長短合わせて凡そ四千五百首にのぼり、その時代も西暦三一三年に

即位された、仁徳天皇の皇后磐姫（いわのひめ）の歌から、西暦七五九年、天平宝字（ほうじ）三年の伴家持の歌まで約四百五十年間に亘り、たぶん西暦七八〇年代奈良時代の終り頃、大伴家持によつて集大成されたものだろうと云われています。

さてこの「万葉集」には、当時の紀の国、今の和歌山県の風土を詠んだ歌、もしくは本県に関係ある歌が、百首ほどあります。さらにその中で、日高地方に関係するものを数えて見ますと二十一首ありまして、

由良町四首、美浜町六首、御坊市名田町一首、印南町切目一首、南部町岩代八首、南部町南部一首

となつて、岩代の歌が最も多いのであります。そしてその理由は云うまでもなく、有間皇子の悲劇にあります。現に岩代の歌八首を見ますと、その中の二首は皇子自身の御作でありますし、他の四首は皇子を追悼して後の人々が詠んだもので、皇子とは全く関係のない歌は、わずかに二首を数えるに過ぎません。これを考えましても、若い皇子の痛ましい御最期が、どれほど当時の人々の心をゆり動かしたのかが、わかると思ふのであります。なる程岩代と云う処は、なだらかな丘陵が南をうけて温かく、海をへだてて遙かに牟婁の湯を望み景勝の地であります。しかし正直に申し上げますと、これくらいの地は、紀州の海岸にはまだ外にも沢山あります。したがつて若し有間皇子の事件がなかったならば、これほど多くの歌を「万葉集」にとどめたかどうかは、甚だ疑問であります。また有間皇子の悲劇があつたにしても、「日本書紀」の記事にのみに終わつていたならば、岩代の地がこれほど広く世に知れたかどうか、甚だ疑わしい次第であります。

岩代の浜松が枝を引き結び……

と云う皇子の御歌につづく、数々の歌があつてこそ、岩代の名が広く永く伝えられて来たのであり、また伝えられて行くことであります。これを思ひますと、芸術の力の偉大さ、いやこう云う氣負つた言葉を辞めましても、和歌の徳の大きさを、しみじみと感ずるのであります。

さて、そうしますと有間皇子とは如何なる方か、そしてお痛ましい御最期とはどんなことであつたか、これは、御集まりの方々に申し上げるまでもございません。先日も平野一良氏や小谷緑草氏は「紀州新聞」に詳しく書いておられました。或は私などよりも、余程詳しく御存知かと思ふのであります。順序として一応お話し致します。

有間皇子は第三十六代孝徳天皇の皇子であります。ついでに当時の皇位継承の順をザッと申し上げますと、

三四代舒明天皇——三五代皇極天皇（舒明天皇の皇后）——三六代孝徳天皇（皇極天皇の弟）——三七代齊

明天皇（齊明天皇の重祚）——三八代天智天皇（舒明天皇・皇極天皇の長子中大兄皇子）

となります。

つまり第三四代舒明天皇が亡くなられて、次に位についたのは、舒明天皇の皇后であった皇極女帝でありま  
す。皇極天皇はやがて位を弟の孝徳天皇におゆずりになって、御自身と舒明天皇の間に生まれた中大兄皇子を  
皇太子に立てました。後の天智天皇であります。したがって孝徳天皇の皇子である有間皇子と、皇太子中大兄  
皇子とは従兄弟同士の間柄になります。

ところが中大兄皇子は現代で云えば、実行派藤原鎌足と組んで、当時宮中で勢力のあつた蘇我入鹿を誅し、  
つまり、クーデターを断行して、大化の改新を遂行しました。自然宮廷の実力は中大兄皇子に帰し、孝徳天皇  
は政治からは、浮き上がった存在でありました。その一つの例として、西暦六五三年白雉四年の遷都の奏請で  
あります。

そのころ都は長柄豊崎の宮、今の大阪城の辺りにありましたが、皇太子中大兄皇子は、大和の地に遷都する  
ことを願ひ出ました。しかし孝徳天皇の御許しが出ないとすると、母の齊明上皇と妹である孝徳天皇の皇后、  
間人（はしひと）皇女や、百官を引きつれて、さつさと大和の地へ引きあげてしまいました。後に一人残された  
孝徳天皇は、非常にお怒りになり、一時は退位をさえ決意されているのでありますが、その時皇后に贈った歌  
に、

かなき着け吾（あ）が飼う駒は引出せず 吾（あ）が飼う駒は人見つらんか

と云うのがあって「日本書紀」に見えております。「かなき」は鉄の首枷くびかぎで、刑罪の道具であります。こ  
こでは馬の首にはめる木でありましょう。歌の意味は、

頸に綱をつけて引き出すこともようせず、可愛がっていた馬を、人が来て無理やりに連れ去ってしま  
ったよ

ぐらいになって、皇后を駒に例えたものであることは説明するまでもありません。最愛の皇后を強引に連れ去  
られ、一人ぼっちになった天皇の、云いようのない淋しさが、惻々そそくとして胸にせまる思いがいたします。この  
事件が直接の原因となったか如何かはわかりませんが、天皇は間もな難波の宮で亡くなられました。そしてど  
うしたことか、さきの皇極天皇が再び位につかれました。これが三七代齊明女帝で、中大兄皇子は相変わらず  
皇太子として、政治の実権を握っております。

孝徳天皇の皇子である有間皇子が、皇太子中大兄皇子に対しどのような気持ちでいたか、また中大兄皇子も  
有間皇子をどのような目で見ていたか、およそ想像がつくと思います。

さて、このように宮廷には、何かもやもやした空気がたちこめていた折から、齊明天皇の四年十月（六五八）  
天皇は有間皇子の勧めもあって、皇太子中大兄皇子や間人はしひととともに、紀伊・牟婁の湯（今の湯崎温泉、崎の湯が

それだと申しますへ出かけられた。その不在中のこと留守官の曾我赤兄が有間皇子に、齊明天皇には三つの大きな失政がある

その一は、倉庫を建て大いに民の財を集めること。今で云えばカレンチュウキユウ（苛斂誅求）と云うことでしょう。

その二つは、長い運河を穿つて公の財を費やす。これは国費の乱費と云うことでしょう。

その三つは、船で石を運び積んで丘となす。

が、これである。よって今、皇子が事をおこすならば、必ず天下の支持を得るであろうと、そそのかしたのであります。漸く十九才、しかも皇太子に対し日頃から快よからぬ皇子は、うっかりその氣になり、赤兄を己の味方と信じ、

「我が年はじめて兵をもちう可きなり」

と受けて起つ決意を示されたのも、強ち無理と申されません。当然のことながら、皇子にもやはり、皇位に對する野心もありましたでしょう。

十一月五日、皇子は曾我赤兄の家を訪れ謀をこらしたが、席上不吉なことがあつて、そのまま別れた。ところがその夜、赤兄は俄におおくの人数を催し、皇子の家を囲んでこれを捉え、使いを紀伊牟婁の湯に行幸中の天皇の許に走らせ、有間皇子謀反を報じました。紀伊からは折返し、皇子を護送すべしとの命令が届きました。

よって十一月九日、皇子はいまの奈良県生駒あたりにあつた自邸から、皇太子の許に送られ、十一日牟婁の湯に着いたようでありますから、その七十里、二百八十軒ばかりを飛ばしています。無論馬を用いたのであります。それが、それにしても今日から見ると、想像もつかぬ強行軍で、そこには皇太子中大兄皇子の勝利者としての、威猛高な姿を感じますが、従兄弟同士と云ういたわりや、優しさは少しも見られません。

○

○ 岩代の浜松が枝を引き結び 真幸くあらばまたかへり見ん

○ 家にあらば筈に盛る飯を草枕 旅にしあらば椎の葉に盛る

有名なこの二首の歌は、御承知のように、有間皇子が牟婁に護送される途中か、或はその帰り途かに、岩代の丘で詠まれたものであります。もし行く途中の事とすれば、大体十一月十日の昼頃となりましょうか。無論これは陰曆のことでありますから、只今で申しますと十二月十二、三日にあたりましょう。

さてこの二首は牟婁へ行く道の作か、それとも牟婁から帰り道の作かとなりますと、題詞の

「有間皇子自傷結松枝歌二首」

とだけでは、余りに簡単すぎてどちらともきめ手がなく、万葉学者間にも諸説があります。かように専門学者間にすら異論があるのを、素人がとや角云うのは物笑いの種であります。強いて申すなら、私はやはり歌の調べ、皇子自ら不吉な運命を予感されているかのような、深い哀愁の調べなどから、これはどうしても、不安に戦おののきながら、しかも一縷いちぢるの希望をかけて、牟婁に赴かれる途中の作と考えたい。そうしますと

真幸くあらばまたかえり見ん

が一層切実に感ぜられると思うのであります。

○

さてこれはともかくとして、牟婁の湯に着いた皇子は、休息するひまもなく、直ちに皇太子中大兄皇子から、鋭い尋問を受けました。その時皇子は只、

「天と赤兄と、知るのみ、我はもはら知らざるなり」

とのみ答えられたと申します。確かにこれはおかしい出来事であります。有間皇子に対し斉明天皇の失政をかぞえ、皇子を謀反にかり立てた張本人は、実は外でもない赤兄であった。それであるのにその赤兄は、忽ちにして皇子を捕らえ、手の平を返すように皇太子の前へ突き出したのであります。明らかに皇太子と赤兄は共謀して、皇子を陥入れようと仕組んだ芝居だったと、見られても仕方ありません。

「天と赤兄と知るのみ、我はもはら知らざるなり」

この短い一言には、十九才の皇子が既に赤兄の謀略を看破して、「天」の中に皇太子をも含めて、千万無量の抗議が見られるようであります。古代専制政治の傷ましい犠牲者と云えましょう。

かくて皇太子の裁きを受けた皇子は、疲れた体を再び大和に護送され、岩代の丘を過ぎました。さきの二首の歌が想像の如く、牟婁への途中の作とすれば、皇子が歌を詠んで祈念した如く、恙がなく岩代の松を見ることを得ました。しかしその運命は余りにも悲しく、十一月十五日、海南市と海草郡加茂村の間の藤白峠に於いて、皇太子の命を受けた数名の手によつて、十九才の生涯を終えられました。

○

話が長くなって恐縮しますが、これから皇子の短歌の内、「結松」の一首に一寸触れて見たい。

○ 岩代の浜松が枝を引結び 真幸くあらばまたかえり見ん

今から千三百年前、皇子が深い感慨をこめてこう御読みになった岩代の丘には、今もなお何代目かの結松が

植え継がれ、歌の通り正直に、その小枝を引き結んでおります。全く結松の歌は、どう読みかえしてみても、皇子が松の枝を結んで、わが身の無事を祈ったとより受けとりようはありません。しかしよく考えて見ると、皇子は歌のとおり、あんな風に松の枝を結んだのでありましようか。

また松の枝を結ぶと云うのですが、それならば一本の枝を輪のように結んだのでしろうか、或は二本の枝を結び合わせたのでしろうか、それとも縄か緒の如きもので結んだのでありましようか。この歌だけでは一寸判断がつきません。然し、田舎育ちの私には、松の枝を結ぶと云うことが納得できない。少なくともある不自然さ、或は無理が感じられます。何より証拠に自分でやってみるとよくわかります。これはなかなかうまく結べるものではありません。強いて結ぼうとすれば、雄松の枝なら大抵折れてしまいます。先ず松葉が遠慮会釈なく手に突きささって痛い。うっかりすると、松脂がネットリと手を汚します。如何に捉われの身とは云え、都の貴公子であつた皇子が、そんな骨のおれる事をしただらうか。これは大いに疑わしいと思ひます。

こう云う疑問を持つて私は既に久しいのでありますが、最近になつて国文学者で、また民俗学者でもあつた折口信夫(しのぶ)博士や、現存の人では池田弥三郎氏がこのことを論じ、それは松の枝を結んだのではなく、松の枝に物を結びつけたものだとしてあるのを読んで、大いに我意を得たと感じたのであります。

もつとも物を結び合わせると云うことは、古代に於いて広く行われていた素朴な信仰でありました。したがつて万葉集中には、草を結ぶとか、紐を結ぶとか詠んだ歌が実に多く、ザツと見たところでも、紐を結んだ歌が二十余首、草や松を結んだ歌が十首近く見受けられました。

これについて民俗学者であつた西村真次氏は、これは何れも模倣マジックである。模倣マジックというのは、自分の要求するところのものを、類似の形式で表現し、そうした模倣によつて、その目的を達しようという信仰である。即ち草や松の枝や紐を結ぶことによつて、相離れている男女が再開し、短くなつてゆく生命をのびし、去りゆく幸福をつなぎとめるものであると説明しております。

中国に於いても古く、柳の枝を結ぶと云う風習があつたと聞きましたが、この風習は中国や日本だけのものか、或はその他の国々にもあつたものか私は存じませんが、ここに一つ不思議に感じますのは、万葉集にはこれほど数多く頭れている「結び」の風習が、それ以前の記・紀の歌謡には一つも見かけません。実は私は、「結び」の風習が万葉集時代に突如として現れたものではあるまいから、万葉以前の歌謡にも必ずあるに違いない。一つ見つけ出してこの席で披露して大いに博学ぶりを示そうと、俄に、岩波書店の日本古典文学大系中の、古代歌謡集を、二晩か三晩のぞいたのであります。見落としたのか一首も発見できなかったものであり、がっかり致しました。どうも不思議なことであります。

さてそれはそれと致しまして、池田弥三郎氏の云うには、草と草とを結び合わせると云うことはできるかも知れぬが、松の枝を結び合わせると云うのはどうもおかしい。これについて考えられることは、松に物を結びつけることである。例えば神に物を差し上げる場合には、じかに置かないで、ものに結んでさし上げると云う上げ方がある。

ずっと後世のことであるが、芝居などで、殿様に直訴する場合、訴状を青竹に挟んで渡したりする。恐らく岩代の結び松と云うのは、岩代の松の枝にものを結びつけて、そして岩代の神に物をさし上げたのに違いない。

私は岩代の浜松の枝を引き結んで、こう云う方式で、あなた様土地の神であるあなた様にさし上げます。

どうぞこの祈りの効果があらわれて、私が健康であつたなら、再びあなた様をここで拝みましよう。

「結松」の歌はこう云う歌だと説明しています。成程このよう解釈すると、あまり無理がなく、この歌が理解できます。

それは無論その通り、池田氏の説く如く神に供養する一つの方式であつたのでありましようが、同時にそれは西村真次氏の説くように、結びのマジックが根本であつて、ただ松の枝であるために、物を結びつけると云う容易い形式に、一つの変化をしたのだと思うのであります。

話が急に飛躍しますが、現代も用いられてる言葉に、契約を結ぶとか、縁を結ぶと云う言葉、或は子供が約束事をする時、「指切りかみ切り米一升」など云い乍ら、指をまげて絡ませる風習がありますが、これなども考えて見ますと、案外その根本は、有間皇子の「結松」の歌に見える、古代人の風習から来ているのではないかと云う気がするのであります。これはまだ、どの民俗学者も申しておらないようであります。（おわり）

## 由良町畑の六斎念仏について

「紀州新聞」昭和三十五年一月十三日掲載

昭和（一九五九年）三十四年も押しつまった、暮れの二十七日由良町興国寺の古川華凌老師から「大正大学の五来重教授が来山されている、一度遊びに来るように」との御連絡をいただいた。人伝の御連絡であつたので、五来教授が何のために由良に来られたのか、詳しいことはわかりかねたが、教授はわが国の仏教民俗の権威者であり、以前高野山大学に居られた頃、その主宰されていた雑誌「仏教民俗」を二度ばかり戴いた因縁もあり、色々お話

しを承りたいと、年末のいそがしい折柄ではあったが、やりくりして二十八日午前興国寺へ御伺いした。

老師にお目にかかると教授は由良町畑と門前に遺っている、六斎念仏を調査のために来山されているのとこので、既に畑の念仏講員が三人見えていた。

全くうかつな話だが、由良町に六斎念仏が伝承されているとは、気がつかなかった。恐らく私のみでなく、日高地方の所謂郷土研究家と称せられる多くの方々も、そうではないかと思う。無理もない、これまでの、どの郷土関係の文献にも、一向この記事は記されていない。

「紀伊続風土記」もそうだし、「紀伊国名所図会」もそうだ。また比較的新しいものでは、「日高郡誌」も、「南紀土俗資料」も全くこれに触れていないのはよいとして、原胤衛氏編の「由良村誌」までがこれを逸している。また先年結成した由良文化研究会の方々からも、それらしいお話を伺ったこともない。それ程両地区の六斎念仏は細々と伝承されて来たのである。



由良町畑の六斎念仏は

後藤 佐之助 八十 才

後藤 重三 六十一才

谷口 繁雄 五十一才

の三氏が中心となり、芳養佐兵衛・芳養克次・山本喜市・芳養増次郎・山中善蔵・山中楠五郎・木内豊吉の諸氏を講員とし、毎月十二日の法灯国師の命日に、講員の家に集まり、国師の絵像をまつて、百万遍の大数珠をくりながら念仏をする。またお盆には請待を受けた新仏の家や、部落の葬送の際にも念仏し、長谷寺や興国寺のお十夜にも念仏をつとめるといふ。

いま講中の最年長者である後藤佐之助翁の言によると、今から五十年ぐらい以前というから、たぶん明治の末年か大正初年頃のことと思うが、この地に芳養五左衛門とよぶ老人が居った。五左衛門は天性美声で、殊に六斎念仏が上手であった。五左衛門について山中善蔵とよぶ人も念仏が上手で、五左衛門の弟子格にあたる。後藤佐之助翁はこの山中善蔵の許に、二年程通いつめ六斎念仏の伝授をうけた。

しかし六斎念仏は昨今流行の歌謡曲と違い習得がなかなか難しい上、時代の嗜好もあって、一般世人の興味がうすく、仲間に加わる人が少なかった。わずかに佐之助翁を中心に、熱心な二、三人が細々と伝承したにとどまる。

とところが昭<sup>二</sup>和<sup>三</sup>十年代<sup>四五</sup>日支事変戦没者の公葬が、畑地区長谷寺で行われた際、たまたま会葬者中に同町阿戸

の濱上楠松氏があつてこれを聞き、まことにゆかしい貴重なもの故、是非とも長く伝えてゆくようにしたいと、佐之助を励ました。これに力を得た数名はそんな価値のあるものなら、何とか我々の手で保存してゆこうと今日にいたった。

佐之助翁が山中善藏に習った時も、善藏が五左衛門から伝授を受けた時も、口から口へ口承されただけで、記録は何一つなかった。古くからこのように、親から子、子から孫へと云いつぎ語りつぎ、うたいついで来たのであった。しかしそれでは何かのはずみで煙滅の虞もあり、且つ習い覚えるのに不便であると気づいた佐之助は、習い覚えた数篇を、ともかく筆録して伝えていく。まことに美しい、ゆかしい話である。

○

そもそも、それなら六斎念仏とは何か。実は私もこれについては何の知識もない。大慌てに手許の諸書の記すところを転載すると

盆会の際京都附近で行われる念仏踊りの一種で、空也上人が布教のため、六斎日に勤行した念仏踊りに始まり、浄土宗西山派祖証空上人より三代目の法孫・道空が確立した。後、道空は京都烏丸常行院を兼帯しここに住み、美しい音声で衆生済度の縁としようと歡喜の念仏を創唱し、文永二年<sup>二二六五年</sup>龜山天皇から六斎念仏の号を賜った。

とある。したがって念仏の唱和には鉦や太鼓の楽器をはじめ、遂には謡曲から脱落した曲も加わり、和讃ともなった。

後藤佐之助翁筆録するところの畑の六斎念仏には、南無阿弥陀仏の念仏のほかにも、

六道のうげの辻にたつ我等を助けたび給え

にはじまる、六節からなる「六道」と称する唄。

あら玉の年の初めの言葉にも、南無阿弥陀仏はきらうまじ

以下、八節からなる「あら玉」と称するもの、

箱根山あがりて拝む無常の瀧

と、唄い出す、「賽の河原」とよぶ、かなり長い和讃調のもの、「じぶだらく」・「せんがん寺」・「姫子」・「こきよ」・「ゆうざう念仏」等の九種目がある。

私の知るところでは由良町のほか、県下で六斎念仏の継承しているのは、有名な有田郡花園町の「仏の舞」

と、伊都郡天野村の六斎念仏があり、何れも県の無形文化財に指定されている。そのうち伊都郡天野村の六斎念仏は、昭和三十一年十月一日、伊都郡三好村志賀、伊都郡地方民俗研究会刊行の「伊都郡の隅から隅」、副題「天野村民俗誌特輯」に収録されているが、これを見ると南無阿弥陀仏と念仏のくりかえのみで、由良町の如く唄がないため、素人の私達には何か物足りなさを感じしめる。

○ 由良町の六斎念仏について、五来重教授の説によると、

法灯国がまだ高野山で修行中のころ、高野全山に念仏が栄え、国師はこの念仏に一種の振りを付けた。念仏踊りの一種で六斎念仏の初期の姿の一つである。もつとも当時は六斎念仏とは云わず、萱堂念仏、或は持斎念仏と称し、六斎念仏の名が出来たのは、国師の寂後百五十年ぐらいの時期である。この時国師が一種の振りを付けた念仏踊りが、いまも遺る興国寺の松明踊りと思われる。

また当時高野山ではあまり念仏が流行するため、応永二十四年（一四一一）ついに念仏禁止の触が出た。しかし、この時も国師がはじめたと伝えられる萱堂念仏は、この限りでないと除外されている。

話は別になるが六斎念仏の作曲者は、現在大体わたったが、この人は日本音楽史上不世出の人物と云われている。またこの六斎念仏の節回しを、何とか楽譜にのせたいと、いろいろの人が苦心されたが、やはり西洋の発声法と根本から違うので成功しない。

また六斎念仏の最も古い形は融通念仏であるが、由良町畑のそれには、融通念仏がのこっている。これから考えても、よほど古いものであるろう。

○ 以上が大体五来重教授からの聞き書きのあらましであるが、何しろ教授は念仏講員の唱和をテープレコーダーに収めるのにいそがしく、そのあい間あい間のお話しであり、私も惚忙しの際のことで、聞き漏らしや聞き誤りが多かろうと心配される。しかし記憶の薄れぬうちに、ともかく一応書きとめてみた。

なお書き漏らしたが、畑の六斎講員が講をつとめる際は、紋付、羽織・袴を着ける。このため夏は特に紹の羽織を用意している。また念仏がすんだ後は、三角形の握り飯三個を出して、会食するのが古例となっている。

五来重教授は、六斎念仏は仏教民俗学上、極めて貴重な存在である。地方としても講員にのみ任せず、町当局なり由良町教育委員会なりが中心となり、保存の道を講じてほしい。さしあたり今回は畑、門前両念仏講の唱和をテープレコーダーに収めて大正大学へ保存するが、せめてテープレコーダーにとっておくなり、記録を

とっておく必要があると、しみじみと語られていた。  
これについて思い出されるのは、昨年誕生した由良町文化研究会のことである。会の事業として大いにこれ  
をとりあげ、この調査なり研究なり保存なりに、是非とも一役買ってほしいものである。切に各氏の奮起をお  
願いする。私も近く機会を見て、今度は門前地区の議員の方々をお伺いの上、いろいろお話しをお伺いしたい  
と思っっている。

—昭和三五・一・三誌—

## おらが国の夏蜜柑

「たばこ大阪」昭和三十五年三月十五日掲載

一本の樹で20〜30貫

### 花の香り流れる日高地方

黒潮あらう南国紀州は、わが国でも屈指の果樹王国で、紀北地方の富有柿をはじめ、有田の蜜柑に至っては  
あまりにも有名であるが、これに勝るとも劣らぬものに、出張所の所在地、御坊市付近の夏蜜柑がある。

天王寺を発した紀勢本線が、和歌山市からもの一時間半、紀伊由良の長いトンネルを過ぎるあたりからは、  
列車の左右の目に入る限りの丘と云う丘は、すべてこれ枝もたわわに実る黄金色の夏蜜柑畠が続く。

晩春から初夏へかけての五月ごろから六月初めごろ、夏蜜柑の花盛りで紀州路を走る列車の窓から、この花  
特有の強烈な芳香が流れこんで、旅人の心を思わずハッとさせる。それほどこの地方には夏蜜柑が多く、また  
花の香りが強い。

×

×

×

さて、この夏蜜柑は柴田柱太郎編「植物事典」によると、

夏柑または夏代とも書かれ、早田文蔵博士によると、ザボンとコトウカン（虎頭柑）の雑種と推定され、  
山口県青海島の原産ともいわれ、今は山口県よりも愛媛、和歌山県に多産される。

とあって、和歌山県では蜜柑の産地有田郡あたりに入ったのが初めと思われる。

そして、それを日高郡に移入して今日の夏柑王国・日高を築いたのは川辺町入野の人、古田幸吉翁である。

翁は明治三十八年（一九〇五年）家業の農業を継ぐや、従来の米麦作のみに依存することの不利をさと、夏蜜柑栽培の有利なことに着眼し、まず試験的に六畝程の畑に植えこみ、漸次改良して今日に至った。

夏蜜柑の収穫と出荷は、もうそろそろ始まっている。一月ごろから遅いのは六月頃まで出荷する。だが何と云っても最盛期は四、五月頃で、この頃は中心地御坊駅から連日夏蜜柑列車が何本も出るが、直接トラックで京阪市場へ送られるものも多い。

日高地方の夏蜜柑の生産額は約三百五十万貫といわれ、現在の相場は貫百円の高値を唱えられているから、年間夏柑だけで三億円内外の現金が農家の懐へ転がりこむ。したがって、当地方の夏蜜柑栽培農家は至って裕福である。

当地方を旅行する人々は、いづれも車窓から望む農家の構えの立派なことをいうが、すべて夏蜜柑が稼いだのである。最盛期の夏蜜柑の樹一本で二十数貫から三十貫近い収穫がある。金額にして一本二万円から三万円になる。こんなのが家によると数十本はある。文字通り金の成る木といわれるゆえんでもある。（御坊出張所）

## あとがき

一、今回も昭和三十二年十二月三日から三十五年三月十五日まで、父がおもに「紀州新聞」に投稿し、スクラップブックに保存したものをデジタル化した。「清水長一郎遺文集(3)」とした。

郷土資料あり、随想あり、整理してすつきりすべきとは思ったが、そのまま発表した。

一、記事の大半を占める史蹟顕彰会の史蹟探訪は、読むと本当に参考になる上、感心するのは、当時の人は集合地に汽車やバスで集まり、そこから徒歩で移動して史蹟を見学し学習したのだ。健脚だったのだ。

一、時代も進み、父の投稿にも所々に写真が添付されるようになったが、只でさえ紙面が変色し、活字さえ読みづらいのに、写真は猶更鮮明さを欠く上、掲載すると容量が大きくなるため省かせて貰った。

一、今と違って印刷物は、鉛活字を文選工が一字一字拾って文章としたので、文選工の癖か活字が少なかったのか、校正で気付かなかったのか、誤植と思われる個所が気になったが、そのまま打ち込んでいる。

一、今年の夏は暑さが厳しく、九月の残暑も凄かった。

十月に入り日高路はこれから稔りの秋に感謝する秋祭りの到来だ。

平成二十四(二〇一二)年十月三日(水)

清水 章博